ななしのワーズワード

奈久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ななしのワーズワード

【Ｎコード】
Ｎ３８１７Ｙ

【作者名】
奈久遠

【あらすじ】
世界最悪のサイバーテロリスト『ワーズワード』。彼は己の生命をかけたある計画を実行するが、それは原因不明の失敗に終わってしまう。結果、地球とは全く異なる世界に飛ばされてしまい……そして、ワーズワードの冒険が始まる。

Warp World 01

ある『計画』を立ててみた。
今日までの仕込みは上々である。

◇◇◇

オープンテラスのカフェスペースでランチの到着を待つ間、俺はエアロビューを立ち上げ、暇つぶしをすることにした。

そういえば、『ワーズワード』の名で呼ばれるようになったのはいつからだったか。
自分の脳内にある記憶野を検索しても良かったが、ネット上の検索サイトの方が、よほど手間がかからない。

ワーズワード　による検索結果　　約　1，768，400　件
（0．832　秒）

検索結果の上位には、ニュース記事及び、それをネタにした掲示板へのリンクが並ぶ。
そこに躍る文字は、どれも物騒なものばかりだ。
21世紀最悪のサイバーテロ。破られた世界最高のセキュリティ、崩れたＣＯＩＮ神話。犯罪史上最大の被害額。麻薬カルテルを壊滅、正義の使者ワーズワード。情報提供者に賞金支払５億ＣＯＩＮを検討――

エアロビューを流れる同じような記事、そのどれもが自分の行いの履歴だが、その中でもっとも目につくのはやはり、『ＣＯＩＮサーバーハッキング事件』を取り扱ったものだろう。

ＣＯＩＮ――Ｃａｓｈ　Ｏｂｔａｉｎａｂｌｅ　Ｉｎ　Ｎｅｔｗｏｒｋ　ｓａｖｉｎｇｓ――は世界統一通貨サービスの略称及び、そのチャージデバイスの愛称である。

これまで無数に発行されていた、いわゆる電子マネーが全世界規模で統合されたのは何年前の話だったか。

統一通貨名については、元と円が早々に負け、ユーロとドルとの一騎打ちとなったが、アジア諸国及びアフリカ勢の強烈な横やりにより、最終的には新たな統一通貨名『ＣＯＩＮ』が正式採用されることとなったのだ。

そしてチャージデバイスとしての『ＣＯＩＮ』は、亜金属製の円貨型デバイスで統一されている。この場合の円貨とはジャパニーズ『Ｙｅｎ　ｃｕｒｒｅｎｃｙ』ではなく、丸いタイプの貨幣、という意味だ。

直径３ｃｍ大、やや大きめのＣＯＩＮは、掌に握りしめて認証デバイスにかざすことで認証される。

ＣＯＩＮには世界最高のセキュリティとして、『ミーム認証』が用いられた。

『ミーム』とは、人類のみが持つ個人識別が可能な情報遺伝子である、らしい。らしいというのは、それは完全に『ＣＯＩＮ』に特化されたブラックボックステクノロジーであり、一般にはミームなるものの技術情報は一切公開されていないからだ。

２１世紀の巨人。ノーベル・サイバーテクノロジー賞３年連続受賞のサー・エクシルト・ロンドベル教授の完成させた、このミームなるヒト識別技術はまさに完璧であり、世界最高と言うに異論はなかった。

だが、それは破られた。

正確には俺が破ったわけだが。

ハッキングに成功したとはいえ、そこはさすがの世界一の技術の詰まったサーバーである。
俺がそこにアクセスできた時間は、３分３２．５５０秒のみ。
そんな短時間で行えたのは、事前にリストアップしておいた、チャイニーズマフィア・コロンビアカルテル・ジャパニーズヤクザと言った、暴力と麻薬で生計を立てている人種に関連するＣＯＩＮ口座のセベラルパーセント、１２６万８０５２口座の残高を０に書き換えることくらいだった。
もっとも俺の興味はミームなる技術の解析にのみあり、その後の口座消去はただのお遊びだったのだが。
だったのだが、世の中的にはそのお遊びは思ったより大事だったようで。
電子空間に溶けて消えた闇資金は日本円にして２７兆２０００億あまり。単一個人が起こした事件の被害額としては、世界一となった。
もちろん口座情報だけでなく、入出金明細、ミーム情報、バックアップもキッチリと消してあげたので、削除された口座を復旧させるには、厳正な本人情報確認が必要とされた。削除された内の２６．８５％は口座名義人が名乗り出ることなく、また本人確認に訪れたアホの子がその場で逮捕されたりと、一連の報道はなかなかの盛り上がりを見せた。
手を抜かないからこそ遊びは面白いのだ。
ネット上の無責任な議論は、その被害者が犯罪集団であることに対する喝采と、世界最高のセキュリティを突破したその技術力の高さを賞賛する方向に傾き、名もなきサイバーテロリストは一時英雄

と呼ばれた。

だが続いて、被害者の数十万人が世界中で同時多発的に発狂した。

そんな、地球を沸騰する地獄の釜の底に突き落とす事態となっては、その名声も地に落ち、俺は世界最悪の犯罪者として、めでたく憎悪の対象へと昇華した。

『ワーズワード』の名はその頃から呼ばれ始めたものだ。調べてみると当時無名の俺に懸賞金をかけるにあたり、米国『ＳＴＡＲＳ』が付けた識別名（コードネーム）であるとのこと。

ほう、それは今初めて知った。

『ワーズワード』という響きが気に入った俺は、その後の印核軍事施設乗っ取ってみるテストや、ハッキングした人工衛星影像による金成恩（キム・ソンウン）８，７６０時間追跡動画をＩｔｕｂｅ（アイチューブ：フリーの動画投稿サイト）で公開した際には、その名を使わせてもらった。

米大統領選の電子投票ジャックは、民主党候補のアホが「いまだ核物質を放出し続ける日本に、その収束まで継続的な懲罰金を課すべきである」などと、アホなことを言い出すから、仕方なくやっただけである。大変遺憾である。

とはいえ、選挙地図を真っ赤にしたのはやりすぎだったかもしれないな、反省。

ハッキングがばれた後の再選挙でもアホの方は普通に落ちたので、別にやらなくてもよかったかもしれない。

その行動のどれもが世界に衝撃を与え、やがてワーズワードの名

を知らぬ者はなくなり、俺はついに世界の敵たる２３人のテロリスト――『エネミーズ２３』――の中でも最高賞金首の指名手配犯となった。

あらゆる人類の生存活動から、既にして切り離せなすことのできない電子ネットワークの領域を脅かすこの俺は、まごうことなき世界の敵だ。

それを俺は否定せず、また自らの行動に、一切の後悔も反省もない。

『できるからやった』

――それだけだった。

Warp World 01（後書き）

折角ユーザー登録したので、お話を投稿してみるテスト

Warp World 02

「お待たせいたしました」

そこで、ようやく注文のランチパスタが到着した。

道路に面したこのオープンテラスには心地よい陽射しが降り注いでいる。

やはり食事は明るい場所で取るのがよい。

そして、これが最後の食事になる。

俺はパチリとエアロビューを閉じると、スプーンとフォークを手に持った。

◇◇◇

俺の帰宅を識別したハウスキープシステムが、自動的に室内をライトアップし、気温の調整を始める。

ＰＣルームにつく頃には、『アイシールド』もすぐに装着可能な状態にスタンバイされる。

パソコンの主流は、汎用機からデスクトップ、ノート、スマートフォン、エアロビューと、その時代を反映して変遷してきたが、やはり最新のヘッドマウントタイプ、『アイシールド』は最強だろう。

モバイル利用はエアロビューで我慢するしかないが、感応入力の

快感と、球面立体ディスプレイの感動を一度覚えてしまった者が、ＧＵＩ（Ｇｒａｐｈｉｃａｌ　Ｕｓｅｒ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ）のみをサポートするオールドＰＣに戻れるはずもない。

アイシールドを装着した俺は、思考により行動し、思考により喋り、思考により存在する、ネットの住人たる仮想体（アバター）となる。

アバターは正式にはＶＵＩ（Ｖｉｒｔｕａｌ　Ｕｓｅｒ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ）といい、感応入力をサポートした第三世代インターフェイスである。

ネット上のオープンスペースに出れば、自分と同じような、それでいて千差万別のアバターにすれ違うことができる。

通貨がネットワーク上でやり取りされる世界経済がリアルであるならば、アイシールドにより、実現される仮想世界もまたリアルである。

アバターというインターフェイス上で、巡回サイトをチェックし、エアロビューを展開し、動画を見たければテレビを付ける。

新聞紙コンテンツでニュース配信を受け取り、動画再生時は映画館アプリを利用する。

それは、現実世界の自分自身となんら変わらない行動様式だ。

『パソコンとネットワーク』が創りだす仮想の空間は、人類にとっての、もう一つの世界として成立していた。

時計を見る。時計は１４時１２分、帰宅後２０分が経っている。

「さて、そろそろ時間だな――」

ネット内でサードディスプレイを立ち上げ、中国国家航天局の人工衛星「中天王８８」にアクセス。

コンソール起動、キー入力、全てが3秒以内に完了する。物理的な行動を必要としない感応入力は思考の速度がそのまま、操作速度となる。
俺くらいアバターを使いこなせるようになれば、下手なマクロを起動させるより、その場でリアルタイムコーディングを行った方が早いくらいだ。

手早く中天王88のサテライト・ビューをハッキング、近地上観測モードに切り替える。
中天王シリーズのメインOS「大鵬（ダーペン）」は純中国産、オープンソースでもここまで酷くないだろうとの評価を受けるセキュリティホールの固まりだ。
その割に、並列処理の性能は比較的高く、一機あたり、200～300のバックドアプログラムをパラレル実行できる。
サテライト・ビューの解像度は高くないが、シリーズ100機を超える人工衛星で、ナゼカ日本国土のほぼ全域を網羅（カバー）しているため、日本国内のパブリック、またはプライベートスペースをライブ中継するには、大変優良な機体なのである。

地上監視カメラをコントロールし、ターゲットポイントにズームをあわせる。
ズームするポイントは、俺のこの家だ。

大通りには覆面パトカーが10台と外交官ナンバーを付けた防弾ジープが5台、裏口方向に自衛隊の車両が3台。パーキングにはJ一テレの報道車、空中を舞うヘリの姿も見える。

警察は想定内として、そうか、マスコミも動くか。

地上をちょこちょこと私服警察官が歩き回る。家を取り囲む人数

はＳＴＡＲＳと自衛官を合わせて、４０名程度。アメリカ国家安全保障局（ＮＳＡ）直轄のサイバーテロ対策部隊『ＳＴＡＲＳ』最高閣議は、武器を持たない民間人一人の拿捕には作戦チーム１０名体制で十分だという結論を出したはずなのだが、なるほど日本政府が横やりを入れたわけか。世界の敵たる『エネミー２３』、それも史上最悪、最高賞金首のサイバーテロリストが日本人では都合が悪かったのであろう。

警視庁を前面で動かし、テロリスト逮捕の瞬間を全世界に見せしめるＴＶショーにしたてあげ、日本の警察が捕まえたのだという、大義名分が欲しかったというわけだ。

俺としても日本の評価を下げることは本意ではない。心から賛成できる作戦変更だ。

ＳＴＡＲＳとしては、その横やりによって逆に俺を取り逃がすのではないかと心穏やかでなかろうが、まずは安心して欲しい。

万が一にも俺を取り逃がすことはないし、パソコンには俺がワーズワードであるという最小限の証拠も残している。誤認逮捕の線はない。

そもそも、ワーズワードの拠点情報を流した匿名さんはこの俺なのだ。その信用度は１００％だろう。

今日は世界の敵『ワーズワード』が逮捕される日だった。

Warp World 03

キンコン

家のチャイムが鳴らされる。

これは、来客を知らせるものではない、作戦開始のカウントダウンの合図だ。
ＳＴＡＲＳ及び警官たちの強制突入まで、あと３０秒。

ではこちらもそろそろ『計画』を開始しよう。
そしてそのためにはまず『ミーム』について、少し解説を加えねばなるまい。

◇◇◇

ワーズワード始まりの事件、ＣＯＩＮサーバーのハッキング。
目的は『ミーム認証』という未知なる技術に対する純粋な興味だったのだが、それをハックし、本質を理解するにあたり、俺は大いなる驚愕に包まれた。

『ミーム』は、個人認証を目的とした単なるヒト識別技術ではなかった。

ミーム情報は、個体を識別する情報でありながら、常に変化する。
変化しながら、それでいて常にユニークな個人を指し示す。

最初俺は、それを毎秒変化するパスワードのようなものだと認識していた。
だが違うのだ。
例を出そう。
生まれたばかりの赤ん坊のミームを記録したとする。
赤ん坊が成長するにつれ、ミームも増大、複雑化する。だが、それで居て同じその赤ん坊個人を示すことができるのだ。

赤ん坊が青年になる。するとミームは変化する。
青年が食事をする。するとミームは変化する。
青年が恋をする。――するとミームは変化する。

不本意ながら、あえて、形而上の言葉を借りて説明するなら、遺伝子がヒトの『肉体』を形作る情報であるならば、ミームはヒトの『魂』そのものの情報なのである。

『魂』で納得できなければそれを『脳』と呼び替えてもよいが、ミームの本質はシナプス配線構造という物理的なものではない。形而下ではそれを説明できない、故に『魂』だ。

そして。

そして、世界銀行協力のもと、天才サー・エクシルト・ロンドベルはヒトから『魂』の電子的コピーを抽出することに成功した。それが『ミーム認証』技術というわけだ。

世界銀行の秘匿する『ミーム認証』が、魂を認証する技術だと理解したときの俺の興奮は、黒歴史として、永久に抹消せざるを得ない。

そして、『ミーム認証』がブラックボックステクノロジーとして秘匿されている理由は、技術的な話ではなく、神学的な理由に由来するのであろう。

とかく、神の領域を犯す科学技術は、非人道の烙印を押されるものだからな。

ミームについてはこの俺でさえ、その利用法・識別方法を解析できただけで、原理的には全く納得できていない。

だがそれが対象個人を誤差なく識別できることに間違いはなく、俺というイレギュラーさえいなければ『ＣＯＩＮ』システムのセキュリティは、最低２０年は破られなかったはずである。

……まぁ、自画自賛は置いておくとして、その技術をハックし、ミームの本質を知ることとなった俺は、その更に上を行く計画を立てた。

魂とミーム情報は完全なる相似形を保つ。ならば、魂とミームの存在位置を置換することができれば、魂の在処が肉体である必要はなくなるのではないか？

それが俺の発想の原点である。

これは単なる妄想ではない、今の俺――パソコン内のアバターとして思考・行動している状態――が、形だけであれば、まさに『肉体なくして俺自身が存在する』状態そのものだからだ。

この計画により、俺の真なる魂はネット上のアバターに宿り、俺の身体はそのコピー『ミーム』のみを宿すことになるだろう。魂なき肉の塊というやつだ。

成功すれば今後必要なくなる肉体（からだ）だが、それはそれ。長年使ってきた愛着ある俺の肉体だ。

身よりのない俺には、抜け殻となった肉体を維持してくれる親類縁者が居ない。

大手の病院施設に費用を支払えば、ある程度は可能かも知れないが、脳死状態の俺の扱いに対する信用度が低い。

その点、『ＳＴＡＲＳ』は信用できる。

俺のパソコンには物的証拠として、法廷で立証できるだけのものは残していないため、必ず俺自身の自供が必要となる。

彼らは、俺の生命の維持に全力を傾けてくれるだろう。

追求のために。

裁判のために。

正義のために。

それも全て無料でだ。

ドンッドンッ――ガシャン！！

ジャスト、３０秒。

ＳＴＡＲＳ及び、警官たちの強制突入が開始された。
同時に自衛隊の手によってこの家に対する外部電源供給停止、電波ジャミング（ネットワーク封鎖）が行われる。さすがにそれは対策済みだが。

サイバーテロという個人レベルの犯罪に対しては、結局人間という物理リソースを利用した直接的な武力行使こそが唯一にして、最大の効果を持つのは間違いない。
金属弾頭の制圧兵器により、リビングの強化ガラスが割られ、ハウスキープシステムが警報を発する。
玄関も同じような状況だろう。

全ては、計画通り。
何も知らせてはいないが、『ベータ・ネット』の連中の反応も楽しみだ。

それではそろそろお別れしよう。
さらば、俺の肉体。

俺はそれ以上の感慨もなく、淡々と実行キーを押した。

そして――世界が変わった。

Ｗａｒｐ　Ｗｏｒｌｄ　０３（後書き）

『ミーム』についてはあくまでこの物語の中での取り扱いを説明しています。
一般的にｗｉｋｉられている概念とは異なるものですのでごりょーしょーお願いします。

つまり「この作品に登場する全ての個人・団体・概念等は架空のものであり、ザッツオールフィクションです」ＯＫ？

Warp World 04

まるでブラックホールに吸い込まれたかのような、強烈な引力。
それは一瞬の出来事。めまいに似たよろめきと共に、一歩を歩き出したことで、そこに大地があることが認識できた。
いや、”歩く”という認識がまずおかしい。アバターにとって、歩くという行動は、歩くという思考であるからだ。
つまり、思考なき行動は、未だ俺には肉体があるということを意味する。

まさか、失敗、したのか。

考えられない。

だが、まずは現状認識が先だ。
疑問を解消するには、情報が足りない。

それは決して、強靱な精神力の賜物というわけではない、情報不足こそが最大のリスクであると判断した結果の、理性的な行動である。

今度こそ、しっかりと大地を踏みしめ、あたりを見渡す。

……は？

そして得られた膨大な情報の前に、今度こそ、俺の思考は完全に停止した。

俺が今いるのは、林の中の小径であった。道は平坦ではなく、登

る道と下る道、山間を通る林道か、あるいはそのまま山頂へ続く登山道であるのかもしれない。
高く林立する樹木の群れは、まるで先が見えないが、整地された小径は人の存在を感じさせ、孤立の不安を湧かせることはなかった。
日は高いようだが、高い樹木に覆われた小径に落ちる木漏れ日は少なく、林の中にしては鳥の声も少ない。
それに恐ろしく林気が濃い。濃密すぎる負のイオンは逆に五感を狂わせ、あるいは幻惑するかのようであった。
というか。
……実際にイオンが目に見える。
木々の間を漂う光の粒。大小様々で、小さなものはおそらくゴマ粒程度、大きなものではピンポン球サイズのものもあるため、全てを粒と呼ぶには多少難があるかもしれないが、まあ便宜上『粒』と呼ぼう。
光の粒は、色とりどりである。基本的に白と緑が多いが、中には黄色や青、赤いものが混じっている。視界を遮らない程度に空中に漂うそれは、自分で言った手前の否定になるが、おそらくイオンなどではないだろう。どちらかというと、ネオンの方が近い。
すっと、手を伸ばして見るが、思った通り触ることができない。触れた瞬間消えてしまったり、あるいはすり抜けたりする。
そして、それはただ漂っているわけではなく、ごく弱い磁力で引き寄せられる砂鉄のように、俺の身体にまとわりついてくるのだ。
触れない割に手で払うという行為は有効らしく、軽く手を振ると

散らすことができる。

これは一体なんなのだろう――

そこで、俺はもう一つ、この光の粒が集まっている場所を見つけた。

小径に面する、一本の木の裏のあたりになにやらわだかまっているのだ。

「――なにかあるのか？」

声に出した瞬間、

チャキ――

金属が擦れ合う音が聞こえた。

右も左もわからない今の状況では、全てを警戒するべきだという判断の元、その危険性を認め、行動の優先度をその確認に割り振る。

音のした場所へ回り込んだ瞬間、その目前に突きつけられた鋭利な鈍色の反射を認め、俺は脚を止めた。

そこには『武器』を構えた、識別：第一接触者の姿があった。

「杓失・・杓失酌軸爵写釈漆灼鴫柴酌」

そして、理解のできない言葉。

「……そうきたか」

俺は、『武器』の危険性よりも、現状認識につながる大きな情報の取得ができたことに、思わず綻んでしまった。

識別：第一接触者の発した言葉が日本語でないことは確定であり、また英語、中国語といったメジャーな共用語ではない。

もちろん地球上には俺の知らない言語もあろうが、俺はそれを、識別外言語であると認定した。

それを肯定する材料の第一が相手の姿である。

そこに居た識別：第一接触者は女性だった、いや……十代の少女と言った方が適切であろう。日焼け一つない、雪の結晶で作られたような白い肌。基本白人の特徴を持ちつつ、髪は青。染めているのでなければ、地球上には存在しない髪の色。耳も不自然に長い。

背丈は俺より２０ｃｍほど低い。年齢に合致した身長というよりは、栄養の足りていない人間に見られる、成長不全だろうか。

それを証拠に、少女を構成する身体のパーツ一つ一つが、全て細いのだ。当然のように胸も薄い。

だがそれは、その少女を美しいと表現することをなんら拒否するエレメントではなかった。

事実、美しいのだ。

少なくとも俺は、これほど美しい造形を持つ生身の人間を見たことがない。

その色素の薄い露草色の瞳には、警戒とおびえの色があった。

そして、第二にその衣服。

視線を落とせば、少女が身に纏うのは、金属部分に錆が浮き全体として赤黒く変色した革鎧と、その下には質の悪い麻製と思われる

上下。足元はメーカー印もない、粗末な革製の靴。
手には、これまた博物館でしかお目にかかれないような、アイアンソード。
その重さに耐えられていないため、何ともアンバランスな姿勢になっている。

青い髪と透き通る肌を持つ、まるでおとぎ話から抜け出してきたような少女に、そぐわぬ使い込まれた革鎧。
以上二点を現実をして受け取るのであれば、そんな人間の存在するここは地球ではなく、それゆえ、その言語は識別できるはずもない。それが俺の判断だった。

そもそもアイアンソードの時点でありえないだろう。もしここが地球上であれば、それがどのような最貧国であろうと、武器は銃である。

再度己の心の中に、言葉を落とす。

ここは俺の知る地球ではありえない、と。

Ｗａｒｐ　Ｗｏｒｌｄ　０４（後書き）

ここまでのまとめ：スイッチオン→異世界　で４話消費。

Warp World 05

ここは地球ではない。
その己の判断を支持、即座に「常識」という物事の枠組みを捨て去り、まずはそこまでの認識を持つ。

何も判然らないという状況に代わりはないが、「何も判然らないことを前提に情報を取得すべき」だという行動方針が策定される。
であれば、次なる行動は相手に対する前提条件の付与である。

「落ち着け。そちらの言葉は通じていない」

俺は『日本語』で、言葉を紡いだ。
驚きと共に、少女の露草色の瞳に困惑の色が混じる。
そこで少女も気付いたのだろう、言葉が通じていないことに。

その共通認識こそが俺の付与した前提条件。
少女を、言葉が通じないという自分と同じ盤上に立たせたのだ。
今後のやり取りは、その共通認識を前提に進めることができる。

「写釈漆灼鴫柴酌？」

おそるおそる、次なる言葉を続ける少女。
俺はそこから、次なるタスク。その言語の解析作業を開始する。

始め、こちらを警戒していた少女。
得体の知れぬ相手とコンタクトを取る場合の言語選択としては「何者であるかの誰何」「敵味方の判別」「警告」あたりが推測される。

さらに、こちらから「言葉が通じない」ことを直接的に伝えた際の反応が、更なる警戒ではなく、困った様子であったことを考えれば、敵対意志に重きを持っていない、つまり「何者であるかの誰何」に属する言葉であったと仮定される。

そこを起点に、前提条件の付与前後での共通部分「灼鴫柴酌」（の発音）がその「何者であるかの誰何」に属する意味であると、まずは推測する。

その「まず」という仮定を起点に、次は、検証を行う。

この場合の検証とは、それが「あなたは誰ですか？」と言う意図の言葉であると仮定し、同じ言葉を出力する行為を指す。

「灼鴫柴酌？」

補助として、異言語間でもっとも有効な言語「ボディランゲージ」――柔和な表情と手の平を相手に向ける動作――を交えて検証を行う。

もし先ほどの仮定が間違っているのであれば、間違っていることに属した検証結果が返ってくることだろう。

その時は先ほどの仮定が否定されたと判断し、次の仮定を元に検証を行えばよいのである。

検証結果は明快であった。

「杓、杓鴫柴荵邉紗屡鹿」

少女は少し安心した表情で、そして幾分緊張気味に、革鎧の上に手を沿わせ、そう答えた。

とりあえずは言葉が通じたことに安心したのだと理解して、間違いない所作であった。

先ほどの仮定を正として、そこからさらに解析を進める。一歩前進だ。

先ほどの言葉が「あなたは誰ですか？」の意味であるのだから、次の言葉には自己の名前を明かす意味が含まれているのだと推定する。

そこに含まれるべき言語体系としての蓋然性、主語の存在を解析する。

おおよその言語では主語は、文頭にくる可能性が高い。そこに着目すれば先の少女の言葉の文頭にあった「灼」と「杓」、発音の類似性からみても、これが「灼＝二人称（あなた）」と「杓＝一人称（私）」であると仮定することは難しくない。

主語につながっており、かつ単文の中で多く出てくる「鳴」の発音部分は単独で意味を持たない接続語であると類推し、解釈上無視する。

同様に名前に関するやり取りから「柴＝氏名」の意味、かつそれ以降を氏名の固有名詞であると仮定する。

固有名詞はその意味を追う必要はない。発音そのままのでよい。

であれば――

紗屡荵邉鹿＝シャルローフェルニ。それが彼女の名か。

まず少女と指さし、

「灼鴫柴『シャルローフェルニ』」

「簾！」

コクコクとうなずく少女。長い耳がピコピコと動くのは感情の表れだろうか？

問題なく、通じているようだ。

そして、次は自らの胸に手を沿わせ、

「杓鴫柴――」

……そこで、一つの思考が挟まれる。

俺の名前。当然日本人として名乗るべき、呼ばれるべき名がある。

だが、俺は先ほどその肉体に別れを告げたばかりだ。

であれば、俺の名乗るべき名は、

「杓鴫柴――『ワーズワード』」

であるべきだろう。

「簾！　爍璽爍遉！」

こちらを指さす仕草。ちゃんとコンタクトが取れたことに、喜びのままの笑顔になる少女。

アイアンソードの切っ先は既に取り下げられ、その重みで柔らかい腐葉土にめり込んでいる。

意志疎通の第一段階がクリアされた瞬間であった。

始めにあった警戒は、こちらがあまりに無防備であること、さらに片言であれ言葉が通じることで払拭されたらしい。
もちろん装うまでもなく、敵対意志はないのだから、これを機にさらなる解析と検証を進めさせてもらう。

わからないものをどの程度わからないのか判定する。次に手持ちの情報を元に順次解析する。
データを取得し、仮定し、検証する。仮定が間違っていれば、立ち戻り、訂正を行う。
その繰り返しを一つのプラクティス単位とし、反復を繰り返す。つまり会話を続けることでその精度を高めていく。

それは驚くべき言語感覚と映るかも知れない。
だが、『世界最高のハッカー』と呼ばれた、俺にとってはなんら苦のない作業。

そう、これはハッキングである。

その対象がコンピュータプログラムから、不明な言語に変わっただけである。
もちろん、ここにエアロビューの一台でもあれば、その効率は更に上がることだろうが、俺にとってはデータの展開先が、パソコンのメモリ上であるか己の脳内であるかの差だけだった。

どうと言うこともない。さあ現状分析を続けよう。

Warp World 06

「えっ、本当に、全く言葉がわからなかったんですか？」
「正確には今でもわかってはいない。俺の言葉が通じているのか、シャル――君の反応を常に確認している」
「ちゃんとお話できていますよ。最初だけわかりませんでしたけど、その後は全然」

林中の小径を、下る方向に歩きながらの会話である。
シャル・ロー・フェルニ。見た目上の年齢は十代前半。
線の細い少女であるが、だからといって性格までが細いわけではなかった。
一度警戒がとけた後は、積極的に話しかけてくるため、日常会話レベルなら支障なく会話できるまで言語解析がすすんでいた。

「それは君のその目のお陰だな」
「目？」

自分の目が見えるわけでもなかろうが、むぅと瞳を中央に寄せようとしている姿がコミカルである。

「俺の国にはこんな言葉がある。『目は口ほどにものを言う』と」

ただ発声だけのやり取りであれば、これほど短期間には解析が進まなかったであろう。
表情豊かな彼女の仕草一つ一つが解析情報の手がかりとなり、検証効率を高めたのである。

「目で喋るんですか！　わ、私はそんなことできませんよっ」

驚きに、彼女の大きな露草色の瞳が、更に見開かれる。
「いや……それは物の例えであってだな。こちらの場合で言えば『耳は口ほどにものを言う』か？」
「こんどは耳？」

小首をかしげるかわりに、その長い耳がへにょりと折れる。
この世界の人間の特徴なのだろうか？
彼女の感情に合わせるかのように、ピコピコと動くその耳は見ていて飽きない。

「ちょっといいか」
「はい？」

さわっ

気になったので、触ってみる。
瞬間、ビクンと、シャルの身体が硬直した。

「ッ！」
「ふむ？」

やわらかい。

さわさわっ

さわさわする回数に合わせて、シャルの新雪の肌が徐々に赤熱し、露草色の瞳がまんまるく見開かれていく。

「皃、」
「ぴ？」

「皃靆霪熙熙皃熙罕――！」

林間にこだまするほどの高い声が、響き渡った。

キーンと突き抜ける耳鳴りに耐えつつ、

「すまない、今のは聞き取れなかった。もう一度頼む」

俺は冷静にその言語の解析に入る。

ズザッっと跳ね飛ぶように身を離すシャル。耳が針金でも入ったかのようにピーンと、立っている。

それを両手で隠して、半涙目で、俺を睨み付けるシャル。

睨み付けるその表情もまた、魅力的である。

「にゃ、にゃにをしゅるのですかぁ！？」
「耳を触らせてもらっただけだか」
「み、み、耳れすよっ」
「耳だな」
「だ、だめでしょ！？」
「だめなのか？」
「あ、あたりまえですっ！」

なぜか口調が乱れているシャルに対しあくまで冷静な受け答えを行う。

その淡々とした姿にシャルは、大きくため息を落とすと、

「そうでした、ワーズワードさんはこのあたりの人ではないんですよね。……今回だけは許します」

日本からきたということはすでに伝えてあったが、シャルの中では「どこか遠い場所」というインプットがされたようだった。

日本が別の世界にある、などということは想像の埒外だろう。俺も細かい状況を伝える気はない。

情報取得の作業を優先するためだ。

「そうか、ありがとう」

「今回だけですよ！」

「わかった。次からは許可を取ることにする」

「きょ、許可なんてしませんっ！」

真っ赤になりながら、断言するシャル。

たわいのない、じゃれ合いのような会話。

こんな会話をしたのはいつぶりだろう。

……いや、おそらく俺自身で言えば、そんな経験はないはずだ。

ドラマかアニメか、作られたコンテンツの中のキャラクターが行っていたものを、己の体験として錯覚したのだろう。

それを寂しいことだと考える人間もいるだろうが、まあ今時の若者の経験値など、そんなものだ。

「……うう～、ワーズワードさんはいじわるです（小声」

その小さな呟きもしっかりと耳に届いているが、意図的に無視す

る。
　折角コミュニケーションがとれるようになったのだから、質問したいことは沢山あるのだ。
「それより、さっきから空中に漂ってるこの光の粒がなんなのか、教えてくれないか」
「光の粒……ですか？」
　シャルにまとわりついているのは、主に白い光の粒である。
　俺の方は、色とりどり、手で払わないと視界が遮られるほど集まってきてうっとおしいのだが、シャルの方はそれほど多数ではないため、気にならないのだろうか。
「なんですかそれ？」
　シャルがきょとんとした表情で、問い返す。
　丁度、その大きな瞳の前を、大きめの光の粒が通過するが、シャルは全く反応しない。
「……見えていないのか？」
「ええっと、光なら見えていますが」
「それは、地面にできた木漏れ日の円だろう」
「これだ、これ」
　試しに、自分にまとわりついているものの内、一番目立つ赤色の粒を指さしてみるが、
「ん～、すみません、わかりません」
　耳をへにょりとさせるだけだった。

それはそれで、十分な検証結果である。
シャルに見えないものが俺に見えている、という情報が得られたわけだ。

Warp World 07

「あの」
「なんだ」
「こんな山の中に突然現れるなんて、ワーズワードさんは殃濬椣なんですよね？」
「殃濬椣？」
「はいっ、傷を治したり、遠い距離を転移したり、雨雲を呼び寄せたり！」

……ふむ、科学的な話ではなさそうだな。「殃濬椣＝魔法使い」くらいに置換しておくか。
しかし、中世さながらの鉄製武具に、魔法などというファンタジーまで存在するとは……いや、逆にそれくらい物理法則を無視する『超理』があったほうがまだ今の状況は説明できると言うものか。

「いや、違うな。俺はただのワーズワードだ」
「普通の人にはみえませんよ？」
「確かに耳は長くないがな」
「み、耳の話題からはもう離れてください！」

いい反応である。
このネタはしばらく引っ張れそうだ。

「その無邪気な微笑みが逆にこわいです……あの、じゃあ、これからどこへ行かれるんですか？」
「正直決めかねている。この場所にいる理由も実はわかっていないんでね」
「じゃあ、お国に帰られるんですか？」

……それには即答できない。

帰る――帰ることができるのか。

帰れたとして、俺の肉体は今頃、拘置所の中だろう。

いや、それの思考にも破綻がある。

今ここにある肉体はネットで使っていたアバターの姿ではない、生まれ育った俺の姿だ。

肉体ごと転移したというのなら、あれだけの完全包囲を敷いておきながら、俺を取り逃がした日本警察とＳＴＡＲＳは、今頃ネット上で大いに笑い物にされていることだろう。

その祭に参加するためだけに、帰りたい気持ちはある。

だが、現時点でその方法はわからず、そもそも肉体ごと転移したという発想も違和感がある。

肉体ごとの転移であれば、それは神隠しとも言うべき、可能性コンマ以下フォーナインの世界だ。

自室で、あのタイミングでそれはありえないと考えて良いだろう。俺の計画のどこかにバグがあり、その結果が今の状況につながったと考えるべきである。

しかし、現時点では完全に情報不足だ。

「……帰りはしない。仮に、それを目的にするにしても情報がたりない」

「情報、ですか」

「ああ、もっと情報がほしい。会話はシャルのおかげで、多少できるようになったが、現状認識が正確ではなければ、必要な情報の取

捨選択ができない。この地の人間がどれほどの文明レベルを築き、どのような生活をしているのか。シャルの言う魔法使いとやらにも興味がある。もっと情報の集まる場所へ行きたい」
「な、なるほどっ。難しい話なのですねっ」

……理解を放棄してまで、無理に相づちを打たなくてもよいのだがな。

「……あー、村とか町、そういった人の集まる場所に行きたいということだ」
「あ、それなら行き先は一緒です！」

弾んだ声。初めてあった相手になぜこれほど気が許せるのか俺には謎だ。

「ここ、ニアヴ治林を超えれば、『愈洒釈薹』はすぐですし」

愈洒釈薹＝ユーリカ・ソイル。
新しい単語である。文脈を考えれば、土地の名前か国の名前だろう。

「『ユーリカ・ソイル』はこの国では二番目に大きい街ですし、その情報っていうのも売ってると思いますよっ」
「いや、買うものでは……いや、買う場合もあるか。そこまで同行してもらえると言うことか？」
「はいっ、もちろんです！」

耳がピコピコと激しく上下する。
自分が、人の役に立てることが嬉しくてたまらないといった様子だ。

喜びを隠しもしないその姿は、俺に若干のとまどいを与える。

高度にネットの発達した現代において、人は知識に、感情に、無知ではいられない。

ネットを利用するものが無知であるのは、リスクである。

単なる無知は蔑まれ、更なる無知は攻撃され、金を持つ無知は喰い物にされる。

結論として、アホはネットを使うなということだが、生活から切り離せない以上、人はどうやっても清濁併せ持つネットに適応しなくてはいけない。

自らの全てをさらけ出すのはアホのすることだというのは、これはもう常識である。

まず疑う、必要以上の情報を出さない。明るく振る舞うのも、バカをやるのも、ネット上に自分で作り上げた人格であり――それは純粋さとはかけ離れた、計算されたものだ。

だが、シャルは違う。

俺は何一つ彼女に信用されるような言動を取っていない。

『相手を信用することが人間関係の始まりです』

そんなコミュニケーションは地球では絶滅している。

全く……ここでは地球の常識は通用しないではないか。

この地は確かに、異世界であった。

「ユーリカ・ソイルまではまだかかりますし――」

ネット上に復元されるべき俺の魂が、この異世界に飛ばされたことは、自分の能力にマイナス評価を与えるべき、計画の失敗ではあるが、

「――もっと色々お話できますねっ」

シャルの笑顔を見ていると、その全てが失敗ではなかったと、そう思えるのも事実だった。

Warp World 08

俺の今居る場所は、ニアヴ治林という場所であり、直近の街ユーリカ・ソイルには日が沈むまでにつけるらしい。
ちなみに固有名詞については、自分で理解しやすいようカタカナ表記できるレベルに脳内意訳しているので、厳密な発音としては正確ではない。
シャルに話す際には、こちらの言葉にエンコードしなおして発声しているため、そこでの意思疎通に問題ないというわけだ。

◇◇◇

相変わらず、まとわりついてくる光の粒がうっとおしい。
シャルは、自分に見えないものが俺には見えていることに、不思議さを感じてはいないようだ。
シャルにとっても、俺は異なる文化圏から来たよそ者である。
異文化交流で相手を否定せずありのまま受け入れられるのは、知性が高い証だ。
剣やら鎧やら、ぱっと見の文明レベルは低そうだが、この世界の教育レベルは案外高いのかもしれない。
それとも、シャル個人の資質に由来するものだろうか。

「少し時間を取ってしまいました。急ぎましょうか」
「諒解した」

申し訳程度だが、縁石が敷かれた小径。
歩くことに難はなく、かつなだらかに下る道なので、体力に自信

のない俺でも大丈夫だろう。

歩き始めた瞬間、道の前方で、ただ漂っているだけだった光の粒の動きが乱れた。

思わず立ち止まる。

「どうかしましたか？」

「……いや」

１０つの大きめの光の粒が一定間隔を置いて、空中の固定される。そして、光の粒が弾けた。

「くっ」

「きゃ」

眩しさに、思わず目を覆う。この光の爆発はシャルにも見えたようだ。

直後、声が響いた。

「――そこで留まるがよい」

目の前に、唐突に、巨大な一匹の虎が出現していた。

物理法則をあざ笑うかのようなその出現は、全く持ってファンタジーである。

「あ、あ、あ」

シャルの顔からは既に血の気が引いている。

ぺたりと腰を抜かし、耳は降伏の証のように垂れ下がっている。

少なくともそのお腰に付けたアイアンソードの出番はなさそうである。無駄な抵抗的な意味で。

……しかたない。

俺は一歩踏み出すと、シャルを後ろに庇うようにその生物と対峙した。

「ほう、お主は恐れんのか？」

虎が、くっくっと嗤う。

四肢をついた状態で、その口の位置は俺の頭を越えている。

立ち上がれば、４メートルは軽く超えそうだ。

「……逃げない理由は三点ある。一点は、お前が言葉を喋れるという点だ」

「ほう」

「わざわざ姿を現し、声をかけてきたということは、俺達に即座に危害を加えるつもりが無いということだ」

俺の言葉に、真実は半分ほどしか含まれていない。

実際はこのような化け物と言葉が通じるからといって、それがそのまま安全であるとは考えていないからだ。

「くっくっく、我の姿を見て、恐れぬ理由がそれか。ではあとの理由はなんだ？」

なおも嗤う虎。

安全と判断した、二点目の理由、それはどうもこの虎は張りぼてであるようだからだ。

……声は確かに目の前の虎が発している、ように見える。
だが、俺の目には、虎がリアルな立体影像にしか見えないのだ。
先ほど弾けた１０つの光点は、虎の額、口、首、背、手足、そして尾の位置でいわば星座のように、今も輝いており、それが虎の皮を被っているだけにみえる。

実体のないものを恐れる理由がない。
そして、さらにもう一つ。

――俺は、虎の更に後方、背の高い木へと視線を延ばす。

「――ッ、　貴様、どこを見ている！」
「ひっ！」

シャルの小さな悲鳴。
俺の視線に気付いた虎が威嚇する。が、その行為自体が、墓穴である。
俺の考えが正しいことを裏付けるだけの行為だ。

そう、俺の見る先、木の高い枝に俺やシャルのような光の粒が集まっているのである。
そして、そこから、糸を引くように光の筋が虎へとつながっている。

「二点目は飛ばして、三点目だ。……自分の姿を現さず、裏に隠れているような相手を恐れる理由がない」
「――なんだと」

俺の視線は既に虎をみていない。

「冷静に行こう。そちらの意図は知らないが、少なくともこちらに敵対の意志はない。話がしたいなら姿を現せ。それでこそフェアというものだろう？」

……これもまた半分は真実ではない。

有利に交渉を進めるには己の位置を明らかにすべきではないからだ。

だが結果、相手が姿を現そうと、隠れたままだろうと、どちらでも良い。

挑発を込めた俺の言葉に対する反応で、まずは相手のレベルを判断できる。

ボールを投げ、その反応を検証する。検証結果からより己に有利な結論へ到達すべく、相手を誘導する。

これもまた、ハッキングの手法である。

俺は危険を感じるより先に、新しい情報が増えることに喜びを感じていた。

ふいに、虎の口調が変わった。

「くっくっくっく！　お主、なかなかに面白いわな！」

それは女の声であった。

Warp World 09

ガサリと音を発して、木の上からそれが、飛び降りてきた。
その身には、やはり光の粒がまとわりついている。
想定通り、この光の粒は人間、あるいは生き物にまとわりついてくる習性があるのだろう。

虎を左に従えるように降り立ったその姿は、

「……狐？」
「いと聡き汝に敬意を表し、我が身を顕そう。妾はこのあたり一帯を治める『ニアヴ』」

それは人の姿をした狐だった。
中世風のシャルと異なり、緩やかにそして大きく胸元の開いた布の衣装はまるで浴衣か巫女服か。
茶色く毛の生えた獣の耳、大きく太い尾。人語を話す狐の化生といえば、もうそれは決まっている。

「……九尾だと」
「九尾？　どこから見ても一本しか生えておらぬがのう。お主の目にはどのように見えておるのじゃ？」

おっと、俺としたことが、つい口に出てしまった。

「ま、まさか本当に、ニアヴ様っ！？」
「ふふん、無論じゃ」
「知っているのか、シャル」
「は、はい。街や村を治める群兜（マータ）様がいるように、森や山にはその

地を治める濬獣(ルーヴァ)様がいらっしゃいます」

判然らない単語はマーキングしておき、後で解析するリストに加えることにする。

「濬獣様の治める土地では、人は獣に襲われることはなく、交通の安全が保証されるといいます。お姿を見たのは、私も初めてなんですけど……」

「深き山林は人の地ではない、故に侵すべからず。だが、人もまた神の嘉(よみ)したもう子、故に見守りたもう。不侵の条約と引換に、交通を許可すると、ま、そういうことであるな」

得意げに、高らかにのたまわう狐の声。

なるほど、論理的な交換条件である。それでシャルのような少女でも一人で行動できるのか。

「汝らの名を告げよ」

「あ、すみませんっ、私はシャル・ロー・フェルニと申します！」

「……ワーズワードだ」

「ふむ、素直でよろしい。妾の目は、この山林の中であればどこまでも届く。お主らを見守るとともに、無法を働く者がおれば、即座に駆けつけると言うわけじゃ。故に――」

狐の化生――ニアヴが一端、口を閉ざし、凝(じっ)と俺の全身を目踏みする。

「……お主は何者じゃ？　強力な何かが迸ったと思うたら、妾の治地に覚えのない人族が一人増えておるではないか。その上【リープ・タイガー／飛虎】に対して動じず、おまけに妾の存在に気付くとは……くっく、お主、さぞ名のある魔法使いなのであろうな」

ニアヴは、まるで興味深いおもちゃを見つけたかのようににやにや笑う。

一方俺は、

「ふむ、数と大きさ、それに色にも共通点がないか。これでは判定基準にできないな。であれば、単純に光量をその観測単位とするか。どちらにしても正確な計測ができない以上、俺自身を計測基準１００カンデラとして、相対光量を数値化――」

「……は？」

全く別のことを考えていた。

「１００からの相対比。シャル５カンデラ、ニアヴ３０カンデラと言うところか」

やはり、俺の周辺だけ異常に眩しすぎる。

「だからっ、お主何を呟いておる！」
「お前が操っている、この光の粒の話だ」
「光の粒？　なんじゃそれは」
「……見えないならいい。少し待て」
「お主っ！」

ふよりと目の前を横切るそれを、手で払う。
ならばこれは一体なんなのか。

……一つの仮定は既に俺の中にある。

大気中に漂い、触れることのできない色とりどりの光の素粒子(のようなもの)。
それは目の前の虎の姿のように、コントロールできる代物であるらしい。

とすれば――

「すまない、待たせた」
「お主、無礼なのか慇懃なのか、どちらなのじゃ？」
「その判断はそちらですればよい。先ほどの質問だが、俺は期待されている魔法使いという存在ではない。だが、その魔法とやらを使える可能性はある」
「わからぬ言い回しじゃな。結局の所どうなのじゃ」
「そうだな……その魔法というものをここで使ってみてくれないか？」

それで明瞭(はっきり)するはずだ。

「あの、ワーズワードさん。濬獣様はこの山林の守り神様のような存在です。なのでそういうお願いは……」
「だめなのか？」
「よいよい。妾は面白いものが大好きじゃ。見せろというのなら、見せてやろうではないか」

じゃれるように頬ずりをしてくる【飛虎】を撫でながら、ニアヴが鷹揚に答える。

……あれは、実際に触れるものだったのか。実は危なかったのかもしれない。
単なる立体映像と認識してしまった時点で、まだ既成概念から抜け出せてはいないようだ。

この地でのリスクマネジメントレベルをもう少し引き上げた方が良さそうである。

ニアヴがその腕を前方に延ばす。精神を集中していると思われる、数瞬の間。そして、

「――発火せよ【コール・フォックスファイア／狐火】」

Warp World 10

それはまさに力持つ異界の言葉だった。

【フォックスファイア／狐火】

その発声の後、その掌の上で光が弾けると同時に、巨大な黄金の炎が燃え上がった。

炎は、キラキラと高く吹き上がるが、まるで熱を感じない。

「わ、きれい」

「ふふん、人族の使う炎とはひと味違うであろう。【狐火】は意志持つ炎。自然（じねん）の木々を傷つけることなく、悪しきもののみを焼き尽くす我が族の秘術であるからな」

「は、はいっ。こんなのきれいな炎、見たことがありません」

「ふふふん、そうじゃろう、そうじゃろう！　ワーズワード、お主はどうじゃ？」

自慢気に、というよりも、褒めて欲しいオーラを発散させてこちらを覗き込んでくる狐。

だが、その期待はスルーする。検証が先だ。

「こうか？　――【狐火】」

見よう見まねで、握っていた掌を開く。

俺の掌中で光が弾けると共に、そこには狐の産み出したものと同様の黄金の炎が渦を巻いて燃え上がった。

「わ、やっぱりきれいですね」
「……はああ！？？」

二つの炎を忙しく目で追うシャル。
あんぐりと口をあけて、炎をみつめるニアヴ。

なるほど、やはり、そうか。
俺の仮定は正しかったわけだ。

「ばかなっ、なぜ我が族の秘術を使える！」
「見せてもらったからな」
「……技を盗んだというのかや」
「いや、それは少し違う。俺が見せてもらったのは、魔法とやらの発動方法そのものについてだ。初めてにしては上出来だろう」

「は、初めてじゃと！？　ありえん……魔法とは、強大なる力。我ら狐族であれば一族秘伝、お主ら人の子たちとても、国や組織に管理されておるはずであろう！　見たから使えるなどというものではないわっ！」

その勢いに押されるように、シャルが素早い動きでうなずく。
説明責任はないのだが、要望通り魔法を見せてくれたのだから、こちらもある程度の情報開示は必要だと判断する。
逆に言えば、ここで秘匿するメリットもないという判断だ。

「それを説明するのはやぶさかではないが――まず前提として、さっき二人に聞いた『光の粒』について話しておこう。二人には見えていないというが、この林の……大気の中には色とりどりの光の粒が漂っている」
「光の粒じゃと……？」

とまどう様にキョロキョロとあたりを見回す狐。まぁ見えないのだろう。

「そして、この光の粒は生き物にまとわりついてくる性質があるらしい。それはシャル、そしてお前の二人とも同様だ。木の上に居るお前に気付いたのもそれだ。なにせ光っているからな」

「はぁ！？」

それで、気付かない方がおかしいというものだ。

「この光の粒がなんなのか、始めは俺にもわからなかったが、先ほど見せてもらった『魔法』――それで確証を得られた。これは『魔法』の発動に関係している」

それが俺の出した第一の仮定だ。

「……聞かせてもらおう」

身を乗り出すように、食い入ってくる狐。シャルの耳も、その一言一句を聞き逃すまいとピンと立っている。

この目は俺にも覚えがある。新しい知識への期待、知らないことを知る欲求、それは世界が変わろうと、普遍的なものであるらしい。

「そこの虎は、１０つの光の粒が骨格となっている。最も大きい額のそれは黄色。顎にあたる部分が赤。残りの支点が白い粒だ」

俺はそれを一点ずつ指で指し示す。

二人は、頭に疑問符を浮かべながらも、それを目で追う。
もちろん見えてはいないのだろうが。

「次に、実際に見せてもらったこの黄金の炎。火種部分に『それ』が４つ使われている。基底に赤、赤、赤。頂点が黄色の三角錐の形につながっている形だ。お前の手のひらの上で三角錐の形をなした光の粒が、魔法発動の言葉により、発光し、炎に変化、つまり魔法と呼ばれる現象を引き起こした。それが俺の観察した内容だ。つまり魔法とは、この光の粒の組合せとその発動の二点がトリガーとなり発動するものであるのだろう」

ここまでは、単純な理論と観察の積み重ねである。
二人の反応を待つことなく、先を続ける。

「そしてこの光の粒、ただ手を伸ばすだけでは触ることはできないが、邪魔だと思えば、払うことはできた。そこから何かしらの意志を持てば、コントロールできる存在であることが判然る。光の粒を見えないお前や他の魔法使いとやらは、見えないなりの修練や経験則でコントロールしているのだろうが、その動きが見える俺は明確な『光の粒の操作』でその三角錐の形を作り出すことができたというわけだ。結果は見ての通り」

更に言えばその発動におそらく『発声』は必要ない。『発声』の裏にある魔法発動を『念じる』部分のみが必要なのだと思われる。これもあとで検証を行うことにする。

愕然とするニアヴ。

「魔法が光の粒！？　あ、ありえん……」
「よくわかりませんが、すごいですっ！　やっぱりワーズワード

さんは魔法使いだったんですねっ」
「違うと言いたいところだが……一回とはいえ、実際使えたわけだから、否定はしないでおこう」
『ウィザード』という異名もまた、ハッカーとして拒否すべきものではないしな。
「じゃが……いや、それでは説明が……」
ぶつぶつと、何事が呟いている狐はとりあえず放置でよいとして、この【狐火】である。
折角出たのだから、その威力は知っておきたい。
一本の木を照準し、炎の中でくるくる回る三角錐にターゲットを燃焼するよう『念じる』。
三角錐がそれに反応、炎が大きくふくれあがったかと思うと、ターゲットに向かい、一直線に飛行した。
ふむ、我が事だなら、すごいものだ。
劫ッ、とまるでナパーム弾の様に、炎が粘性をもって木に巻き付き、その芯から焼き尽くす。
そういえば、巨大な本物の炎、こういったものを見るのも初めてだ。ネットで火山雷や流れる溶岩の動画を見たことはあっても、やはり目の前に見る本物の炎の圧倒的な感動は別ものだ。
「おお、よく燃える」
「ハッ！　くおおお、お主、目を離した隙に何をやっとるんじゃ！　他の木々に燃え広がったらどうする！」
「そうだな。すまん」
「すまんではすまんわー！　――降下せよ」

狐が慌てて、別の魔法の準備を始める。
俺は、そこに集まる光の粒の動きを冷静に窺う。

見るべきは光の粒の動き――ニアヴにまとわりつく光の粒の中から、青ｘ３、白ｘ３の光の粒が集められ、六角形が形作られていく様が観測される。

「【コール・ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨】！」

発声と同時に、光の粒は六角形を拡大させつつ、燃えさかる木の頂上に広がり、そこに極地豪雨を降らせた。
火勢は途端に弱まり、一面を水たまりに変えて、やがて木の燃焼は完全に消し止められた。

【降鵜雨】――単純明快に大量の水を産み出す魔法と認識する。質量保存の法則に当てはめられられないこの現象はまさに魔法だった。

……これで火と水には困らなくなったな。

狐が不承不承という様子でこちらを向き直る。

「……信じざるを得ぬか」
「無理に信じる必要はないぞ？　どうせ見えないのだろう」

「そういう問題ではないわ、阿呆めっ！　お主が今言ったことは、神の不在証明と同じじゃ！」
「神？」
「え、えっとですね。私は魔法のことは詳しくありませんが、例え

ば火の魔法は戦女神・熙?(カグナ)碎様に授けていただくという話を聞いたことがあります」
「我らの神は人のそれとは違うが、どちらも同じ神が名前と姿を変えたものだと言われておる」

魔法のある世界にも神はいるらしい。
人間とはよくよく偶像崇拝が好きな生き物だ。

「だが、事実だ」
「それが危険じゃというておる！　……お主、下手をすると『世界の敵』になるぞ！」
「……」
「そうじゃ、よく考えることじゃ」

俺の沈黙を、都合良く受け取ったらしい狐がうむうむと大きく頷く。

「光の粒とやらの話。それは危険じゃ。異質な考えを持つ者は必ず排斥につながる。お主が何者かは知らぬが、その力、他の者には隠すべきであろう」
「あ、それでしたら、逆に服装を魔法使いらしくしたらどうですか。それなら魔法を使っても特におかしく思いませんし」
「おお、その方がイザという時にボロが出ぬかもしれぬな、こういうのはどうであろうか――」

どこに意気投合する要素があったのかわからないが、嬉々と対策を上げていくシャルとニアヴ。

輪の外で展開される会話。だがそれらは全くの無価値である。

「盛り上がっている所悪いが、俺は俺のできる全てのことを自重するつもりはない。神の不在証明？　そう思いたい者は思えばいい。俺は魔法と神とは、無関係に存在することを証明しただけだ。魔法以外のもので神の存在を証明すればよいだろう。もし俺が再び『世界の敵』となるとしても、それは俺が世界の敵になるのではない。世界が『俺の敵』になるということだろう」

「ふたたび？」

「いや、そうは言うがな。妾はただ、お主のことを心配してじゃな――」

……同じだ。地球もここも。

「違うな。お前が心配しているのは俺ではなく、自らの安寧だ。俺が自由に振る舞うことにより、自分の生活に生じるデメリットを計算しての結果だ」

「なっ、そんなわけなかろう！」

俺は、怒りをも発するその獣の光彩を正面から見据える。

「……ならば、なぜ真実を隠そうとする？　なぜ己のできることを抑制する？　自らの可能性を塗り潰し、群れに紛れ、誰でもない名無しのワーズワードとして生きる提言は本当に俺のためか？」

「そ、そう言うわけではない。お主のいう魔法の原理とやらは、この世界に大いなる混乱を産み出すと言っておるのじゃ。それを望むというのかや」

「それもまた違う。お前の言う『混乱』、それは『改革』というべ

きだ。この世の成り立ちたる自然原理が一つ明らかになり、それにより古い常識が一つ失われるだけだ。それを拒むお前の発想は変化を嫌った保守という名の『今』の引き延ばしに過ぎない」

ぐっ、と言葉を飲む込む狐。俺の指摘を理解するだけの知性はあるらしい。

シャルにも何かしら琴線に触れる部分があったらしい。今までにない真剣な瞳で話を飲み込んでいる。

音の消えたかのような濃密な沈黙。

十分に沈黙が浸透したことを確認した後、俺は言葉を続けた。

「……だから。もし俺の為だと言うのなら、俺の行動を制限する方向ではなく、俺の行動をサポートする方向で力を貸して欲しい。シャル、君に逢わなければ、言葉もわからず。ニアヴ、お前に逢わなければ、魔法とはなにかも知ることのできなかった身だ。何も知らない俺には君たちの助けが必要だ」

言葉の通り、俺は自分にできることを自重しない。

今の俺にできることは、二人に助力を請うことだった。

Ｗａｒｐ　Ｗｏｒｌｄ　１０（後書き）

※一話５分だと話数だけ無駄に増えそうなので、一話の分量を変更しました。

Warp World 11

まだまだ、俺が一人で行動するには情報が足りていないのが現状だ。
俺はまごうことなき流浪者であり、今一人で行動するリスクは、死に直結するものだ。

「もちろんですっ！　……私は魔法のこととか、神さまのことはよくわかりません。ですけど、さっきのワーズワードさんのお話は、あの……その通りだと思いました！　できることがあるのに……それを諦めて、自分を押さえつけるなんて、確かにおかしいと思います！」
「……ありがとう、シャル」

心強いうなずき。……彼女にもなにか抑圧された経験があるのだろうか。
未だ難しい顔をしたままのもう一人に向き直る。

「俺たちをこのまま通してくれるだけでも良い。行く先はユーリカ・ソイル。このまま別れれば、迷惑をかけることもないだろう」

「……うむう」

是と否とも取れない唸るような返事。
先ほど俺が語った『魔法の原理』、俺だけが見えるという『光の粒』。それは、どうやら非常識なものであるらしい。その上、魔法というものをまるで無自覚に発動させる俺という存在を、同じ魔法の使い手であるニアヴは、そうそう無視できないのだろう。

今のニアヴの感情を一言で言えば迷い。
責任と不安。危惧と興味。風さえ吹けば、どちらにも倒れる弥次郎兵衛である。

つまりそれは――全ての決定権が俺にあることと同義なのだ。

一歩。二歩。腕を組み、思考に深みに嵌り込んでいるニアヴは、俺の接近に気付かない。
三歩。その形の良い顎に右手をすっと伸ばし、グィと少し強引に上を向かせる。

「ふぁ！？　な、なんじゃっ、いきなりっ？」

その大きく見開いた目が左右に泳ぐ、顔を背けようとするが、俺はそれを逃さない。
逆にぐっと引きつけ、瞳と瞳を固定する。
その近さに狐の頬がさっと朱を帯びる。

「迷うくらいならば――ニアヴ、お前は俺についてこい」
「にゃぁ！？」

それは純粋に驚きの声なのだろう。
尻尾がぶわっと太く逆立つ。
後ろで少女の「きゃー」という黄色い声が聞こえるが、完全に無視する。

「な、なにを言って――」
「人と人の出逢いには必ず意味がある。出逢うべくして出逢った。それが今だ」

有無を言わせぬ断言。
正確には、ただの出逢いに意味などない。意味を付けることができるだけだ。
――このセリフのように。
「お前には強い力があり、高い知性があり、誇る美しさがある。だがそれは、観測する者がいて初めて認識されるものだ」
「わ、妾が美しいっ？　ま、まことかっ？」
……反応するところが想定と違ったが、とりあえず肯定しておく。
「森の生活は退屈だったのだろう？　それはお前を観測する者がいなかったからだ。お前にはお前を観測する誰かが必要であり、俺もまた同じだ」
「な、ななな――」
「だから、俺についてこい。それがお前の運命だ」
ちなみに、『運命』という言葉を口にする人間は、アクターか詐欺師のどちらかである。
そのキーワードを出たら、その相手は軽々しく信用しない方がよい。
「……妾は濬獣（ルーヴァ）じゃぞ？」
「関係ない」
「お主のことを危険だと断すれば、寝首を掻くかも知れぬ」
「本望だ」
全ての言葉を肯定する。
この場で即座に死ねと言われたとしても、俺はそれを肯定しただろう。つまり、これは俺にとってそういう意味しかない会話だ。

だがニアヴにとっての意味は別。
一言ごとに、朱色の支配面積が増えていく。
「妾を敬うことも畏れることもしない者など初めてじゃ……」
「それが俺だ」
「……ワーズワード。お主、本当に何者なのじゃ？」
「それこそ自分の目で確かめればいい。俺についてくれば、きっと、おもしろいぞ」
「きゅ、きゅうう……」

手の力を抜き、その身体を解放する。
一瞬名残惜しそうな表情を見せたニアヴだが、次の瞬間には驚異的な跳躍力で身を離した。
「…ふ、ふん！　やはりお主は危険な男じゃ！」
「否定はしない」

背を向け、腕を組み、フンと鼻を鳴らしす仕草は、昔何かのコンテンツで見たことがあるようなないような。
「ふふふ、じゃが！」

振り返ったニアヴが吹っ切れた笑顔を見せる。
「じゃが、妾は面白いものが大好きじゃ！　ワーズワード、お主は面白い。非情に面白いぞ！　よかろう、お主について行ってやろうではないか！」
「そうか。助かる」

扱いやすくて、本当に助かる。

質の良い情報を得るためには、質の良い情報源が必要だ。
シャルの知識が世間一般レベルであるのなら、魔法というものは、一般人が扱うことのできない特殊技術だということになる。
となれば、次に同じく魔法の知識を持つ者に出会える可能性は、かなり低めに設定せざるを得ない。
この身にまとわりついてくる光の粒、これが魔法の源であることは理解したが、それを独自に調査研究していくには、どれだけの時間が必要となるか判然らない。
ニアヴの協力は、俺にとっては不可欠なものであった。

そのために最も有効であると思われる手を、手段を選ばず使わせてもらった。
手垢が付きまくった泥臭い芝居（ロールプレイ）は、我ながら鳥肌ものだったが、結果が出せたので良しとする。
運命の出逢いを演出する過程で、狐になにか別のことを勘違いさせたかもしれないが、誤解を解くのはのちのちでよかろう。

話がまとまったのなら、これ以上のタイムロスは不要である。

「さて、聞きたいことはこの地の木の数ほどあるが――」
「あ、あはははは」
「勘弁してくりゃれ」
「まずは目的の街へと向かおう」
「はいっ」
「ふむ。ユーリカ・ソイルか……考えてみれば人族の街に下りるのも久しぶりじゃな」
「街は嫌いか？」
「くっくっくっ、とんでもない、大好物じゃ！　どんな面白いことが待っておるのかのう」

「……それは重畳」

ニアヴは、巨大な青い虎に飛び乗ると、手招きをした。

「さあ、乗るがよい。【リープ・タイガー／飛虎】の足ならば、あっと言う間じゃ」

「乗っていいんですかっ？」

それを肯定するように、飛虎はくるるると小さく唸ると、シャルが乗りやすいよう、腰を下ろした。

先ほどの虎の言葉はニアヴが遠隔で喋っていただけなのだろう。

たとえ言葉が喋れないとしても、この虎に生物としての思考があるというのなら、それを一瞬で創り出す魔法とはすごいものだ。

完全なＡＩは科学の極みにある地球ですら、未だ存在していないというのに。

「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん」

「くるる！」

「鐙（あぶみ）も鞍（くら）もないだと……振り落とされないだろうな……」

「くふ、心配であれば、妾の腰にしがみついておっても良いのじゃぞ？」

「それは遠慮する」

「即答！？」

「さ、シャルは俺の前に。後ろから支えよう」

「はい、えへへ……」

「くっ、もうよいわ！　行け、飛虎よ！」

「くるるる！」

まだベストの体勢が決まっていないのに、疾走を開始する飛虎。

「ちょま、お、おおおおお！」

三人と一匹は、情けない悲鳴を尾と引く、一迅の風に変わった。
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

Ｗａｒｐ Ｗｏｒｌｄ １１（後書き）

区切りがいいのでここでエピ１おわりっ

Wandering Wonder 01

深緑の中を、まるで風の通り道でも進んでいるかのような速度で駈け降りる。
なだらかに下る林道は、適度な明るさと翳りを持っており、緑の滑り台に乗っているかのような不思議な爽快感があったが、山を下りきった地点でそれもついに切れた。

◇◇◇

ザァ……と、葉の擦れ合う音とともに、一気に視界が開ける。
遙か地平線まで見渡せる開拓された平野は、見事な緑の田園風景であった。
もちろん、地平線といっても所詮は１０ｋｍ程度先にある丘陵まで、という理解になるが、それでもその１０ｋｍ　ｘ　視界いっぱいの緑のパノラマが全てが農地であるとすれば、それは広大といっても過言ではない。

道幅も一気に広がりを見せ、そこに残る轍のあとが、移動手段または農耕用としての牛馬の存在を知らしめる。
つまり、この世界は魔法という超理やニアヴという獣の化生の存在があるものの、基本的な人々の生活は農耕を基とした、地に足のついたものなのであろう。

「見てください！」

飛虎にしがみついていたシャルがまっすぐ前を指さす。

並びはニアヴ、シャル、俺の順。
俺が後ろから抱きしめる形であるため、シャルの腕は、俺の身体の下からニュッと出てきたような感覚である。
その指さす方向、地平の丘陵に人工物の姿があった。
近づくほどにその高さが露わになってくる。形としては、尖塔。日本風に言えば物見櫓であろうか。そのような建造物が道の左右に一本ずつ建っている。

「あれは？」
「ユーリカ・ソイルの塞疫壼（カラソイル）です！」

もちろん、その説明だけでは意味を得ないが、これまで蓄積された脳内データバンクを検索し、即座にその意味を類推する。
まず壼（ソイル）単体で『門』を意味することは、既にわかっている。
次に、『塞疫』（カラ）であるが、同義発声である『寒』が『翼・羽』、『役』が『赤の色名・熱』の意味らしいので、そこから更に類推し『塞疫』の意味は『飛行するもの』『赤熱した』であると仮定できる。

『飛行するもの・赤熱した・門』

最後にそれをより自分にわかりやすい日本語にデコードすれば――

「『朱雀門』か、立派なものだな」

全ては一連の会話の流れの中で同時、もしくは並列解析を行っているので、思考から発声までのタイムラグは微々たるものだ。

「夜になると、塔の先に明かりが灯るんです。すごいきれいなんですよ」
「ユーリカ・ソイルの名物の一つであるな。それも楽しみじゃが、ユーリカ・ソイルと言えば、やはり『アンク・サンブルス』が一番じゃろうな」
「あっ、私も大好きですっ」

『アンク・サンブルス』なるものを知らない俺はその会話には混ざれないが、まぁ楽しみにしておこう。
新しい情報を得ることはなんであれ、重要である。

『朱雀門』を目前に、左右から更に太い道が合流した。
道行く人群れが目につき始める。
馬車や荷車に混じって歩く、軽革鎧姿の旅行者だか冒険者だかが激しく目立って見えるのは、俺がまだこの現実を受け入れ切れていないからだろうか。
彼らの顔を見ていると、男女ともにやはり、耳が長い。肌の色はシャルほどの白さを持つ者はおらず、みな健康に日に焼けている。髪の色は様々である。
同じく、シャルほどの美しさをもつ美男・美女は特に見受けられないようだ。
この世界の人種全てがシャルやニアヴ準拠の美男・美女オンリーで構成されている可能性もあったので、これも世界を知るにあたり十分有益な情報であろう。

もし全員が美男・美女であったら、必然的に俺は世界最悪の醜男ということになるので、よかったかもしれない。
いや、客観の評価では、十分標準レベルだとは思っているが。……受け入れがたい現実から目を背けた、自己正当化ではないぞ？

シャルが、なにやら言いたそうな視線を向けてくる。まさか心が読まれたわけではないだろうが、その視線に一瞬どきりとする。

「……どうした？」

「私たち、目立っちゃってますね」

「……あー」

既に速度を落としている【リープ・タイガー／飛虎】が、一歩歩みを進めるたびに、ひっという声と共に目の前の空間が空いていく。なるほど、やけに顔の善し悪しがわかると思ったら、みな一様にこちらを振り向くものだから、観察ができていたのか。

「くふふっ、目立って当然じゃ！　なにせ【飛虎】は我がっ」

「一族秘伝の魔法なんだろう。それはいいとして、そろそろ降りて歩くとしよう」

みなまで言わせず、巨大な虎の背から飛び降りる。

なにやらわめいているニアヴを完全にスルーし、シャルに手を貸して降ろしてやる。

「くっ、まあいいじゃろう。どのみち街に入るには足税の支払いがあるじゃろうからな。飛虎に乗ったままというわけにはいくまい」

「足税？」

俺の疑問に、シャルが答える。

「えとですね、街の入門には通過税がかかるんです。人は足が二本なので、一人１００旛（ジット）ですね。馬や牛は足が四本ですから、２００ジットになります」

「人の方が安いのか」
「馬や牛は、沢山の荷物を運べますから」
なるほど、そういう計算になるのか。
「六足馬なら足が六本なので、さらに高くて３００ジットになります」
ふむ、西洋系にアジア系、おまけに北欧神話まで入ってきたか。
四面四角論理思考の俺には、ここは耐え難き混沌（ファンタジー）の大地なのかもしれない。
「ちなみに１００ジットというのは、どれくらいの価値なんだ？」
「どれくらい、ですか？」
「そうだな、平均的な宿一泊の値段や、一食分の食事の値段だといくらになるのか、という話だ」
「あ、それなら。ユーリカ・ソイルですと、一泊食事付きで８０ジットくらいが相場です」
その宿をビジネスホテルレベルと考えて約８０００円と計算すると、１ジット＝１００円。足税というのは日本円換算で約一万円程度という理解をしておく。
「足税というのは、思ったよりも高いものだな」
「なにをいうておる。街に入るということは、安全が保証されると言う意味じゃろう。安全が１００ジットで買えると考えてみよ。群れることにより外敵より身を守る、人族が作りだした見事な安全保障の仕組みじゃと、妾は感心するぞ」
狐の言には一理がある。

「前言を撤回しよう。安全はタダではない、その通りだな。教えてくれてありがとうニアヴ」
「お主が素直に応じると逆に恐いものを感じるのう……じゃがまあ、悪い気はせぬ。くふふふふっ」

なにがどう作用したのか、にやにやしながら、俺の肩をぽむぽむ叩くニアヴ。
当然スルーするが。

「さあ、行こう」
「これ、またんかっ！　む、そのまえに……飛虎、よう働いてくれたな」
「あ、ありがとうございます、飛虎ちゃん。またねっ」
「くるるる」

頭を撫でようと、背伸びをするシャルの頬を一なめすると、飛虎は空へ向かって大きくジャンプした。
飛虎の身体を構成する１０つの『源素』がその接続を失う様が見て取れる。
そしてその姿はすっと、宙に溶けるように消えた。

Wandering Wonder 01（後書き）

二章開始です。登場人物が　少し　増える。

Wandering Wonder 02

「『源素』？」
「いつまでも『光の粒』ではわかりにくいからな。魔法と呼ばれる現象の『源』となる『素粒子』、故に『源素』と名付けた」
「その源素とやらが、お主以外の誰にも見えず、世に満ちておるというのか……」

俺の源素理論に対し、完全には納得していないニアヴが、青い空を仰ぎ見る。

「更にいえば、人にまとわりついている源素濃度は、個人差が大きいようだな。前の歩いている商人風の男には、殆どまとわりついていない」
「それはそうであろう。源素うんぬんの話は横に置くとしても、魔法を使える才とは、生まれついてのものじゃろう」

「才というよりも、単なる性質だと言える。源素を身に集める性質だ。魔法の素たる『源素』は大気中に遍く存在している。才というほど本人性能に関わらないのではないだろうか。源素を操る技術さえ身につければ、例え生まれ持って源素を集める性質が弱くとも、それら源素を利用して魔法を行使することは可能だろう」
「……魔法は誰でも使えるということか？」
「結論すればそうなる」
「お主に会ってから、妾の常識が野兎の如く逃げて行くわ……」
「言いぐさだな。あの場で全ての常識を捨て去ったのは、俺の方が先なのだが」

全く持ってお互い様である。

「ワーズワードさん、もう見えてきますよ！」
と、そこまで会話に入っていなかったシャルが前方を指さし、歓声を上げる。
「ああ、俺も見ていた。すごいものだ」
源素についての考察も深めたいところだが、まずは目前に迫った『それ』に、俺の興味は移らざるを得ない。
「はい、これが朱雀門ですっ」
まるで我が事のように胸を張るシャルの姿に、俺は思わず苦笑を漏らす。
とはいえ、そう、確かにすごいのだ。
朱雀門――それは実際の所、門ではなかった。幅が２０ｍほどあり馬車数台が余裕ですれ違えるだけの大道、その両端に立つ円形の尖塔がそれである。中に人が入れる構造であるらしく、物見の窓がいくつか開いており、中に衛士らしき人影も見える。
二柱の朱雀門、陽を受けて赤光を反射する赤い塔と黒光を反射する黒い塔。仮に右を赤塔、左を黒塔と呼ぼうか。
見上げる高さは３０ｍほど、１０階建てマンションが丁度それくらいだ。
高層マンション群は見慣れている俺だが、他に同等の高さの建造物がない中に孤立する朱雀門は、実際以上の高さに感じる。

そして、高さの話をさておいても美しい塔なのである。どちらの塔も、鏡面と言っても差し支えないほどに空や雲を反射している。それも金属光沢を持つ反射光だ。壁面には見事な彫刻が施されており、その繊細さもまた見事の一言に尽きた。

塔の左右には街を囲む石造りの街壁が並ぶが、こちらの高さは3メートルほど、頑張れば乗り越えられなくもない高さであることを考えれば、外敵を防ぐ役割はあまりなさそうである。せいぜい野生の獣の侵入を防止できるくらいだろうか。

ちなみに、朱雀門で徴税を待つ行列は歩行組（かち）と馬車組とに別れており、歩行組には二名、馬車組には四名体制で対応しているようだ。

俺たち三人は当然歩行組に並んでいる。馬車組を見るに、先ほど聞いた六足馬とやらは居ないようである。ちょっと見てみたかったのだが、居ないものは仕方ない。

歩行組はそれなりの列を成しており、俺たちの番が回ってくるにはもうしばらくかかりそうだ。

「遙か昔に滅び、今やその名も残されておらぬ『古の王国』が建てたものらしいのう」
「ユーリカ・ソイルの街の名前はその頃からのものらしいですけど」
「じゃが、朱雀門という呼び名は新しいものじゃがな。今より更に昔には『宝石の塔』と呼ばれておったはずじゃ。各地に残る『潜密鍵』の中でも、特に有名であることには違いないがの」
「『潜密鍵』？」
「えっとですね、すごい昔に作られたもので、何の目的で作られた

のかどうやって作られたのか、今では作り方も判然らないもののことを『潜密鍵』って言うんです。他にも有名なものはいくつかあって、いろんな街の『潜密鍵』を見て回るのは、旅人の楽しみの一つでもあるんですよ」

弾けるような笑顔で、私もそれが楽しみなんです、と付け加える。

ちなみに『潜密鍵』は、言葉の意味を直接変換した結果の単語である。

前後の文脈から、よりわかりやすいよう『アーティファクト』として、脳内辞書に変換登録しておくことにする。

「この朱雀門も元々どういう目的で建てられたものなのか、全くわからないそうですし。ぴかぴか光ってる材質が、金属なのか石なのか、それすらもっていう話です」

「なるほどな」

それはそれとして。

「建立目的は判然らないが、とりあえず材質でいうと、赤塔の方は、おそらくチタノヘマタイトで作られているな」

とりあえず、全く判然らないわけではない。

「……んんん？」

「ちたのへまたいと？」

頭に大きな疑問符を浮かべるシャル。

「ああ、あの赤色の金属光沢は二酸化チタンを含む赤鉄鉱『チタノヘマタイト』の特徴だな。空の雲を映すほどの鏡面反射から類推すれば、希少鉱物である二酸化チタンの含有量は相当な量だろう。宝石の塔と呼ばれていたのも納得の話だ。ちなみに黒塔の方も、含有量は同じくらいだな。ただ、主の素材が黒鉄鉱なのだろうから、その主成分は『チタノマグネタイト』だと思われる」
「にさんかちたん。ちたのまぐねたいと」

疑問符をつけることすら放棄したシャルが、いくつかの単語をただ音のみを拾って復唱する。

「ただのメッキ加工であるなら、長い時間の間にはげているだろう、そうするとやはり材質全てが、単一鉱物でできているのだろうな。なかなかに珍しいものだ」
「待て待て待て！」
「……なんだ」

なぜか慌てた様子でぐいぐいと迫ってくるニアヴを、軽く押しのける。

「アーティファクトじゃぞ！？　その材質をなぜ語れる！」

そうは言われても、所詮はヘマタイトである。
『ヘマタイトネックレス』といえば、ネット販売の招福グッズでは定番なので、見た目で大体わかるだけなのだが、さすがにそこまで説明するのは面倒である。

「たまたま知っていただけだ。単なる雑学だと思ってくれ」
「ざ、ざ、雑学……」

口をパクパクさせるニアヴ。

「私にはよくわかりませんでしたが、ワーズワードさんは物知りなんですね」

「まあ、これくらいならな」

素直な賞賛はありがたく受け取っておく。

「そういう話では、ありえんのじゃーー！」

その声に何事かと振り返る歩行組の人々だったが、直後、面倒な関わり合いを避ける方向に思考が向いたらしく、特にそれ以上の反応はない。

俺は、キンと響く耳を押さえつつ、

「じゃあ、今のなし。俺は何も知らない」

とその場を納めることにした。

面倒なやりとりは避けるに限る。

「はあああああ？？」

「さて、そろそろ俺たちの番も近づいてきたな。そういえば、その足税というのを払えない人間はどうすればいいんだ？　金銭の類は一切もってないんだが」

「あ、それでしたら私が」

「ま、待て待て、待たんか！」

「……まだなにかあるのか」

「当然であろ、なしってなんじゃ！」

「ないものはない。知らないものは知らない」
「通るか、そんな話！」
「そうそう、その門を通る話なんだが、さすがに金に関してまで世話になるわけにはいかない」
「そうですか？」

その驚いた表情から、シャルは当然のように、自分が足税を出すことを考えていたらしい。善良な子である。

「えっと、それでしたら税符を受けることになると思います」
「税符？」
「税金の滞納書と言ったほうがいいでしょうか。当然税符分の金額を支払うことで償還できますが、そのお金のない人は、特定の労働で代償することもできるんです」
「なるほど」
「１００ジット分の労働となると、結構きついと思いますが……」
「問題ない。なんとかなるだろう」

ならなければ、その時はその時だ。
未来とは常に不定である。過去から現在までの継続があれば、未来はある程度の予測ができる。だが、過去と切り離されてここに存在する俺には、その予測がたてられない。であるならば俺の未来は完全なるプラスマイナスゼロの状態。
未来について、希望や楽観のプラス思考を持つ理由、不安や恐怖のマイナス思考を持つ理由のどちらもなかった。

「わかりました……がんばってくださいね」

シャルが俺を見つめ、激励をかけてくる。その瞳に多少含まれる尊敬の気配は、おそらく無償の好意を甘受しない俺の在り方に対す

るものだろう。
もっとも俺の判断は、日本古来のことわざに曰く『親しき仲にも金銭トラブルあり』という格言に従ったものであり、高潔な精神に基づくものではない。
その点について多少の誤解があるかもしれないが、シャルの認識はシャルだけのものである。俺がそこに訂正を与える必要はない。

漂う源素に乱れが生じた。
それを気配ではなく、目視でいち早く知る。

「無視――」

苛立ちを含んだその声の源から強い風が吹き付けてきた。

気流の発生源は黄源素ｘ1、白源素ｘ7……ニアヴを中心に二つの円が、それぞれ逆方向に回転している。

「するでないわッッ！」

ひょいとサイドステップでその場を飛び退くと同時に、

バチンッ

と不可視の衝撃がその場を襲った。

「きゃあっ」

と、悲鳴を上げたのはシャルだけではない。
同様の悲鳴を上げた回りの数人が、ズザザッと一気に距離を取る。
ニアヴと俺を円の中心に残し、列が崩れた。

「いきなりだな」

激しい気流は、回転する源素が産み出しているのだが、それを見ることのできない者から見れば、ニアヴ自身が爆風を発しているように見えることだろう。

「……妾もお主に着いて行くと決めた身じゃ。今後のために、一つ教えておいてやろう」

その中心で、ニアヴが不敵に微笑む。

「妾は――ッ」

カッと見開かれた獣の虹彩が、並々ならぬ怒気を孕む。

それと同時に、これまで外に向け流れていた気流が、内側へとその向きを変えた。

「意外に――ッ」

バッと天空に向け掲げられた掌に、激しい気流が渦を巻く。

その様子から圧縮された空気の塊を創り出しているのだと分析する。それを任意の場所で解放すれば――なるほど、先ほどの不可視の衝撃波が生まれるわけだ。

その大きさ的に、先ほどのように、小手先の動作で躱す事は不可能だと判断する。

大いなる不安を孕んだ衆人環視の中、怒りに染まった狐の化生は、大きくその手を振りかぶり――

「気が短いのじゃーーー！！」

そう、大声でのたまわったのであった。

バチンッッ！！

俺及び、俺の後方に退避していた哀れな商人風の男は、決して自身の身体能力だけでは実現の叶わない空中飛行を体験し――それは時間にして数秒、だがその意外性のなさを実感するだけの時間は十分にあり――その後、重力に引きずられるだけの不自由な落下を味わうことになった。

Wandering Wonder 03

門のすぐ傍だったこともある。
騒ぎを聞きつけた衛士たちが何事かと、駆けつけてきた。

衛士の数は、１０人。徴税を行っている人数はそのままであるから、詰め所から出て来たのであろう。
「一体何の騒ぎだ」

隊長らしき男が落ち着いた声で問いかける。

衛士たちが身につけた揃いの青い甲冑と、その手に携えた長槍は、一同を威圧するに十分であり、ざわめきが納まると同時に、皆の目が俺たち三人、とりわけ目立っているニアヴへと向けられることになった。

「プイッ」

俺をブッ飛ばしたことで一応の満足を得たらしいニアヴは、既に先ほどの気流を操る魔法を解いている。そして、衛士たちの相手をするつもりまではないらしい。

「あうあう」

そうなると、次に皆の目はシャルへと向かうわけだが、彼女にこういった荒事の経験はないのであろう。
完全に衛士の迫力に飲まれ、声を発することもできなくなっている。

となれば次に皆の目は、もう一人の同行者に注がれ――

「やれやれ」

その役目が回ってくるのも、当然であろう。

生まれたての仔馬のような体勢で転がっていた俺は、曲がってはいけない向きに曲がっていた首を元の位置に戻しつつ、

「ああ、すまない。もう嵐は去ったから、大丈夫だ」

その隊長らしき人物に対応した。

まさかここで、そんな軽口がでてくるとは思っていなかったのであろう、ぽかんとした表情を見せる衛士隊長。

「おい、お前ふざけ――」

「あっはっはっはッ」

衛士の一人が、踏み出そうとするのを手を振って抑え、その隊長は笑って応えて見せた。

「それであるなら問題はない。だが、これも我らの務めなのでな。騒ぎの原因を聞かせてもらえるだろうか。なに、時間はとらせない」

公務をないがしろにするわけでもなく、人当たりも良い。話のわかる人物のようだ。

「私はルーケイオン群兜（マータ）のオルドという」

加えてその身に纏う源素光量はおおよそ２２００ミリカンデラ、一般人のそれより数倍明るいことを考えれば、実力ありきでの地位なのだろう。

２．２カンデラでもよいのだが、ここまで新たに視認できた人々８４名の源素数はこのオルドなる人物を除いては、みな１カンデラ以下の光量であるため、ミリの単位を導入せざるをえないという結論を得ていた。

それが魔法なるものに縁のない一般レベルであると考えた方がよいだろう。

今後街に入り、大勢の人を見ることになっても、眩しさで俺の目がくらむいうことはなさそうだ。その点はまずは安心である。

しかし、そうすると――イレギュラーである俺の特殊性は差し置いても、３０，０００ミリカンデラ相当のニアヴ、５，０００ミリカンデラ相当の光量を放つシャルは、ともに一般レベルの眩しさを超えていることになる。

ニアヴはともかく、シャルは――

いや、いいか。今その疑問はさしおこう。

群兜というのもさきほどシャルから聞いて、翻訳（デコード）を保留していた単語の一つだ。語感的に領主や支配者への認識置換を行う予定だったが、もっと軽い意味、リーダーや隊長といった意味で良いのかもしれない。ルーケイオンというのは、まぁこの青い甲冑で統一された守備隊の名称だろう。

先ほどの軽口は冗談にしても、この場での最高権限を持つと思わ

れるオルドからどの程度の恩恵を引き出すべきか、そのための交渉案について、瞬時の検討を行う。

よし、これで行こう。

最も効果が高いと思われる状況を創り出すために、俺はまるで何気ないふうに、自己紹介を開始した。

「紹介させてもらおう、俺はワーズワード。連れの二人は、シャル・ロー・フェルニとニアヴという」

何気なく出した『ニアヴ』の名に、小さなざわめきが起こった。

「……三人連れというわけだな」

「そうなるな」

冷静を装うオルドの反応だが、俺にはその感情が手に取るように判然る。

その視線は見ようとせずとも、どうしても『ニアヴ』に向かざるをえない。

相手の目を見て喋れ、とはよく聞かれる言葉だが、それは相手に対する礼儀としての作法ではない、自分の言葉によって引き出された相手の反応を確認するためのもの。

人の咄嗟の感情は脳に直結した目にこそ浮かび上がり、それは隠しがたいものだからだ。

もっとも、こちらの人間はその耳が感情に反応するのだから、目を見る以上にその反応はわかりやすい。

「では、続いて状況の説明を行おう」

すでに俺の言葉は、半分も聞いていないだろう。
ニアヴが自己申告の通り、あの林一帯を治める濬獣（ルーヴァ）とかいう地位を持つ狐なのであれば、もっとも近くに境界を接するユーリカ・ソイルの守備隊長が、その存在を知らぬわけがない。
だが、ニアヴ自身が街に下りるのは久しぶりだと言った通り、街の人間が、ニアヴの姿形まで知っているとは考えにくい。
俺の言葉の真偽を確認するまえに、まずそこにいるニアヴ自身から目が離せなくのは道理である。

「……後ろが気になるようだが？」

それは誘導の言葉である。

「あ、ああ、すまない。……確認までに問うのだが、ニアヴ殿というのは、その……」

直に聞いて良いものか、その迷いが透けて見える。
想定通りの反応で大変わかりやすい。

「もちろん――ニアヴ治林を治める濬獣本人だ」

それは、この場にいる全ての者に聞かせるがための宣言。

「ほ、本当に！？」

皆の目が、ニアヴへと集まる。
聡い狐のことだ、俺の意図に気付いているのだろうが、この状況でかつ全て事実なのだから、ここでは俺の言葉を肯定するしかない。

「……その男の言うとおりじゃ」

不機嫌そうに、ニアヴが呟く。

『おおおおおお』

確信を得たどよめきが、その輪を広げる。

列を成す人々、オルドに従う全ての守備兵、その全ての目が、興味と驚愕に見開かれる。

だが、それこそが、俺の準備した舞台。その瞬間を逃さず、俺は場の支配へと乗り出す。

「静まれ――ッ」

何者でもない俺が、ニアヴの名を負うことで、この場で最上段に位置する。

「深き森が人の地でないように、ここでは濬獣（ルーヴァ）と言えども、ただの訪問者である。いたずらに騒ぎ立てることは『ニアヴ様』のご不興を買う行為であると知れ」

ニアヴの名の担い手としての振る舞い。

オルドを始めたとした、ルーケイオン一同が、その存在に恐れ入ったかのように膝をついて、頭を垂れる。

「はっ、考え至らず申し訳ございません！」

「……オルド隊長、どうか頭をあげてほしい。それもまた『ニアヴ様』の望むところではないと、わかってくれるかな？」

上位に立った上で、同じ位置に下りていく。

「ははッ！」

上の者が下りてくるならば、自分は更に下りなければならないという、被支配者思考が彼らを縛る。

封建思考とは、全くもってコントロールしやすいものである。

そら、全員アホの子状態だった中世で、あれだけ封建国家が流行ったというのもうなずける話だ。

「さて、そういうわけで、街に入りたいのだが、やはり『ニアヴ様』でも足税というのは必要なのかな？」

「いえっ、濬獣様にそのような！」

「それは助かる」

……自分でこの空気を作っておいてなんだが、本当に偉かったんだな、あの褒めて褒めて狐は。

そして、これもまた狙い通り。なし崩し的に俺の足税も免除である。

もちろんダメだと言われれば、それはその時。うまく行けばラッキー程度の、トライアンドエラーの手法だ。

「ですが、ニアヴ様自らユーリカ・ソイルへ出向かれた理由について、お聞かせください。ルアン公への面会のご用でしたら、私からご案内させて頂きます」

新しい名前が出たな。そのルアン公というのが、街の支配者か。

「その時がくれば、声をかけさせて頂こう。だが今はまだその時ではない。……お忍びってやつだな」

「はっ、　失礼致しました！」

俺の軽口にも、恐縮したとばかりの言葉が返ってくる。

狐の名前は、予想以上に効果があるな。

これはまだまだ利用でき……おっと。

それはそれとして狐のジト目が俺の背中に突き刺さる。

俺は背中の気配には敏感なのだ。

「さて、これ以上騒ぎが大きくなる前に通してもらってよいだろうか」

「もちろんです。さあこちらへ」

要人警護の如く、ニアヴと俺を囲むオルドとルーケイオンたち。

大きく手を振り、シャルを呼び寄せる。

「おーい、タダで良いそうだ。シャルも足税浮いたな」

「あわわわわわ！」

なんてことを大声でっ、と言わんばかりにダッシュで駆け寄ってくるシャル。

「い、いいんでしょうか……」

自分たちを取り囲む青甲冑が歓迎を示しているとわかっていても、

やはり気後れがあるらしい。

「向こうが不要だと言ったんだ。遠慮してどうする」

「お主……よくもまあ次から次へと」

呆れたようにニアヴが言う。

「嘘はついていないぞ」

「あれだけ大見得を切っておいて、お忍びもなかろう！」

「そこに気付くとは、さすがニアヴ様」

「どういう意味で言っておるのじゃ！」

キッと牙を剥くニアヴを軽く宥めながら、俺はこの世界で初めての人の住む街へと足を踏み入れた。

◇◇◇

そこには、石造りを基調とした、そして俺の感覚では産業革命以前の時代を感じさせる街並みが広がっていた。

門を通ってすぐの場所は、倉庫街であるらしい。街の中心に向かって伸びているのであろう大通りの脇には巨大な鉄扉をつけただけの建物が並んでいる。

来るまでに見た広大な農地で収穫された農作物が保存されているのであろう。倉庫の数だけで流通規模を計ることはできないが、大まかに見積もれば、ここは1万人程度が生活する、中小規模の街なのであろう。

「中小って……ユーリカ・ソイルは『ラ・ウルターヴ』では二番目

の大きい街で、大都会ですよぅ」

俺の感想を聞いたシャルが、嗜めるように呟く。

「そういえば、国の名前を聞くのは初めてだったな。『北の聖国（ラ・ウルターヴ）』というのか」

まるでどこぞの『日出づる国』のような大層な国名である。

「『ラ・ウルターヴ』の名前まで知らないなんて……ワーズワードさんは物知りなのに、一般的なことは知らないんですねぇ」

当たり前だわ。

「……そういうことだ。どんどん教えてくれると助かる」

「はいっ」

元気な返事が返ってきた。

Wandering Wonder 04

「ここで、足帳の記入をして頂く決まりとなっております。お手数だと思いますが、ご記入頂いてよろしいでしょうか？」

そこまで話していたところで、行軍が止まり、俺たちを先導していたオルドが、向き直る。

朱雀門の外側で、荷台と人物チェック、そして内側で足帳とやらの記入を行うようだ。

「ん、そんなものがあるのかや？」

「ニアヴ様には失礼かと存じますが、これも街の治安維持の一環でございまして――」

「ああ、よいよい。人の住まう地では人の法に、深山碧谷では濬獣（ルーヴァ）の定めに従う。当然のことじゃ」

鷹揚に筆を取ったニアヴが長く連なった巻物にさらさらと文字を連ねる。

文字か――

「さ、お連れの方も」

同様に筆を渡されるが当然の事ながら俺は文字を書くことができない。

むしろ街に入る大きな目的の一つが、この世界の文字を知ることである。

発声からの言語デコードとは違い、この国のアルファベットの文法・法則性について、サンプリングさえできていないのだ。

「すまない。俺は文字の読み書きができない」
「は……え？」

俺の相手をする青甲冑くんの目にとまどいの色を見える。
まぁ自分より、偉い人間が文字の読み書きができないなんて、思わなかったのだろう。
あの『ニアヴ様』相手に軽口を叩くような人間が、となれば一層のことだ。
もっとも俺はそんな相手の心情変化など気にしないのだが。

「代筆を頼めるだろうか？」
「はッ、もちろんです。日付その他については私どもの方で記入いたしますので、お名前とユーリカ・ソイルへ来られた目的についてのご記入をお願い致します」

「名前はワーズワード」
「ワーズワード……ええと、ご家名はなんと仰るのでしょう」
「家名はない。ただのワーズワードだ」
「は、失礼いたしました」
「目的はそうだな、観光ということにしておいてくれ」
「はあ……」

彼の書く文字を目で追いながら、その場でアルファベットのチェックを行う。
発声６文字の『ワーズワード』が、こちらの言葉では４文字。発声音数よりも文字数が減っており、かついくつかの基本記号の組合せで書かれる文字であるということは、漢字やヒエログリフに近い象形文字系の言語なのであろう。
であれば、大まかな象形（記号）の組合せさえ覚えれば、あとは

絵的な組合せから意味の仮定（解読）が可能になるだろう。
文字の修得についてもあまり苦労はしなさそうである。

「以上です。どうぞ無事の滞在を」
「ありがとう」

最後まで慇懃な態度を崩さなかったオルドと別れたところで、シャルがふへぇぇ～と大きな息を吐いた。

「す、すごく緊張しましたぁ～」
「なに、門を抜けてしまえば、もう他に接点はないだろう。ところで――」
「はい？」
「この後のことだ」

俺としては商品、看板による文字学習。家屋造成、人間観察による文明度判定。食品、水道事情による生活レベル判定と、多数の目的がある。
一言で言ってしまえば、この街の全てが大きな知識の泉だ。なるべく時間を無駄にすることなく目的を果たして行きたい。

「あ、それなんですけど、すいませんっ！」

いきなりペコリと頭を下げるシャル。

「私、先に終わらせないといけない仕事がありますので、夕方に宿で合流ということで良いでしょうか……？」

背負った大きな荷袋はその仕事に関係するのだろう。

「よいのではないか？　妾も久しぶりに街に降りてきたのじゃ、まずは『アンク・サンブルス』に行ってみたいと思っておる」

街に入ってから、むしろ俺よりもテンションが高くなっているニアヴが、嬉々と口を開く。

人間であれば気分屋と言うところだろうが、ニアヴに関して言えば、姿の半分は本能のまま生きる畜生そのものなのだから、まさに見た目通りの性格ということで納得できる。

「ああ、問題ない。俺たちのことはついでだと思って、シャルは自分の予定を優先させてくれればいい。確かに初めての街だが、合流場所と時間がわかっていれば、人に聞くなりしてたどり着けるだろう」

「あう、ここまで案内してきて本当にすいません。日が沈む前には終わりますから」

単なる偶然の産物でできた同行者に、ここまで責任を持てるシャル。

愛すべき資質である。

「ああ、わかった」

「それで、宿はですね――」

『ロッシの梢亭』という名と、大体の位置を記憶に刻み、シャルとは一時の別れである。

その際、足税が浮いた分という名目で多少の交遊費を受け取ることになった。さすがにこれは拒否すべき話ではなかったので、ありがたく頂戴することにする。

◇◇◇

時折馬車が駆け抜ける大通り。その両脇には石造りの大店（おおだな）と、その間を埋めるように雑多な露店が軒を連ねる。
とぎれない人並みも相まって、一種のお祭り会場のようでもある。

「はぐれるなよ、ニアヴ」
「こっちの台詞じゃ！　おっ、良い匂いがするのう！」

くんくんと鼻を動かし、串を売る露天へと跳ねていくニアヴ。大変にテンションが高い。
そして小さな露店であってもその幟（ノボリ）には絵ではなく、文字。

つまり――

「……思いの外、識字率が高いということか」

武器屋に剣、防具屋に盾。商品イメージの具象化というのは、元々文字が読めない人たちに対するものだ。
それがなく、文字で店名を表しているのは、客がその文字を読める、という前提に立っているからだ。
振り返るに、先ほど文字が読み書きできないと言った際の青甲冑くんのとまどいも、それが基本教養として、当然だという認識に基づいてのことだろう。

次に食材である。

「これは何の肉だ？」

「いらっしゃい！　ウチはサチアロ専門だよ！」

軒に豚と猪を掛け合わせたような動物の開腹死体が吊されている。

「では、その串をいっぽ――」

「三本！」

「……三本もらおう」

「まいどあり！」

当然のように三本全てを受け取ったニアヴが、そこそこ大きい串だというのにぺろりと平らげていく。

「サチアロは生も良いが、この香ばしい味付けもまた、たまらんのう！」

「油の付いた指を舐めるのはやめなさい」

そっと嗜める俺だが、狐の耳は、次なる獲物の在処を探るためにしか働いていない。

「次は、あの果実酒じゃ！」

さすがの身のこなしで、人群れを超えていくニアヴ。

「ちょっとは落ち着け」

振り返って、手を伸ばそうとしたところで、後ろから勢いに乗ったドンという衝撃を受けた。

そこにはバランスを崩す赤い影――

「わっ、わっ」
「さっと」

こと人を避ける術においては日本人の右に出る者はない。つまり、この世界で俺以上の者は存在しない。流体、とも言うべき絶妙かつ神速の動作で倒れ込んでくる人影から身体を反らす。

赤い人物の、俺の肩を掴んで体勢を立て直そうとしていたその手が空を切り、結果、

「ちょ、うきゃああ！」

その勢いを殺せず、どんがらがっしゃーんと派手に転がっていくのであった。

「いたたたぁ〜〜」

なにやらうめき声が聞こえるが、俺は悪くないので放置。

それよりも俺の目を引いたのは、その身に纏う源素光量である。推定３，０００ミリカンデラ。ここまでに出逢ったパンピーの中では随一の明るさである。

それによく見てみれば、身に纏うのは、赤いローブとなにかの紋章の入ったミニマント。動きやすさ重視ではあるが、まさに日本人の思い浮かべる、一般的な『魔法使い』の姿である。

カラン……

とそこで、俺は足元に転がってきた布にくるまれた棒状のものに気付き、拾い上げた。

杖身は木製で赤い漆塗りがされている、杖頭は精緻に金属加工さ

れた銀環が備え付けられており、そこにこぶし大の宝玉がはめ込まれている、それはつまり、

「やはりあるのだな。『魔法使いの杖』というものは」

剣やら革鎧やらを目にして、もうその感覚には慣れたと思っていたのだが、『魔法』関連のアイテムは、それとはまた別腹の感慨を呼び起こすものらしい。

宝玉の中では、大きな４つの赤源素がくるくると回っていた。それは、宝玉の外にでることなく、球体内部で反射している。

「なるほど、源素はこうやってモノの中に込めることもできるのか」

源素の動きを追うと、それは三角錐の形につながっていることが判然る。三角錐と言えば【フォックスファイア／狐火】の発動図形である。一つ色が違うが、まあ似たようなものなので、炎の杖といった属性なのかもしれない。

だが、これは……

Wandering Wonder 04（後書き）

ここまでのまとめ：街に入る　だけ４話消費。

シャルさんの次の出番はWandering Wonder 12までお待ちください。

Wandering Wonder 05

「あーーーーっ！！」

甲高い声に、顔を上げてみれば、先ほどの赤魔導師が、俺の方を指差していた。

年若い女である。まあ若いと言ってもシャルほどではない、推定ハタチといったところか。

魔導師な衣装から本来であれば知的なイメージを喚起させるべきところだが、大声を上げて人を指差すその幼い振る舞いから、あまり頭の良さそうなイメージはしない。

「それ！」

「ん、この杖か？」

「か、返してくださいーー！！」

杖を返して欲しいらしい。

が、その表情はやけに鬼気迫るものがある。

落としたものを拾ってやっただけだというのに、なにをそんなに焦っているのか。

「もちろん返す。だが、まあ待て」

「すぐに返してくだ、や、返しなさい！　それは大事なものなのー！」

リーチ差で杖に手が届かない女が半分涙目になりながら、縋り付いてくる。

「ハイドウハイドウ」

だが、少し気になる点があるので、そんな女魔導師を片手でいなしつつ、杖の観察を続行する。
気になった点というのは、宝玉内部の源素に関する問題だ。

ニアヴがあの林道で見せた【フォックスファイア／狐火】は角度がきれいに６０度を保たれた正三角錐だった。
同じく、【ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨】の六角形は１２０度。先ほどこの身で味わった風の衝撃魔法も非常に整った図形だったのだ。

それに比べ、この杖の宝玉内の三角錐は、一辺の長さも角度もバラバラで、まるでひっくり返ったショートケーキである。

その崩れたショートケーキが球状の宝玉内でゴツンゴツンと、乱雑な回転を繰り返しているのだ。

端的に言えば、こういう雑な仕事は、見ていてとても気持ちが悪いのだ。
単純にこの杖の質が悪いだけなのか、元からこういうものなのか知らないが、源素を見ることのできる俺にとっては、気になって仕方ないことだった。

……直せるものだろうか？

そこまで思考すれば、ただやってみれば判然ることを、躊躇する俺ではない。
全てはトライアンドエラー。実践あるのみ。
そもそも、直らなかったところで問題はない。

試しに、杖の宝玉内の赤源素に、停止の念を送ってみる。
ググ……と源素の動作が鈍り、その動きを停止した。ふむ、なんとかなるっぽいな。

ならば後は調整して再始動が出来るはずだ。

「ちょ、え、なにをして――」

図形調整のため、杖を色々な角度に持ち直す俺の行動に、女魔導師が不安の声をあげる。

「すぐに終わるから、少し待て」

三角錐の一辺を、宝玉の直径の三分の二に保ち、その角度はきっちり６０度になるよう調整する。当然四面の面積は同一となり、回転角度も中心線が垂直に通るように調律する。

――といっても、それは俺の脳内イメージを宝玉内の源素に投影するだけの作業なので、女魔導師には俺がなにをしているのかわからないことだろうが。……ん、完了っと。

キュィィイン――

そこにはまるで今までとは違う、整然と宝玉内で回転する赤源素の姿があった。

「ふむ、こんなものか。ほら、もういいぞ」

「あ……ありがと――や、当たり前です！」

やっと返ってきた杖を手に、安堵しながらもこちらを威嚇してくるのを忘れない。色々と忙しい娘である。
まるで宝物を持つかのように、再び布にくるみ直す女魔導師。
よほど大事にしているようだ。

「まだなにかあるのか？」
「……あなたにこれを盗もうという意図はなかったようですね、その点は謝罪いたします」

キリッと姿勢を正し、深々と頭を下げる。

「……」
「どうして黙るのですか」
「……今更そんなキャラを通そうとしても無理だと思うが」
「なっ、そんなんじゃないんだから、や、ないのでありますっ」

……日頃から使い慣れていない言葉を使うとこうなるという見本市だな。

質の悪い杖、幼い言葉遣い。この世界の新米魔法使いという所だろうか。

「そもそも俺はお前の知り合いでもなんでもない。口調など気にしても仕方ないだろう」
「そういうわけにはいきません。私もラスケイオンの一員としての威厳を見せねばならない立場なのですから」

ラスケイオン？　もしかして、ルーケイオンとなにか関係のあるのだろうか。

「そう言われれば確かに青甲冑と同じような紋章を付けているな」
「ラスケイオンをご存知なかったですか！？　ははぁ、それで私にあんな失礼なことを」

うむ。立場を知っていても俺の行動は変わらなかったと思うがな。

「あなたは街の住民ではないんですね。わかりました……では改めてご説明します。ルーケイオンは都市防衛の騎士隊、ラスケイオンはその魔法師隊です。どちらも最低でも準騎士の爵位を与えられるだけの実力と名誉をもつ役職なんです」

聞いてもいないことを、得意満面に語られてしまった。
もちろん、無償の情報提供には感謝であるが。

「そして、私はラスケイオン所属のセスリナ・アル・マーズリーと申しゅのです！」

かみおった。使い慣れない言葉遣いで通そうとするから無理が出るのだ。

「ご丁寧にどうも。私は無所属のワーズワードと申しゅのです」

とりあえず、まねてみる。

「ま、真似しないでくださいっ」

おこられた。

しかし魔法使いの部隊か……確か人間の魔法使いは国に管理され

ているという話だったな。
その魔法使いの利用方法が戦闘部隊であるということは、魔法は、概ね争いの道具、つまり『兵器』として利用されているということだろう。

やれやれ……先ほど確認した火や水を産み出すという物理法則無視の魔法だけでも、どれだけの平和利用ができると思っているのか。

思いつくだけでも、治水、農業、製造、エネルギー生産、環境保護……この魔法という技術には無限の可能性が秘められている。それを――

「セスリナ・アル・マーズリーだったか」
「はい？」

俺の失望を含んだ声に、少しとまどいながら応えるセスリナ。

「お前は悪くない。俺が言えるのはそれだけだ」

だが俺の失望は、この世界の価値観の中で生きる彼女にはなんの責任も話だ。

「そんな、いえいえ、確かに私も前方不注意でしたから。……えへへ、悪くないと言ってもらえるのはありがたいですが」
「ん？　ああ、それはその通りだ。今後は気を付けろよ」
「えっ」

なにをそんな驚いているんだ、この女は。
あの状況で俺に一分でも責任があったと思っているのか。

納得いかないという瞳で俺をねめつけるセスリナだが、幼い容姿の彼女がやると拗ねた子供の上目遣いにしか見えないというのが、悲哀を誘う。
代わりに微笑みを返してみる。
「なっ！？　ぷんっ、もういいですっ！　私も急いでいるんですから！」
「そうか」
「でも、一つだけ教えてください……あなた、この杖に何かしようとしていませんでしたか？」
「さっきのアレか」
魔法使いと言っても源素が見えなければ、俺がなにをしたのか判然らないか。
「杖を調律させてもらっただけだ。なに、悪くはなっていないだろう」
「はい？　……意味が判然らないんですけど」
調律では意味が通じないのか？　確かに、魔法の杖をメンテナンスする行為は別の呼び方があるのかもしれないが。
「はぁ、なるほど、この杖がどういうものか、わかってないんですね」
「……？」
これまでにない冷静な響き。何が言いたいのだろうか。
「いえ、それなら良いんです。では、私はそろそろ――」
「そうだな。俺もそろそろ時間も惜しい。ではな」

「はい」

ペコリと一礼をして、歩き出すセスリナ。
彼女の、最後の態度の変化が気になるところだが、俺は俺でやることが山盛りである。
もし次に会う機会があれば、聞いてみればよいだろう。

「待たせたな、ニアヴ」

――と。

「……おぃ」

喧噪の露店群を見渡すが、そこには狐の姿も、狐の纏う源素の明るさすら見つけることができなかった。

「初っぱなから迷子とか……」

◇◇◇

いないものは仕方ない。
迷子の狐は置いて、俺は俺で情報の収集をさせてもらおう。
たしか、『アンク・サンブルス』という観光名所に行きたいという話だったので、そっちの方に歩いていけば、いずれ見つけられるだろう。

よく考えれば、別にこれから行う情報収集に魔法的な要素は必要無いので、狐がいなくても問題ないしな。

むしろ、一人である方が効率が良い。

……

……

……

「……植物、精子……『果実酒』の店。こっちは、土器の店だな。ふむ、溜める、食器……で『壷』と」

看板と商品、それに街の喧噪から適合する情報を拾い集めることで、文字を解析してゆく。

文字記号のユニーク数は少なく、その組合せも単純である。漢字よりもハングル語の構成に近い。

当然読みだけでは理解できない文字は存在する。主に固有名詞がそれだ。

例えば日本語訳で『森約束の店』と書いてる看板、それをそのままの意味に受け取れば単純に混乱を生むが、こちらの発音の表記にすれば『ヴァンスローの店』となる。つまりは店主の名前を冠した店なのだろう。

祭でもあるのかと思われるほどの露店が軒を連ね、活発な呼び込

みと商品のやり取りの会話が交わされる。解析のためのサンプリングには事欠かなかった。

ものの数十分で一般生活で利用されるレベルの基礎的な文字の作りと読みについては吸収できたので、残りの時間は風土・文化レベルについて観察しながら街を歩くことにしよう。

『ユーリカ・ソイル』

一言で言えば緑と石造りの街である。

石造りの街並みと言えばヨーロッパを連想するかもしれないが、実は東南アジア系イメージの方が近い。

軒を並べるのは重厚な石造りの店舗や屋敷、屋敷はとにかく年数による風化を感じさせ、その上に緑の木々が覆い被さっているのだ。

比較的新しく作られたと思われる建物は、木造である。

『昔に滅びた王国遺跡にそのまま今の国の民が住み着いている』というシャルの事前情報の通り、過去に作られた石の街、そこに人々が住み着き、今の街の形になったのだろう。

区画整備された街並みに、上下水道（井戸ではなく、石造りの用水路『上水道』がちゃんと引かれている）の再利用ができるため、住み着くのは当然のことだったのだろう。

至る所に歴史の風格を感じさせ、かつ新旧が融和した街並みは、思ったよりも嫌いではなかった。

そこに異国情緒あふれる人々が行き交う。この場合は異世界情緒と言った方が正確か。

生活感バリバリの小汚い服装のものもいれば、いわゆる冒険者な革鎧姿の者もいる。

驚いたことに、明らかに人外――この場合は、獣の特徴を持つ人

型人種を指して言う――の姿も珍しくないのだ。
ニアヴという存在が特別なものではないとすると、つまり、異なる種族が一緒に暮らしている状況だというわけか。

しばらく大通りを進むと、街を分断する川があった。
そこにかけられた大きな橋もまた石造り。構造的にはアーチ型石橋であるが、とにかく巨大である。
対岸まで１００ｍはありそうな大きな川に幅１５ｍ程度の年季の入った石橋がかかっている。
朱雀門といい、石造りの街といい、その滅びた王国というのは、鉱物加工、石材建築技術において、かなり高い技術水準を誇っていたに違いない。

この世界にもある『太陽』。その動く向きが地球と同じと仮定するならば、川は街を南北に切断しており、俺は街の南側から北上している、ということになる。

朱雀門は本当に朱雀門だったわけだ。

見たところ、街の南側が商業地区、北側が行政地区といったところか。住民も南側は一般層、北側に富裕層が住んでいるのだろうと推測できる。川に面している屋敷の敷地規模が全く異なっているのがそれだ。

さて、問題はこの橋を渡ってしまって良いのかという点だ。

「すまない」
「ん、なんだいお兄サン？」
「『アンク・サンブルス』に行きたいのだが、この橋は渡ってもいいものなのだろうか」

「そうさね、橋を越えてまっすぐ進めば、街の中心トルテ広場。『アンク・サンブルス』はそこにあるさね」
「なるほど、広場にあるものなのか。情報提供感謝する」
「あはっ、面白い言い方をするお兄サンだね、もしかしてお忍びの貴族サマだったりするのかい？」
「その可能性はないな」
「あっはっは。それは残念さね」

人柄は気候が創り出すものである。店売りの陽気な声や、住人の人当たりのよさは、この地が温暖な気候に恵まれた土地である証拠だろう。

「ついでにもう一つ。狐の耳をつけた、変わった服装の娘が通らなかっただろうか？」
「獣人の娘サン？　あーいたねぇ。狐族サンだったかどうかは見てないけど、なんだか落ち着きのない様子で橋桁をポンポン跳ねてった子がいたかなぁ。もしかしてお知り合い？」
「可能性は皆無ではない」

というか、絶対そうだろう。

「あっはっは。お役に立ててなによりさ」

ぶんぶんと手を振って見送る獣人の物売りに一礼で応え、橋を進む。

見下ろす先、悠然と流れる川の透明度は、地球では貴重なものだろう。
川の濁りと引き換えに、人類は高度な科学技術を進歩させてきたのだから。

その最たるものがアイシールドと、そこに投影されるネットワーク上の仮想空間である。
全ての娯楽がワンクリックで起動され、全ての情報がワンウィンドウに表示できる世界。
発声もコマンド入力も必要とせず、思考のみでその全てが実行可能なシステム。
そこでは、自由気ままなネットライフを送ることも、神の如く権能を用いて、現実世界に影響を及ぼすことも可能だった。

神学者が言った、肉体の軛から解き放たれた真なる世界、それが神学の対極にあるＩＴ技術によってもたらされたというのだから、これは大いなる皮肉であろう。

そこでは人類が未だ到達していない想像上の未来都市も、時代と共に滅び去った太古の都市も、時間の概念を無視したあらゆる映像がリアルに投影できた。
俺はＯＳデフォルト設定のポリゴンの荒いマイハウスを利用していたが、窓の外に映る景色は、自然影像を選択していた。
特にお気に入りだったのは、清流流れる、日本の原風景である。

人類が失った水の透明さを、俺は仮想世界で取り戻すことになったわけだ。

そして、その仮想世界こそ本来なら俺が行くべきだった場所。
だがそうはならず、今俺はこの右も左もわからない異世界にいる。
事実である以上、状況を否定してもしかたないが、地球に帰れるのかも含めて、今後どう行動するべきか、その指針も考えなければいけない項目の一つだった。

「まだまだ課題は多いな」

とはいえ、まずは――

「この街最大の観光名所だったか？　『アンク・サンブルス』とやら、俺も楽しませてもらうか」

この何気ない異世界の街の散策は、十分に俺の興味を満たしてくれるものだった。

Wandering Wonder 06

橋を渡った先は、これまでの商業地区の喧噪とうって変わって上品な街並みを見せた。
いわゆる商店もこれまで以上の大規模店舗しかなく、門構えも立派である。
貴族の館と思わしき門前は掃き清められ、衛兵の姿もちらほら映る。
更に歩くと道幅はさらに広くなり、大きく円形に視界が開けた場所がそのまま広場となっているようであった。
ぐるりと見渡せば、同じような大道が左右から伸びてきており広場でT字に交差している。
と言うことが、ここが街の中心『トルテ広場』なのだろう。

ちなみに正面にはなだらかな階段が伸びており、その先は宮殿へとつながっていた。
……王様でも住んでいるのだろうか？　それともルアン公という奴か？

『オオオオ……』

広場中心の人だかりからは絶えず歓声が上がっていた。

狐は……ぱっと見では居るか居ないかわからないな。
夜ならともかく、この日中時間帯に、光量感知だけで特定するのは難しそうだ。

ま、とりあえず、行ってみるか。

「……失礼、こっちも失礼」

わかっていたことだが、この街の住人に『順番待ち』という概念はない。先に進みたいなら、邪魔なものは押しのけて進むのがこの場での常識的行為である。文明レベル的な意味で。

「はい失礼、よっ……ととっ」

その際、勢い余って、人の輪の最前線の一歩内側まで踏み込んでしまったのはご愛敬だろう。

「ん？」

その俺の身体を、七色の光がすり抜けた。

『オオオオ……！』

一際大きな歓声が上がった。

◇◇◇

「なんだこの光は？」

目の前には、角度８０度ほどだろうか、やや傾いた金属製の支柱が立っていた。

その先に視線を向ける。

「ほう」

俺をして感嘆せしめるもの。

支柱の先、高さ２ｍほどの位置に、巨大な宝玉が固定されていた。

巨大な宝玉は、野外に設置されているにもかかわらず、疵一つ無い美しさである。

それが、七色の光を反射している。七色の光は宝玉を中心にして発生していると思われる虹の円環の光だ。

その虹が、くる、くると回っているのである。

虹の円環は、それが何を意味するのかは判然らないが、当然ただの偏光現象ではなく、魔法によって産み出されたものだろう。

それを発生させているものこそ『アンク・サンブルス』――その虹の円環に触れないギリギリの位置に人は集まり、その美しさを堪能していた。

人の輪を一歩踏み出してしまった俺は、その虹に思いっきり身体が触れてしまったと言うわけだ。

虹に触れたことで身体になにか異常があっても困るので、その場で自分自身の身体をチェックするが、特におかしな点は見つけられない。

「よォ、兄ちゃん！　虹に触っちまってなんともねぇのか！」

観衆の一人が無遠慮に声をかけてくる。

「特になんともないと思われるが……何か問題があるものなのか？」

「がははっ、それがわからねぇから、『アーティファクト』なんじゃねぇか！　兄ちゃんはちと冷静すぎて面白くねぇがなっ」

「……なるほど」

確かにどんな効果があるのかわからないと言われて、むやみに触りたいものではない。

とはいえ、みな経験則として、無害なものであるとわかっているのだろう。

でなければ、こんなに虹の回転範囲ギリギリまで近づいたりはしないはずだ。

そして、たまに虹にうっかり触れてしまった俺のような相手に対し、こうやってからかいの言葉をかけているのだろう。

魔法というものに免疫のない一般観光客であれば、恐れおののく反応を示してもおかしくはない。

俺は改めて『アンク・サンブルス』に目を向ける。

「なるほど、これは見たことがない美しさだ」

「がははは っ、ったりめぇだぜ！　『アンク・サンブルス』は世界一の『アーティファクト』だぜ！」

そんな自慢に満ちた誇らしげな声に、皆納得のうなずきを示している。

――やれやれ、俺はそう言う意味で言ったのではないのだがな。

美しいといったのは、『アンク・サンブルス』の中心たる巨大宝玉。その内部にある源素についてである。

まず巨大である。この身にまとわりついてくる源素は、最大でもピンポン球サイズなのだが、『アンク・サンブルス』内の源素は、その一つ一つが野球の硬球サイズの大きさなのだ。
更にもう一点。これまで見てきたのは白・赤・青・緑・黄の五色だったのだが、この宝玉内には更に紫・黒の二色が存在していた。
合計七色七つの源素が宝玉内で三次元の幾何学模様を刻むように絶えず形を変えているのだ。

セスリナとかいう女の持っていた杖とはランクの違う精密な動きである。欲を言えば、最後の黒源素の動きが他よりワンテンポ遅れているところが画竜点睛を欠いているが、コンピュータでシミュレートしたかのようなその動きは、俺をして唸らせるものだった。

ドンッ

と、宝玉に集中していた所に背後から襲撃を受けた。
なんだ、体当たりか？

「お主……どこをほっつき歩いておったんじゃ」
「……なんだお前か」
「気がつけばお主はおらんし……街では妾の鼻も利かぬし！」

いや、勝手にテンション上げて跳ねていったのはお前の方なんだが。
反論しようと振り向いたところでそれに気付いた。
赤みを帯びた目元。伏せられた耳。ぎゅっと握られた、服の裾。

……やれやれ。

俺は、ポムポムとその頭に手を乗せる。

「悪かった。もう目を離さない」

あやすように優しくその頭を撫でる自分の姿は、全く持って柄じゃないと苦笑せざるをえない。

「……うむ」

迷子の迷子の狐さんは、案外あっけなく見つかったのであった。

Wandering Wonder 07

「確かにこの数理的かつ魔法的な美しさに比べれば、『朱雀門』は造形の美で完結してしまっている感があるな」
「うむ、言ってしまえば朱雀門は『アート・アーティファクト』にすぎぬ。『マジック・アーティファクト』に比べれば、さすがに見劣ることもあろう」
「マジック・アーティファクト？」
「くふっ、知らぬようじゃのう！」

俺の無知に気をよくした狐が、得意満面の笑みで応える。
泣いたカラスがもう笑うというやつか。あいにくこちらは狐だが。

「そもそも『アーティファクト』と呼ばれる遺産は大きく二種類にわけられる。一つは『アート・アーティファクト』とよばれる、例えば朱雀門のように材質不明なもの、『ワス・オーズリー』のように精緻精巧で再現不能なものじゃな。
それらは古王国の威光を偲ぶアーティファクトであって、美術的価値は高いが、お主のいうとおり、言ってみればそれだけであるとも言える。
じゃが、アーティファクトにはもう一つ、全く別の価値、魔法の効果が付与されたアイテムがある。『雲を裂く剣』、『大地を揺るがす鎚』、『炎を纏う杖』、『傷を癒す宝玉』、『酒の溢れる壷』、『知識を与える書』――」

指を折ってそれらの名をあげるニアヴ。

「なるほど理解した。つまりそれが――」
「『マジック・アーティファクト』ということじゃ。それらはまさ

に至宝であり、その価値は計り知れぬ。アーティファクトの発掘を目的とした冒険者という職が成り立っておるのも、未だ発見されておらぬアーティファクトが確実に存在するからじゃ。
『アート・アーティファクト』であれば１０年、『マジック・アーティファクト』であれば、一生働かずに暮らせるだけの価値で取引されるというのう。妾もいつか所有したいものじゃ」

つまり、『冒険者』とはそういった一攫千金を狙ったアーティファクト探索者のことなのか。

「故にアーティファクトの所有者は、その存在を明かさぬものじゃ。まあ当然であるな、それほど価値のあるものならば、悪しき者にとっては殺してでも奪い取るリスクに値するものじゃろう」

物騒な話だ。

「国内に古王国遺跡の多く残る『ラ・ウルターヴ』であれば、アート・アーティファクトの建造物が各都市一つずつくらいは残っておってな、それぞれが観光名所になっておると聞く。
その中にあって、『アンク・サンブルス』は一般公開されておる唯一のマジック・アーティファクト、まさに天下の逸品ということじゃ。見よ、この美しい虹を！　数多の魔法を修める妾とて、これがいかなる効果を持つ魔法の道具であるのか、予測もつかぬ。これほど面白いものはそうはあるまい！」
「理解した故に聞くが、『マジック・アーティファクト』は貴重なものなのだろう。なぜそんなものが野外に設置してある。この街はそんなに治安がよいのか？」
「それこそ愚問じゃな。『アンク・サンブルス』は魔法効果の塊じゃ。妾にわかるだけでも『破壊不能』『存在固定』『反魔法』の最低三つの効果を持っておる。『反魔法』の効果でいかなる魔法も『

アンク・サンブルス』には届かんし、『存在固定』の効果で盗み出すこともゆめ叶わぬであろうな」

なるほど。聞くだにファンタジーだな。

逆に言えば、宝物庫に入れたくとも、入れられないということか。

それでは、放置しておくしかない。

「それ以外にどのような効果があるものか、それは未だにわかっておらぬようじゃが、少なくともこの美しい虹は人の目を楽しませよう。国が滅んでも『アンク・サンブルス』は不滅じゃ」

「異論はないな。お前があれほどテンションを上げたのもわかる話だ」

俺とニアヴは、人の輪に交ざり、虹の円環とその中心に位置する透明な宝玉を鑑賞していた。

「ちなみに、宝玉の中では巨大な7色の『源素』が様々図形を描いている」

「むっ、そう言えばお主は魔法を光の粒として見えるんじゃったのう。……まさかその目で『アンク・サンブルス』がどのような魔法の力を持っているのか、知ることができるのかや？」

「いや、俺に見えるのは源素の動きだけだからな。さすがにどのような効果を発するものかまで、知ることはできない」

「ふぅ、驚かせよって。そんなことができれば、それこそ大いなる衝撃を受けるわ」

逆に言えば、通常魔法として、同じ源素の動き、つまり魔法効果

を発生させることはできそうだがな。
とはいえ、俺にまとわりついている源素の中に紫と黒はないので、全く同じものは再現できないか。

「まぁ魔法の効果はしらんが、宝玉の中に源素を封じ込める、という基本的な作りは先ほど見た魔法使いの杖と同じだしな。その上位版と言ったところだろう」
「魔法使いの杖、じゃと？」

怪訝そうに繰り返すニアヴ。
なにか引っかかることを言っただろうか。

「ああ。さすがにこの『アンク・サンブルス』というマジック・アーティファクトを見た後では、粗末なものだったと言わざるをえないが」

そう言う意味では……さっきから気になってしょうがないワンテンポ遅れた黒源素の動きである。
この黒源素も先ほどの杖と同じように調律できるかもしれない。
やってみるか。

「待て、お主、何を言っておるのじゃ。もしそれが魔法効果を宿した杖だというなら――」
「すまん、ちょっと試したいことがある。あとにしてくれ」

とりあえず距離が遠すぎるので、一歩足を進める。
虹の円環に身体が触れるが、それが無害であることはわかっているので、気にしない。
更に一歩。
輪から抜け出し、『アンク・サンブルス』の宝玉を見上げる俺に、

観光客の視線が集まる。
源素の動きは、決して早いものではない。
７つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作り、また円に返る。
宝玉に手のひらを向け、指を即興の物差しとして利用、幾何学的に線形非線形を繰り返す源素の動作パターンを脳内にインプットする。

「待て待て！　何をしようとしておる！？」

俺の行為に不安を感じたらしいニアヴが後ろから俺の名を呼ぶ。
もうちょっとなので待って欲しい。
よし、覚えた。

では一度動きを止めてっと。
停止の念を送ると、杖の場合と同じように、宝玉内の源素はその意を受けて、ピタリと停止した。やはり、この辺は同じか。
源素運動を停止したせいで、虹が消滅した。おそらく一時的なものだろう。
まずここまではよし、と。

細かい調整を行う前に、狐の用事を終わらせておくことにする。

「よし、こっちはＯＫだ。で、なんだ？　話があるなら聞くぞ」

そう言って振り返った俺の目に、あんぐりと口を開けて放心する狐の姿が飛び込んできた。

……少し訂正しよう。

あんぐりと口を開けて放心する、全ての観衆の姿が飛び込んできた。

「な、な、な」

ああ、消えてしまった虹のことか。

「虹なら大丈夫だぞ？　消えたのは一時的なものだ。『調律』がすめば、また出てくるだろう」

『は、はあぁぁ！？』

不安を払拭すべき行った現状説明のはずなのだが、なぜそんなに目を見開く必要があるのだろう。

広がるまぶたの可能性は無限大だとでも言いたいのか。

それとも……うーむ、やはり触ってはいけないものだったのだろうか。まぁ貴重なものだというのは先ほど聞いたが。

「ま、待て。待つのじゃ」

よろよろと、ニアヴが声を出す。

いち早い立ち直りは人生経験の差か、はたまた慣れか。

「なんだ」

「お主なんと言った！？　アーティファクトを『調律』すると言ったかや！？」

後ろの観衆が恐ろしい勢いでコクコクとうなずく。

「そう言った」

「ありえんじゃろ！？　それができぬからこそ『アーティファクト』なのじゃぞ！」
「なるほどな。確かにできると断言するのは早計だった。では、ものは試した。やってみよう」
「いや、そう言う意味ではなくじゃな！？」

言いあっても仕方ない。
源素自体が俺にしか見えないのだから、皆を納得させるには実際に調律して見せるしかないわけだ。宝玉に向き直り、動きがずれていた黒源素の位置を慎重に動かして行く。
……なんだ。先ほどの杖同様、何の問題もなく俺の意志を受け入れて、動くではないか。
アーティファクトだからと言って、調律できないわけではなさそうだ。

「よし、オーケーだ」
「ほ、本当にかや……」

これだけのことでなぜ静寂が生まれるのかわからない。

「ああ。あとは動かすだけだ」

ゴクリと誰かのつばを飲む声が聞こえる。

再起動を念じる。
俺の目にだけ、宝玉内の7つの源素が円となり、クロスし、立方体と変化し、波を作る動きが見える。
問題ない、これまで通りの動きだ。黒源素が正常な動きに戻ったため、その動きはより美しい。

だが、

「おや？」

「どうなったのじゃ！？」

……源素は既に動いているのだが、虹の円環が発生しないな。

つまり――

「うーむ……失敗したようだ。悪い」

『ちょっとおぉぉぉぉ！？』

それは観衆全員からの総ツッコミであった。

◇◇◇

街一番の観光名所の『アンク・サンブルス』は魔法効果により恒久的に発生する虹――これを幻虹という――その美しさが名物だった。

それが無くなってしまえば、ただの透明な宝玉である。

「おかしいな。源素は間違いなく動いているのだが」

首を捻ってはみるが、出ていないものは出ていない。

首を捻る俺と、依然絶句のニアヴ、それにムンク状態の観衆たち。

なかなかに気まずい沈黙が流れていた。

「おい、何を騒いでいる！」

先ほどの声はさすがに高すぎたらしい。
『アンク・サンブルス』は、その持っている魔法効果から、いかなる方法による盗難もできないという話だが、だからといって警備が無いわけではない。
べったりではないが、トルテ広場には巡回する青甲冑――ルーケイオンの姿があるのだ。

となれば俺の取る手は一つである。

「ニアヴ、準備はいいか？」
「ハッ！　な、なんの準備じゃ」

当然、逃げるための準備、である。

足元に集めるのは、黄源素ｘ１と白源素ｘ７である。
それらを組み合わせた逆回転の二重円――

ニアヴの腰に手を回し、ぐっとその身体を引き寄せる。

「な……に、にゃ！」
「さあ、逃げるぞ」

朱雀門で見たニアヴの空気操作魔法（魔法名知らず）を発動させる。

フォンン――――ッ

ＯＫ。もしやと思ったが、無声での魔法発動はやはり可能だったな。検証完了だ。
迫ってくるルーケイオンと突如足元から噴き起こった強烈な爆風

に、観衆からは悲鳴と怒号が沸き起こる。

足元から爆風を産み出す。

バシュウウウッ！！

背中を柔らかく押し上げるように威力調整した爆風は、想定通り俺とニアヴを空中に持ち上げ、一足飛びに観衆たちの頭上を超えた。

バシュン！

着地地点でさらにもう一つを発動。ニアヴを抱え、重量を増した俺の落下速度を相殺する。

「なっ、【バニシングバード・エア／滌空鳳】を【コール／詠唱】もなしに使うじゃと！？」

「ん？　お前はできないのか」

これは【滌空鳳】という魔法なのか。一応覚えておこう。

輪から抜けてしまえば、こちらのものである。

ルーケイオンから逃げまどう人の群れに紛れ、あとはひた走るのみ。

ニアヴの手を引き、来た道を引き返す。

「う～む。うまくいくと思ったのだがな」

「バカもの！　『ユーリカ・ソイル』の歴史以前からある至宝になんたることを……い、いやそれ以前の問題としてじゃな！？」

「おっと、小言は後で聞く。今は逃げるぞ」

「全く、お主は次から次へと……信じられぬことばかり起こしおる

！」

言ったその声は、存外俺を責める響きを含んでいなかった。

◇◇◇

ゴゥン――

「おい、何があった！　アンク・サンブルスの幻虹が消えているではないか！　こんなことは前代未聞だぞ！　誰の仕業だ！？」

石畳に押しつけられ、尋常ならざる迫力で問責されているのは、先ほどワーズワードにからかいの声をかけた街の大工ゴードンである。

たまたま逃げ遅れた彼の運が悪いだけだが、そんなことを考慮してくれるルーケイオンではない。

「さあ、言え！」

「うぐぐ……許してくれよぇ！　おれにも何が起こった、わからねぇんだ！」

その言葉に嘘はないだろう。

彼は仕事が空けば、こうしてアーティファクトを見に来る。ただそれだけが楽しみの街の大工なのである。

今日も観光客に混じってその美しい七色の虹を眺めていただけなのだ。

勢いあまって虹の輪に触れてしまう観光客をからかうのが、楽しみの一つだということはあるだろうが、それは罪に問うほどの悪行

ではなかった。

今日は若い男だった。

見ない顔であったが、アンク・サンブルスは国内だけでなく、世界的にも有名であるため、それも当然のことだ。

その男が知り合いであろう獣人の娘と二三言葉を交わしたかと思うと、さっと宝玉に手を伸ばした。

それが何を意味するのか、彼にはわからない。

だが、もし悪しき企みがそこにあったとしても、どうともできるはずがない。アンク・サンブルスが何ものをも寄せ付けない無敵の防御能力を持っているというのは有名な話だからだ。

だが、そこで恐るべきことが起こった。アンク・サンブルスの虹が消えてしまったのだ。

最前列で見ていたゴードンの驚愕は、計り知れぬものであった。

細かいやり取りは聞き取れなかったが、最終的に、アンク・サンブルスを元に戻そうとして失敗したということが聞こえてきて――彼も皆と一緒に腹から声をあげたのだった。

ゴゥン――

組み伏せられ、呼吸も碌に出来ない状態でゴードンはなんとかそこまでの状況を説明する。

「バカをいうな！　アンク・サンブルスは帝宮最高魔法師ウォルレイン・ストラウフト様でさえ、いまだその魔法効果を解明できておらんのだぞ！」

「ウグ……そんなこと、おれに言われても……っ」

ゴゥン――ゴゥン――

そこで、ゴードンの目が見開かれた。

「あ、あ、あ――」

空を指差す。

「なんだ、しっかり話せ！」

広場に残る他の人々も同様に、信じられないものを見ていた。

みな一様に目を見開き、顎を落とし――

男を組み伏せているルーケイオンの衛士のみが気づけない。

ゴゥン――ゴゥン――ゴゥン――

そこには街の外縁を根とし、ゆっくりと円を描いて変遷する大輪の幻虹……古の王国にて『アンク・サンブルス／孵らぬ卵』と名付けられたアーティファクトの、本来の機能が動作し初めていた。

Wandering Wonder 07（後書き）

主人公の一人称だけで書き進められる。
そう思っていた時期がなこにもありました。

Wandering Wonder 08

「ハァハァハァ……」
「お主、あれほど手際よく逃げ出しておいて、なんじゃその体たらくは」
「ゼ……ハ……体力には、自信が、ない、のだ」

現代ッ子をなめないで頂きたい。

「それよりも！」

街を分断する川にかかった石橋の上で、ニアヴがビシリと天上を指差す。

「あれはどういうことじゃ！？」

見上げる街の上空に、虹が架かっていた。

「うむ、俺も疑問だったわけだ。我が事ながら、調律に失敗したとは思えなかったからな。動作を正常化させた結果、虹の発生する半径が広くなったのだろう」

おそらく今、この街の殆どの住人が同じように、上空を見上げている。

「大事じゃぞ！？」
「俺の国には『大は小を兼ねる』と言う言葉がある。なに、問題があるならその時に戻せばいいんじゃないか？」
「く……お主のことだ、それも嘘ではないのであろうな……本当に

アーティファクトを調律することができるのかや……」

そうだと言ったはずだが、どれだけ信用がなかったのだろう。

「それほど驚くことではないと思うのだがな。魔法使いであれば、道具に魔法をかけることができるのだろう？　アーティファクトだと言っても、内部の複雑さが違うだけで、原理は同じなのだから、どうにもできないということもあるまい」

「ますその認識がおかしいと言っておるのじゃ！」

狐が大きく頭を振る。

「なんだと言うんだ」

全くわけがわからない。

「そもそも、妾たち濬獣（ルーヴァ）にも、もちろん人族の魔法使いにも、道具に魔法の効果を留める『魔法付与』の技術はないのじゃ！　故にその効果を引き出すことは出来ても、修理や作成は出来ぬ！」

「……」

今度はこちらが絶句する番であった。

「『魔法付与』……それは失われた神代の御業。それゆえの『アーティファクト』じゃ。先ほどの話に立ち戻れば、お主が魔法の力の込められた杖を見たというのであれば……それも間違いなくアーティファクト――古の遺産であることに間違いはない」

「だがそれは貴重なものなのだろう？　街中でそうそうお目にかかれるものなのか」

「ないであろうな。故に、妾はありえんと言ったのじゃ。もし本当にそんな者がおったというのなら、その者はよほど高貴な身分のものか、或いは高名な冒険者ではなかろうか」
「……そうは見えなかったがな」

セスリナの姿を詳細に思い出して、その上でやはり否定せざるを得ない。
ただのずっこけ魔法使いの類だろう。

「やはりお主は非常識極まる！」
「その点、異論はない」

俺も自分のことを常識的な人間だと言ったことはない。そこに認識のズレはないはずである。

真っ直ぐにこちらの瞳を射抜いてくるニアヴ。
俺もまた、揺るぎなくそれを受け止める。

「自分がどれほどのことを行ったのか、わかった上でその落ち着きかや……全く底のしれん男よ。じゃが……それも含めて、お主を見極めることが、妾の役目でもあるということかや」

ああ、そういえば、そうだったな。

「であるならば――聞かせるが良い」
「なんだ」

「……『反魔法』の効果があるアンク・サンブルスをどうやって停止させた？」

その瞳の奥にキラと燃える知識欲という名の欲求。
人のことを散々非常識だと言っておきながら、魔法的な技術については知りたいらしい。
本当に気分屋な狐である。
まあいいが。

「答えは簡単だ。そもそも魔法を使っていない。故にその効果が発動しなかったのだろう」

俺も自分の理論を整理する目的として、言葉を繋いで行く。

「必要なものは単純に停止を念じることだけだ。もっともそれだけでは、今までだれも同じことができなかった理由としては弱い。源素を認識した上で、必要な念、この場合は七つの源素を同時に停止させるような並列思考を行わなければならなかったのだろう」
「並列思考とはなんじゃ」
「例えるならば、小石を空に放り投げて、空中でつかみとる行為。それがひとつならばたやすいだろうが、二個三個同時となると難しくなる。思考においてそれを行うことが並列思考だ」
「同時に2つ以上のことを念じるということかや……いや、ありえぬ話でもないの。確かに、それならば、偶然にも起こりえるはずもない。うむむ、とすればじゃ、お主の『源素』を視認できる特殊体質は、魔法発動原理の解明だけにとどまらぬ、ということかや」

頭のよい狐である。俺もまだ自分の体質の可能性を推量しかねていたというのに。

「まず、実証済みの効果としてアーティファクトに対する干渉が可能だということが言えるだろう」
「調律と言ったかや。実際には何を行ったのじゃ」

「かみ砕けば、魔法効果を発動させる要因たる複数の源素の不整合を正し調和させた、ということになるだろうな」
「ぐぬぬ……それでかみ砕いておるのかや……」

俺に、というより、その言葉が理解できなかった己に対して、悔しさを感じているようだ。
理論の理解は、俺の翻訳（デコード）の不完全性による伝達力不足も原因の一つであろう。頭の回転は俺をして感嘆させるだけの早さを持っているのだから、それほど卑下する必要はないと思うのだが。
その考えを持ってなお、狐の悔しそうな表情を微笑ましく感じてしまうのは、俺の性格が最悪だからである。

先ほど説明に用いた小石を、今度は橋の欄干の上で円形に置いていく。

「例を出そう。アンク・サンブルスは7つの源素が内部で様々な図形を描いていた。その一つの形が円だ。その一点が、こう、ずれているとする」

小石の一つを、動かす。

「ふむ。形が崩れてしまうのう」
「そうだ。もちろん、この形が正式な魔法発動の図形であるのかもしれないが、少なくともお前の魔法には、その要素はなかった。見せてもらった全ての魔法が、美しい幾何学図形を描いていたわけだ」
「妾の魔法が美しい？」
「ああ」

少なくとも、あの質の悪い魔法の杖より先にニアヴの魔法を見ていなければ、それをどうにかしようなどということは思いつかなか

ったはずだ。

「そうか、妾の魔法は美しいか。……くふふっ！」

ぶわっさぶわっさ、とその太い尾が左右に振られる。

たったの一言で、ご機嫌バロメーターが一気に上昇する。本当に褒められることが好きであるらしい。

「続けよう。源素をある一定の図形につなげることが、魔法発動の条件である以上、その形には意味があると推定される。であればそれは、より法則的、規則的であることが求められるのではないか」

正弦定理、シンメトリー、黄金比――数学的な美しさは、俺にとっても好ましいものだ。

先ほどずらした石を元の位置に戻す。

「そのずれている源素を正常な位置に戻したした結果がこの大虹だ。これを調律と呼ぶ。実証結果から見れば、不完全な源素図形が不完全な魔法の発動につながるという仮定は、それほど外れたものではないと言える」

元々は、俺が見ていて気持ち悪いので、直しただけなのだが。

顎に手をやり、難しい顔で俺の置いた小石をみつめるニアヴ。

「……なるほど。お主の理論はわかった。じゃが、やはりこの調律という技術は、源素とやらの見えるお主にしか扱えぬのではないか？」

「源素が見えないというのであれば、かなり困難だろうが、魔法自体は源素が見えない者でも使えるのだ。１００％無理ということは

ないだろう」
「もし可能ということになればじゃ――」
その言い回しは、例のアレか。
「いらぬ混乱を招く、か？　……言っておくが、同じ議論を繰り返す気はないぞ」
だが、狐の反応は、俺の想像とは全く別のものだった。
「……いや、革新的じゃ」
思わず、あっけに取られる。
ニヤリと、キバを見せるニアヴ。
やれやれ、一本取られたのはこちらの方か。
ならばその一本、取り返さねばなるまい。
「更に可能性を発展させよう。調律は可能であるということは――」
続けた俺の言葉に、ニアヴが更なる驚愕を見せる。
やはり、知識を深化させる議論は面白い。
かつて地球上の全ての知識という知識、技術という技術を貪り食い飽きた俺に、魔法という全く新しいものへの興味を与えてくれる異世界。
この世界は十分に面白かった。

さて、議論は議論で楽しい一時（ひととき）だが、可能性を論ずるのであれば、次は『検証』が必要だな。

Wandering Wonder 08（後書き）

ご試読ありがとうございます。

「この主人公何言ってンか全然わからん」という方はご安心ください。

私にもわかりません。

Wandering Wonder 09

その店は大通りに面してはいるものの、全く客の気配がない店だった。

「『竜と水晶の店』か。名の通りであれば、ここにあるはずだが……まずは覗いてみるとしよう」

「冒険者向けの店のようじゃが……えらく寂れておるのう」

埃を吸わぬよう裾で口を覆った、ニアヴが顔をしかめる。

『竜と水晶の店』は金属製の刀剣類を取り扱う、いわゆる武器屋のようだ。

露天商ひしめくユーリカソイルの南・商業地区にあって、石造りの店を構えているのだから、高級店であると言えるのだろう。

だが、薄汚れた看板は半ば朽ちかけ、窓のない店内はどうにも薄暗い。

ニアヴとの議論の中で俺が提示した可能性、それを実証するために、俺たちはあるものを探していた。

「邪魔をする」

それほど広くもない店内、その正面にその店主がいるとなれば、一応声は掛けねばなるまい。

「……おぅ」

声の主は、青い髪をピンピンに立てた、若者だった。

一度こちらに、その薄墨色の瞳を向けただけで、すぐに興味を無くしたかのように、ぐてっとその身体を台座に沈ませる。

「無愛想な小僧よのう」

その様子にはニアヴも呆れたようだ。

たしかに、客商売を行う者の姿ではない。

「店の品物、少し見せてもらってもいいか？」

「……好きにしな」

これでは、客が寄りつかないのも当然だろう。

だが、店員との心温まる交流が目的ではないので、全く持ってどうでもよい。

「さて、目的のものがあればよいが――」

武器屋に入ったのは初めてではないが、アメリカのガンショップと異世界の武器屋を同列に評してもしかたないだろう。

飾りの豪華なツルギは壁に掛けられ、奥には鎧兜を着せられた案山子がディスプレイされている。

ナイフや手斧のような小型の刃物は同じ型の大量生産品が筐に詰められており、逆に大型の武器は一点ものであるらしく、同じ形のものはない。

尤も、そのどれもこれもが埃を被っており、まるで骨董品ではあるが。

そして、店の軒先の駕篭には、錆びたナイフ、折れた銅剣、ひしゃげた兜などが廃材のように詰め込まれていた。

「こんなものが売り物になるのか？」
「ふむ、ゴミではないのかや」
「……穴の空いた鍋と一緒に鍛冶屋に持っていくんだよ」
おっと、まさかツッコミがあるとは思わなかった。
「なるほどな。教えてくれて感謝する」
「そんなことも知らねぇで……アンタら何しに来たんだよ」
バカにするような口調。冷やかしだと思ったのかもしれない。

「君はこの店の店員でいいのかな？」
「あぁ？　まぁ店員ちゃ店員だけどな。ここは俺の店なんだから、どっちかってえと店主だろうな」
「店主じゃと？　石造りの店を持つにしてはちと、若すぎるように見えるがのう」
少なくともこの商業地区では、大通りに幟を立て、ゴザを敷いただけの露店の方が数が多い。
加えて言えば、青年には店を持てるほどの商才があるようには見えない。
「そりゃ、俺の店っつても、親から引き継いだモンだしな。知らねぇか？　勇者コッズ・ランドルフの『竜と水晶の店』。俺はそのコッズの孫で、アレク・ランドルフだ」
知るわけがない。
だが、ニアヴの反応はそうでなかった。

「なんと、汝はコッズの孫かや。これは懐かしい名を聞いたの。言われれば確かに面影はある」
「は？　知ってンのか、俺のじいちゃんだぞ」
「ふふん、小僧が何をいうておる。生きてきた歳月が違うわ」

マジか。

「汝の祖父コッズは確かに大した人物であったぞ。いつぞやには、冒険で手に入れたという珍しい『アーティファクト』を見せてもらったものじゃ。なんと言ったか、六足天馬・巻躊寧（パルミス）の力を宿した――」
「『巻躊寧（パルミス）の翼』！」
「そう、それじゃな」
「おおおっ！　じいちゃんのことを知ってるなんて、嬉しいぜ！　そうだ、じいちゃんはすっげぇ冒険者だったんだ。国宝級のアーティファクトをいくつも持ち帰って、皇帝にも認められて、勇者の称号までもらったんだからな！」

祖父の偉業を語るアレクの瞳は、先ほどの怠惰な店員のそれではない。

「ふむ、それでそのコッズはどうしておる？」
「ああ、死んだよ」
「そうか。それは悪いことを聞いたの」
「かまわねぇさ、ずっと昔の話だ。それより、久しぶりにじいちゃんの話ができて嬉しかったぜ！」

彼はよほど、その祖父を誇りに思っているのだろう。

「俺も武器の扱いには自信があるんだ。冒険にでれりゃ、きっとじ

いちゃんにだって負けねぇんだけどなぁ！」
「出ればよいだろう」
夢を語る青年に、俺は至ってシンプルな解を示す。
「……それは無理ってもんだ。親父ももういねぇから、俺がじいちゃんの作ったこの店を守っていかねぇといけねぇんだ。勇者コッズの生きた証、この店を俺が潰しちまうわけにはいかねぇよ」
諦めを宿した言葉。
このアレク青年は祖父の語る冒険譚に憧れ、自分もまた冒険者として旅立つことを夢想する、至って標準的な若者のようだ。
また同時に、その祖父の残した店を守るという、誰に替わることもできない責任を負っている。
そして、残念ながら店を運営する能力には恵まれなかった。その結果が、この埃を被った商品と、客の訪れない寂れた店内の姿なのだろう。
「そんなことより、じいちゃんを知ってるってんなら、アンタらは大事な客人だ。何を探してんだ？　安くしとくぜ！」
「ありがたい。では率直に聞こう。この店に『水晶』はあるだろうか」
「水晶？　……おいおい、うちは武器屋だぜ」
呆れたような、アレクの声。
まぁそれは一歩入った時点でなんとなく理解したのだが。
『竜と水晶の店』って書いてあったら、あると思っても仕方ないだろ……
「そうか、ないなら仕方ない。邪魔し――」

「ガラス玉ならあるんだがなぁ」

ん、ガラスはあるのか？

「へへっ、これはじいちゃんに聞いた話だけどよ、『アーティファクト』が隠されてる場所には、なんでか知らねぇが宝石の珠やガラス玉がゴロゴロ転がってるらしいぜ。そんで、アーティファクトにはそれを護る『竜（ガーディアン）』がいるってのが――まァ、この『竜と水晶の店』の屋号の由来の話だからな。持ち帰った宝石の大半は売り払っちまったらしいけど、それほど金にならねぇガラス玉の方は、冒険の記念に取っておいたんだとさ」

それは思いもかけない重要な情報だった。

「ワーズワードよ、今の話、聞いたかや！？」

「もちろんだ。……その話が本当だとすれば、まず間違いだろう。巡り合わせとは恐ろしいものだな」

「ん、どうしたんだ？」

「いや、こちらの事情だ。それよりも、そのガラス玉、見せて貰えないか？」

「小僧よ、急ぐのじゃ！」

「あ、ああ、ちょっと待ってな」

急に落ち着きを無くしたニアヴの様子に多少とまどいながら、アレクは店の奥へと消えて行く。

「のう、アーティファクトと共に残されておったということは、つまり、そういうことなのじゃろう！？」

「おそらく」

「おおっ！」

「待たせたな……よっと」

ガシャガシャと音を立てて、古ぼけた木箱が置かれる。中には、大量のガラス玉が詰まっていた。薄く色のついたもの、ひび割れたもの、大きさも様々である。小さいものはビー玉サイズであり、大きいものはこぶし大である。

ふむ、統一された規格はないようだな。

「どれがよいのじゃ？」

そわそわと俺とガラス玉との間で視線を往復させるニアヴ。

ニアヴにとっても、これから行おうとしている検証実験は、大いに興味をそそられるものなのである。

「そうだな――」

当然大きい方が良いだろうが、手持ちの旛（ジット）との相談もある。

また、実験が成功したのなら、それをそのまま実用化の検証まで持っていきたい所だ。

となれば――

壁に掛かっている一本の剣。それは柄に飾り玉をつけられる造りになっている。

ふむ、これでいいか。

丁度剣の柄に嵌るであろうサイズだ。

「これが良さそうだ。ちなみに持ち合わせは少ないのだが」
「つっても値段も決めてねぇしな。じいちゃんの昔の知り合いに会った記念にタダでやるよ」
「そうか。ありがたい」

ありがたいのだが、本当に商売に向いてない青年である。
この店が潰れるのも時間の問題だな。

ふむ。それならば――俺の脳内に一つのシナリオが描かれる。

おっと、不安を覚える必要はないぞ？
今回のそれは、全ての者が幸せになる、ｗｉｎ－ｗｉｎ、オールハッピーなシナリオなのだから。

Wandering Wonder 09（後書き）

新キャラ、増えた。

Wandering Wonder 10

『更に可能性を発展させよう。調律は可能であるということは――』

◇◇◇

橋の上で俺がニアヴに語った言葉。それは、

「――調律は可能であるということは、ゼロからの魔法付与もまた可能であるかもしれないということだ」

先にニアヴによって否定された『魔法付与』の可能性。それを再検討しようというのだ。

「できるのかやっ！？」

ニアヴの反応は実にわかりやすいものだった。

今のニアヴは知的探求心の塊である。

「試してみるしかあるまい。となれば、まず探すのは魔法の杖、アンク・サンブルスに共通する、魔法付与の媒体だな。おそらくは『水晶』だろう」

「そ、それがあれば――」

まずは仮説ではあるが試せるわけだ、『マジックアイテム』の作成を。

「可能性はある。うまく行けばシャルへのいい土産になるだろう」
――と言ったことだった。

◇◇◇

今、手にしているのは望んだ水晶ではなく、ガラス玉である。
だが、先ほどのアレクの話によれば、これは『アーティファクト』とともに保管されていたものだという。
であれば、むしろこちらの方が『魔法付与』の検証用として適していると言えよう。
なにより、タダだし。

「では始めよう」
「ここでかや？」

厳かに宣言する俺に、ニアヴが疑問を投げかける。

それはまぁ、有り体に言って、成功すればこの世界の常識を一つ革新することになる実験に、このアレクなる青年を立ち会わせるのか、といった意味での疑問だろう。
だが、それでよい。俺の描いたシナリオが最大の効果を得るためには、むしろ立ち会ってもらわねば困る。

「今から一つの実験を行う。もう少しこの場を借りて良いだろうか？」
「いいぜ。なんだか知らねぇが、今日は外も騒がしいしな。ゆっく

りして行ってくれ」

……外が騒がしいのも、俺の仕業なんだがな。

「ありがとう。では改めて――実験を開始する」

ごくりと、ニアヴが喉を鳴らす。アレクはただガラス玉を手のひらに載せているだけの俺に、いつその実験とやらを始めるのかと、問いたそうである。

だが、既にそれは始まっているのだ。

俺の身にまとわりつく無数の源素。その中から、四つを選択し、ガラス玉の回りに寄せる。

赤源素が3つと、黄源素が1つ。

このガラス玉に【フォックスファイア／狐火】の魔法を付与するである。

まず第一に源素は物質を透過し、留めおけない。それは既に確認されていることだ。

第二に宙に漂う源素それだけでは何の魔法効果も発生せず、一定の図形を組み、『念』じることで魔法は発動する。

そして、魔法効果の終了と共に、源素の図形結合はとかれ、源素はそのまま分散または消失する。

それが魔法の源素理論である。

試しに赤源素の1つを、ガラス玉にくぐらせて見るが、それはガラス玉を透過して、向こう側に抜けてしまう。

ではどのようにすれば、ガラス玉内に源素を留めることができるのか。

街で見た二件のサンプルから推論し、導き出した第一の解がこれだ。

４つの源素を『ガラス玉内部に集め』、そこで図形を組み上げるのである。

個別の源素はすり抜けるが、物質内部で接続された源素は、そこに留まる性質を宿すのではないか、という仮定である。

俺の念じた通り、４つの源素はガラス玉つまり物質内部で三角錐の形に接続される。

ここまでは問題ない。

接続された三角錐が、これでもまだガラス玉を透過してしまうのであれば検証は失敗である。結果は――

キンッ……

そんな音が聞こえたわけではないが、【狐火】の三角錐は、ガラス玉内部で確かに反射したのである。

つまり――

「第一段階、成功」

「ん……なにかしたのか？」

アレクの反応は至極真っ当である。

ハタから見れば、俺はただ、その手のひらにガラス玉を乗せて、眺めていただけなのだから。

次の段階へ進もう。

「壁に掛けてある剣を借りてもいいだろうか」

「剣を？　何に使うんだ？」

「実験の続きだ。成功すれば面白いものが見せられるだろう」

「ふ～ん。まぁ好きにしてくれ。どうせずっと昔からの売れ残りだしな」

手に取ってみれば、拵えの良い逸品であるとわかる。

売れなかったのは、別の原因に違いない。例えば、埃を被らせたままで長い間触られた形跡もなさそうな、そのディスプレイ方法であるとかだな。ハタキくらいかけなさい。

剣の柄に、ガラス玉を嵌める。

ガラス玉の中では、三角錐がゆらゆらと揺れている。

「……」

「……」

その様子をニアヴとアレクが無言で眺める。

ニアヴは、期待故の無言であり、アレクは疑問故の無言である。

さて、では第二段階へ進もう。

魔法付与及び発動の検証である。

当然【狐火】の発動を念じることで、その効果を発動させることができるだろう。

だが、道具への『魔法付与』を考えた場合、それでは二点の仕様

がクリアできない。
一点は魔法効果の恒常発生である。
同じ魔法効果を繰り返し発動できないのであれば、それは道具への魔法付与とは言い難いものである。故に、魔法を発動させても、源素の結合が解けないことが必要である。

そしてもう一点が、利用者の観点である。『魔法の道具』である以上、それは誰にでも扱えるものでなければいけないはずだ。

魔法発動を『念じること』、それを俺はさも当然の様に行っているが、実際には発動する魔法のイメージが先に存在し、かつ構築された源素図形に向かって念じるという定められた手法が存在している。
源素が見え、かつ、脳内で明確にそれをイメージできる俺だからこそ、容易くそれを行えている。
地球では――ネット上では――人が想像しうる、ありとあらゆる仮想事象は可視化済みであり、例えば、赤熱を吹き上げる炎の剣のイメージを俺は確かに持っている。
それは既に『想像』ではなく、TV、映画、ゲーム、アニメ、静画――どこかで目にしたことのある既知の『現実』なのだから。

だが、この世界の人々にとっては、魔法とは神秘の術であり、想像を超える『未知なるもの』だろう。
故に一般的な利用者の観点から考えれば、魔法のイメージを必要とせず、規定の魔法効果が発動できなければいけない。それが『マジックアイテム』なるものの条件であるはずだ。

この二つの仕様を満たすにはどうすればよいか？

試行するしかないのは当然だが、全くの手探り状態というわけでもない。

仮定に基づくトライアンドエラーはハッキングの基本である。

検証魔法に【狐火】を選んだのは、その性能、利便性を考慮したからである。【狐火】はただの炎ではなく、発動者の思考によりその効果を制御できる魔法だからだ。

ならば俺が『炎の剣』をイメージすれば、【狐火】の三角錐は、その通りの効果を発生させるだろう。

吹き上げる黄金の炎は利用者には熱を伝えず、選択したターゲットのみを焼殺するイメージ。

その構築されたイメージを、ガラス玉に注ぎ込む。だが、発動はさせない。

『イメージ』のみが注ぎ込まれ、魔法発動が押さえ込まれているための圧力だろうか。三角錐は、ガラス玉の中で激しく回転運動を始めた。

……この状態には見覚えがある。セスリナの持っていた『魔法使いの杖』、あれも宝玉の中で同じように源素が回転していたはずだ。

であれば、これは正しい手順であるに違いない。

次である。

『利用者の観点』、そのもう一つの課題についての考察を進める。魔法を知らない者が魔法の道具を扱うには、どうすればよいのか？

この問いに対する答えを、俺は案外すんなりと思いついていた。

魔法の道具＝『原理のわからないなにか』。

実はそんなものは、地球上では溢れているのである。

車、電子レンジ、アイシールド、ＣＯＩＮシステム――高度な科学技術で作られたそれらのものを、だが俺たちは誰でも使うことができる。
一般人がそれをどうして使えるのか？
それは当然、電源のＯＮ／ＯＦＦ――スイッチの存在である。
つまり、魔法発動を制御するスイッチを設定してやればよいのだ。
『魔法発動を念じる』のではなく『設定したスイッチが入ったときに魔法が発動するように念じる』。
おそらく、『魔法付与』の技術は、このスイッチングの概念こそが、最大のポイントである。
ガラス玉なり宝玉なりの中に源素を込めるまでは、きっとニアヴにもできることだろう。だが、このスイッチングの概念が無ければ、それは『マジックアイテム』たり得ない。

チャキリ――

剣を構える俺に、二人の視線が集まる。
そもそも『魔法』とは――なんだ。
源素は人間の念や意志、思考と言ったものに反応する。
その源素の動きを制御して図形を構築し、明確なイメージを持って発動させるものが、魔法だ。
そして、源素図形を物質内に封じ込め、魔法効果のイメージにスイッチングの概念を追加してやれば、それはマジックアイテムたり得るのではないかという仮定。
その理論に穴はないか？　反証がないか？

脳内で、これまでの手順をウォークスルーで振り返り、何度もの自己レビューを繰り返す。

魔法が常識的に存在するこの世界ですら、誰もなしえていないという『魔法付与』。それをこの世界の住人ではない俺に成功させることが本当にできるのだろうか。

そんな不安こそを覚えるべき状況であるべきなのに、むしろ必ずや成功するだろうという自信すらを持ち得てしまうのはなぜだ？

魔法自体を今日初めて知ったばかりではないか。根拠のない自信は、必ず失敗の要因となる。何を根拠として、俺は自信を持っている？

なぜ、これほど魔法というものに拒絶反応が働かない？

――唐突に閃くものがあった。

「ああ、そうか――」

「なにか問題があったのかや？」

「いや、逆だ。問題が解決されたのだ。そうか、これは『感応入力』――第三世代インターフェイス、ＶＵＩ（Ｖｉｒｔｕａｌ Ｕｓｅｒ Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ）により実現される思考によるシステム操作だ。

魔法とはつまり、入力に対する出力であり、アーティファクトは

さながら規定された機能をもつ実行プログラム。
魔法付与？　違うな、これは俺が慣れ親しんだ感応入力によるコーディングだ。なるほど、ならばどこに失敗する理由がある。根拠がない――バカな、根拠ならあるではないか」
「ど、どうしたのじゃ、一体何を喋っておる！？」

判然らないだろう。判然るはずもない。
だが、それは俺にはこれ以上ない明確な答えだった。

根拠を持って自信とするのなら、この俺に失敗などあろうはずもない。

であれば――さあ、仕上げを御覧じあれ。

Wandering Wonder 11

「アレク」
「……っ、おお」

唐突に名を呼ばれ、思わずうわずっちまった。

『竜と水晶の店』。俺の偉大なるじいちゃん、勇者コッズ・ランドルフの残した店だ。
小さい頃に聞かされた数々の冒険の話。じいちゃんは俺の憧れだった。
俺もでっかくなったら冒険者になって、世界中の『アーティファクト』をこの手に掴むのだと、そう将来を夢見ていた。
だが、そのじいちゃんが死んで、親父も後を追うように死んじまって、俺にはこの店だけが残された。
冒険者になるのは俺の夢だ。だが、同時に、じいちゃんが残した店を潰すこともできなかった――じいちゃんの名を汚すわけにはいかなかった。
結果俺は店を継いだが、俺にはじいちゃんや親父と違って、商才ってモンが全然なかった。
店は日毎に寂れ、客足は遠のいた。俺だって頑張ってるつもりだったけど、そもそも何が悪いのかすらわからなかったんだ。

そんなある日、不思議な男との獣人の女の客がきた。
女の方はなんと、昔のじいちゃんを知っているというじゃねぇか！
俺は嬉しかった。
獣人の女は、あんまり見ねぇエロい服で……おっと、そうじゃねぇ、久しぶりに、他人とじいちゃんの話ができたのが嬉しかったんだ。

「実験の手伝いを願いたいのだが、剣は扱えるか？」
「ああ、扱えるかだって？　俺の剣は勇者コッズ直伝だぜ、『竜』が出たって倒してやらァ！」
「そうか、それは頼もしい」

くっくと男が苦笑いするように答える。ガキの自慢話に苦笑する大人の反応ってやつだ。バカにされてるワケじゃねぇのは見てわかるから別にかみつきゃしねぇが、ガキ扱いされんのも癪に障る。
くそっ、見て驚けよ、俺の剣裁き！

男がガラス玉をつけた剣を手渡してくる。

「その剣に炎の魔法を付与してみた」
「……はァ？」

なにをいってんだ。アホなのか、コイツ。
だが、男はそんな俺の反応を無視して、話を続ける。

「発動スイッチは、コマンドワードを採用した。剣の柄を握った状態で次の言葉を唱えるだけだ――『ウェイクアップ・ファイア』」
「うえいく……？　なんだそれ、どこの言葉だ」
「イギリスという国だな」

やべェ、全然しらねェ国だ。
俺も冒険者になってれば、そんな遠い国のこともわかるようになってたんだろうか。

「こちらの言葉でなければ、誤って起動してしまうこともないだろう。いいから、ほら『ウェイクアップ・ファイア』」

「う、うぇいくあっぷふぁいあ」

流されるまま、俺はその異国の言葉を繰り返す。

そして、視界が弾けた。

◇◇◇

アレクの声に反応して、剣に仕掛けた魔法の効果が発動する。

埃を被った剣の、その刀身のハバキから切っ先に向けて、劫ッと黄金の炎が吹き上げる。

常識的には火のついた剣など手に持つことはできないはずだが、そこは魔法の魔法たる所以だろう。所持者に熱を伝えることはない。

薄暗い店内が一気に光に包まれ、驚愕に目を見開いたアレクの表情をも浮かび上がらせる。

これで魔法というものを使えない人間でも起動させることができると、検証できたわけだ。

つまり、

「ふおおおお、ワーズワードよ！　こ、これは……やったのじゃな！」

「ふむ、第二段階も成功だ」

「す、す、すごいのじゃ！　お主は天才じゃ！」

歓喜と興奮に包まれたニアヴが、飛び付いてくる。

これが男女の包容であったなら、それはそれで絵にもなるのだが、

およそ人とは思えない跳躍力で飛び付いてきたニアヴは、俺の首に足を回し、そのまま頭をホールドした。
……肩車である。
頭の上ではしゃぐニアヴが、ぶぁっさぶぁっさとその尾を振る。

「重い……」
「我慢せぃ！」

重みに耐えかね、徐々に前傾する俺の頭をペシペシとニアヴが叩いてくる。
ぐぬぬ。

「な、なんだよこれ、どうなってんだ！　ア、アーティファクト！？」

同じく驚愕を口にするアレク。

「言ったとおりだ。今この場で、炎の魔法を付与した。対象物以外は燃焼しない魔法の炎だから、持っていても熱くないだろう？」
「あ、熱くはねぇが、……ってこんなのありえねぇーー！！」

やれやれ、これは驚愕ではなく、混乱の類かもな。
だが、まだ検証実験は終わっていないのだ。
彼には存分にその剣の腕とやらを見せてもらわなければならない。
「少し落ち着け。まだ、やってもらうことがある。次はそうだな……そこにある鎧を斬ってみろ」
「お、おう……わかった！」

疑問も反論も心の棚に上げてしまったらしいアレクが、俺の言葉

に素直に従う。
やりやすくなって大変助かる。

さて、目の前にディスプレイされた鉄の鎧。これを斬ることは、筋力や剣の硬度だけではかなわないだろう。
『魔法付与』が成功しても、そこに実用性――付与した魔法相応の威力――が伴わねば、それはタダの学生の卒業研究と同じである。

行動に目的を与えてやった途端、アレクの動きに変化が現れる。
腰を落とし、力学的に考えても、全ての筋力がその剣に乗るであろうと思われる美しい構え……剣術を知らない俺が見ても、合理的な構えだと判断できるのだから、これは本当に大したものなのだろう。

「ハァッ！！」

短い発気と共に、その剣が振られる。

ガァン！

炎の魔剣が、大きな音を立てて鎧に打ち込まれるが、さすがに斬るにはあたわない。だが、その接点が白煙を上げ始めたかと思うと、鎧は一気に赤熱し、もの5秒もしないうちに、ドロリ……とその板金を融解させ始めた。傷口を開いて行くように、炎の魔剣は徐々に鉄の鎧を切り裂いて行く。

「ルあああァァァ！！」

半ばまで剣筋が通った時点で、更なる剛力を込めて、アレクが吼える。

ズズ……ゴトンッ！

シュウゥゥゥ――

切り口を真っ赤に融解させて、遂に鉄の鎧は上下に分断された。

実質的には、３０秒程度がかかってしまっている。ふむ、実戦を想定した場合、３０秒というのは、少しかかりすぎな気もする。

鉄の融点はおよそ１５００度だが、それを一瞬のうちに溶かすには、およそ３０００度が必要となる。

一瞬とはいかなかったが俺が見積もった温度は生み出せているようなので、設計上の問題ではないのだが、やはり３０００度の炉で鉄を溶かすのと、斬りつけた一点が３０００度に加熱されるというのでは、融解にかかる時間に差が出るのは仕方ないだろう。

実用に耐えないのであれば、同じ炎の魔法でも別の効果を持つように変えた方がよいかも知れない。さてどうしたものか。

「一振りで鉄の鎧を絶つじゃと！？　信じられぬ威力じゃ！」

「ス、スゲェ！　これは間違いねぇ……『アーティファクト』の力！」

……この程度でも喜んでるみたいだし、いいか。

「よくやってくれた。最後に魔法を解除するコマンドだ。――『スタンバイ・ファイア』」

「すたんばい！　ふぁいあ！」

ぱっと火の粉が拡散するかのように、刀身を包んでいた黄金の炎が消失する。

あとには、余熱で埃が焼き払われ、打ち立ての剣の輝きを宿す魔

剣の刀身が残された。
柄のガラス玉の中では、４つの源素がくるくると回り続けている。
魔法効果の発動終了により、その図形接続が解除されないのは、物質内で図形を組み上げた効果なのかもしれない。ああして、回転運動をする内に魔力？を再び蓄え、魔法効果が再利用可能になるのかもしれないな。

「ふむ、問題なく停止したな」

狐を肩に乗せたまま、俺はアレクの肩をポムと叩く。

「協力に感謝する。……実験は成功だ」

「「おおおおお！！」」

薄暗い店内に、再びの歓喜が、こだました。

◇◇◇

頭の上で暴れる狐をさすがに振り落とし、アレクに向き直る。

「アンタ、スゲェ！　すごすぎるよ！」

興奮さめやらぬアレクが、握手を求めてくる。
まず現時点で俺に過大な尊敬の念を抱いているのは間違いないだろう。

魔法付与の実験をわざわざこの店内で行っただけの効果はあった

ようだ。
　これで準備した舞台は整った。では、先ほど描いたシナリオの次のページを捲ることにしよう。

「アレク、今回の実験はお前のヒントと協力がなければ、成功しなかっただろう。感謝を言うのは俺の方だ」
「そんな、俺なんて」
「お前は確かに、勇者コッズの勇敢な魂を引き継いでいる」

　俺はそのコッズとやらは知らないのだがな。
　まぁ、言葉はなんでもよい。もっとも効果が高いと思われる表現を選択しただけだ。

「！　そ、そうかッ？　俺がじっちゃんの――そんなこと言ってもらえたのは初めてだよ！　へへっ、すっげぇ嬉しいぜ！」

　少なくとも、店番としての彼に、褒められるべき成果はなかったのだろう。

「感謝の気持ちというわけではないが――その炎の魔剣はお前に与える。それはお前のものだ」

　元々俺のものではないのだが、『魔法付与』を行った事実を考えれば、何割かの所有権が俺に移ったと、誤認しても仕方ない状況だろう。
　その状況を利用し、ありもしない所有権の放棄と引換に、信頼の獲得を行う。

「い、いいのかよっ！　『アーティファクト』の剣だぞ……ウチじゃアレだが、出すトコに出せは、一生遊んで暮らせるだけの金が手

に入るんだぜ！？」
「問題ない」
金に換算できる価値の提供は、万人に共通する影響力を発揮する。
「あ、ありがとうッ！　……こ、この剣が俺のものに……ッ！」
プルプルとあふれ出る感動に身を震わせ、炎の魔剣を掲げるアレク。こうかはばつぐんだ。
そして、ここからがシナリオの最終章である。
「そして――その剣を持って、お前は冒険の旅に出ろ」
「――なっ！？」
突然冷水を浴びせかけられたような表情になるアレク。
「……へっ、何をいってんだ。俺にはこの店を護るっていう責任が――」
「それはこの店がお前の祖父の残したものだからか」
「当たり前だろ！」
「だとしたら、お前はすでに失敗している。見ろこの店内を。客もなく、商品は埃を被り、コッズの為した名声を偲ばせるものは何も残っていない」
「ッ！　なんだってんだよ、いきなり！」
アレクの瞳に怒りが満ちる。そうだそれでいい。
「考えろアレク。今お前は祖父のために、この店を護るといった。だが、勇者コッズ――偉大なるお前の祖父は、お前にそんなことを

望んでいると思うのか？」
「ッ！　じいちゃんの望み……？」
　そのようなことはまるで考えたことがなかったのだろう、愕然とするアレク。
「そうだ。そこの狐が言っていただろう。勇者コッズは素晴らしい人物だったと。そんな人物が、孫が自分の面影ばかりを追いかけ、この店で一生を腐らせることを望むと思うかと、――それを聞いている」
　俺が言っても説得力がないので、一応狐の名を借りておく。
「それは――！　それは……」
　言葉を失うアレク。
「わからぬなら教えてやろう。祖父の誇りを護る方法はこの店を守ることではない。お前が冒険者として名をあげ、この世界にお前自身の名を残すことだ」
「お、俺自身の名を……？」
「そうだ。そして、それはお前の望みでもあるはずだ」
「たしかに俺はずっと冒険者になって、じいちゃんみたいに世界中を駆けめぐりたいって思ってたけどよ……」
「諦める必要はなかった。だが、心優しきお前は、自分の望みよりも、祖父の店を選択した」
　相手を理解するには、その心の動きの全てが予知できるまで相手を知らなければならないという脅迫観念を持つものがいる。
　だが、それは間違いだ。理解とは、相手の行動を知ること、それ

だけ足るのだ。

俺が知っているアレクの行動は、冒険者にあこがれを持っていることと、冒険者の祖父の残した店を護っているというその二点のみ。その二点だけ、俺はアレクを理解できている。

「わからねェ！　俺はどうすればいいんだよ！」

アレクは今、俺の言葉に感情を熱され、冷却され、正解のない答えを求めて、その思考は無限迷宮へと落ちている。

ならば。

ならば、俺はただその迷宮の出口を指し示してやるだけでいい。

「……今『お前のために』俺が問題を解決しよう。行ってこい――店のことは心配するな。俺が面倒をみてやる」

無間の闇に差し込む一条の光、そこに飛び付かないという選択肢は今のアレクには『見えない』。

「お、俺のために――！？」

そして、俺のために。

「勇者コッズの剣術とその炎の魔剣があれば、お前は最強だと、俺はそう信じる」

「お、おおお！　し、師匠――――！！」

師匠？

感激に泣き崩れるアレクの肩に手を掛ける。
「遠慮はなしだ。俺のお前の仲だろう」
「ううっ、ぐすっ……はいっ、ありがとうございます、師匠ッ」
ポンポンとその肩を叩いていると、背中に視線を感じた。
俺は背中の気配には敏感なのだ。
「……」
「（くるり）やあ。アレクくんがたびにでるので、そのあいだ、このみせをみてあげることになったよ」
「……。お主」
狐の身で、冷凍された魚介のような目で睨め付けてくるとはこれイカに。
実験は成功し、アレクは人生の目的を得て、俺たちは当面の生活スペースを確保できた。
全てがうまく行ったというのに、ふむ、何が気に入らないのだ？

Wandering Wonder 12

「師匠！　行ってきます！」
「ああ、行ってこい」
「はいッ！」

威勢良く飛び出して行くアレク。空にかかった『アンク・サンブルス』の虹にも気付かないくらいなのだから、次の街に着くまでに冷静さを取り戻すことはなさそうである。
コッズが彼に話した冒険譚の中には、未だ未探索の遺跡、謎を残したままの洞窟の情報があるらしい。まずはそれらコッズの足跡を辿るという。
そしていつか、俺の話した『イギリス』へも行ってみたいらしい。グレートブリテン島にあることは教えてあげたので、是非、頑張って頂きたい。

「……（ジト目）」
「もうそろそろ、その目はやめろ」
「お主はやはり、危険な男じゃ」
「否定はしない。同時に俺は自分の行為を弁解するつもりはない。アレクにとって、冒険者として生きる道こそが最良だと考えたのもまた事実だからな」

安定した居住スペースが欲しかったことも事実だが、聞かれていないことを口にする必要はない。

「むむっ……その点に関しては妾も同意見じゃが……じゃが、お主は危険な男じゃということに変わりはない！」
「否定はしないというに」

「はぁ……全く、今日一日で５０年分の驚きと動揺を味わったわ」
……一体何年生きているんだ、この狐は？
「それより、待ち合わせの時間だ。店を閉めて、シャルを迎えに行くぞ」
「飯の時間かや。それは楽しみじゃのう。人の街のもっとも良いところは、飯がうまいことじゃからな」
「腹ぺこキャラはお呼びじゃない」
「阿呆！　食のうまさは豊かさの証じゃ。人の世の安寧をかみ締める幸せこそが、妾の楽しみじゃと言うておるのじゃ」
「ご高説は承っておくが、その涎の垂れた口元こそ隠さねば、説得力はないに等しいんだがな」
「くふふ、サチアロの串はあるかのう」

狐はすでに俺の話を聞いていない。
トンと、つま先立ちとなると、

「喜びは我とあり　我は今そちとある　そちが並べる馳走こそが我に喜びを与えてくれる
サチアロ　アピアにメルバーユ　鳥ならティンクが好物じゃ」

高い歌声。くるりとくるりと身を回転させながら、食材の名を論（あげつら）う狐の舞い。

「愉しみは我とあり　我は今そちとある　そちが据える膳こそが我に愉しみを与えてくれる
マシアロ　スーリはセレムに絡め　魚は焼いたラキじゃろう」

舞いを捧げる対象は、これもまた神なる存在なのだろうか。

食に対して感謝を示すことは、この異世界においても変わることはないらしい。
一神教徒が祈るように、多神教徒が手を合わせるように、この世界では舞いにより、その意を示すのだろうか。
ニアヴの身に纏う布服は、日本人的には巫女の姿を連想させるものであり、そのニアヴの舞いは、まさに具現化された日本の原風景である。

シャラン――

舞い終わり、ニアヴがトン、と振り返る。
神楽鈴の幻聴すらも聞こえる、そんな神聖な静寂を――

不覚にも俺は、それを美しいと思ってしまった。

「……バカをやってないでさっさと行くぞ」
「バカとはなんじゃ！　妾の舞いは、それはありがたいものなのじゃぞ！？　それを目にした旅人は、それはそれはありがたがり、一切の食材を供えてゆく程にのう」
「崇られないように、の間違いだろう」
「くっ、もうよいわ！　お主に雅（が）を求めたのが妾の間違いじゃ！」
「理解は早くて助かる」

心からの感動を伝えたりすれば、この褒めて褒めて狐がどれだけのぼせ上がるかわからない。
いずれ言葉にする日がくるかもしれないが、今ばかりはこの感情――俺の不覚と相殺させてもらおう。

アレクから預かった店を閉め、俺たちは待ち合わせの場所へと向

かう。
『ロッシの梢亭』へは、来た道を更に戻ることになる。
そこそこの時間が経過したはずだが、未だに街行く人々は空を見上げては声をあげており、見上げる虹の向こうに、赤みを帯びてきた日が透ける。

「美しいものだ。これは観光資源として、更なる集客効果が期待できるんじゃないか」
「人に害をなす効果がなければよいがの」
「なに、虹に『内側の人間をすべて殺す』などという効果があるなら、今頃はこの街は滅んでいる。そうでないなら、問題ないということだろう」
「な恐ろしいことを言うではないわ！　『アンク・サンブルス』の魔法効果は今もってわかっておらんのじゃからな！？」
「ならばこそなるようにしかならないのだから、今ここでどうこういってもしかたないだろう」
「むむうっ」

心配性の狐との不毛な会話も、全てが更なる言語解析の助けとなる。
ここまで、無駄な会話は何一つない。

そうこうするうちに、そこはすでに待ち合わせの場所である。
『ロッシの梢亭』の前で、見慣れた少女がブンブンと大きく手を振っていた。

「こっちですー、ワーズワードさーん！　ニアヴさまーっ！」
店先で待っていてくれたようだ。
俺達を見つけ、なにやらあわてた様子で駆け寄ってくる。

何かあったのだろうか？

「た、大変です！」

「どうした？」

ピンとたった耳の緊張感から、本当に大変なことが起こったのだと、予測できる。

一体何が――

「大変なんです！　空に『アンク・サンブルス』の虹がですねっ！」

……ああ。

そういえばシャルはまだ知らないんだったな。

やれやれ、少し落ち着かせたら誤解を解くことにしよう。

◇◇◇

「――というわけじゃ、心配せんでよい。いや、警戒はすべきじゃがな。全てこの男の仕業じゃ」

どれとどれを合わせての全てなのか、詳しく聞きたいところだな。

それ以前に全ての責任が俺にあるような言い方はやめてもらいたいものだ。

「えーーっ！　それじゃあ、この虹は、ワーズワードさんが犯人だったんですかっ」

「シャル、別に禁止されている違法行為を行ったわけではない。被害者がいないのだから、犯人という呼び方はこの場合該当しない」

もっとも、被害者はなくとも、青甲冑――ルーケイオンは確実にその『犯人』探しをしているだろうが。

『ロッシの梢亭』。一階はオープンテラスの飲食店となっており、おそらく奥には個別の寝室を備えた標準的な宿泊施設なのだろう。

『ロッシ』が人名だとすると、調理場からたまに顔を覗かせる、あのヒゲモジャ氏がロッシ氏なのだろうか。『ロッシの梢』までで意味をとれば、樹木の名前なのかもしれないな。

まだ日も完全に沈みきっていない時間帯なのだが、ここそこに酒を酌み交わす冒険者の姿があった。

耳をそばだてれば、そのどれもこれもが『アンク・サンブルス』についての話題のように聞こえる。

こちらも、シャルと別れてからの話題を肴に、早めのディナーである。

提供された酒類に、狐は早々に酔いしれていた。味は完全にビールだ。冷えていないのであまり飲む気はしなかったが。

「ふえええぇぇ、アーティファクトって作れるものなんですかぁ」

「ああ。正確にはアーティファクトではないので、『マジックアイテム』というべきだがな」

期待通りの反応、ありがとう。

「それで、その武器屋のアレクさんのお家を預かることしたって……あれ、ワーズワードさん、武器屋さんになるんですか？」

「折角物を売れる店舗があるのだから、生活費を稼ぐ程度には利用できそうだ。基本的には寝泊まりできる場所がタダで借りれたということだな」
「街にきてすぐお友達ができて、お家まで貸してくれるなんて、すごいです！」
「全くもって……ありえんのじゃあ！」
「だが事実だ。……っと、いい加減に飲むのを止めたらどうだ」

もっとも、お友達云々のくだりはアレクの主観に沿えば、だが。

「と言うわけでシャル、君もどうだ？　宿泊も安くはないのだろう」
「そうですねー。あ、でも今日はもう宿に荷物もいれてしまいましたので、大丈夫です」
「そうか」
「いえ、お誘いありがとうございますっ、明日はお世話になっちゃうかも知れません、えへへ……」

照れたように耳をくねらせるシャル。
この世界で初めて出会ったのがこの天真爛漫な少女だったというのは、地獄に仏、最大級の幸運の一つだろう。

陽が暮れてきていた。
当然ながら、この街に街灯などというものはない。日暮れ＝今日一日の終了である。

「さて、【フォックスファイア／狐火】の魔法があれば夜道も問題ないが、そろそろ店に戻った方がよさそうだな」
「そうですね……でも、もう少しだけ待ってください。『あれ』がそろそろ始まりますからっ！」
「あれ？」

「はいっ！」

何が始まるというのだろうか。

「くふふ、見て驚くがよいぞ！」

「あ、ほら！　はじまりました、見てください――」

俺は、突き出されたその指を見る。

「きれいな指だな」

「はうっ……あの、私の指じゃなくて、あっちをですね」

「わかっている、冗談だ」

「あうあう」

「……」

「だから、その目は止めろと言った」

さて、何が始まるというのだろうか。

Wandering Wonder 13

時間は少し遡る。

『朱雀門』門下、ルーケイオン詰め所。

「遅いッ！」

「ご、ごめんなさぁぁい！」

そこには青い甲冑に身を包んだ偉丈夫オルドと、赤いローブに身を包んだ魔法師セスリナの姿があった。

本来騎士隊たるルーケイオンと魔法師隊たるラスケイオンは、同じ守備隊であっても、その指揮系統は独立しており、二人の間に上下関係はない。

だが、セスリナにはオルドから叱責を受けるある特別な事情が存在した。

「だって、お兄ちゃん……」

「馬鹿者！　一度制服に袖を通したなら、そうと呼ぶなと言ったはずだ！　そもそも、格式あるマーズリー家の娘が、ちゃん付けで兄を呼ぶなどッ」

「オ、オルドお兄様！　ご、ごめんなさいぃ！」

「オルド『隊長』だ！」

そう、オルド・ラル・マーズリーそしてセスリナ・アル・マーズリーは、歴とした兄妹なのであった。

温厚で知られるオルドを怒らせることが出来る唯一の存在、それがセスリナである。

「見ろ、この空を！」

もちろんそこには、大きな虹が街を覆っている。

「うん、きれいだよね、や、きれいでございますね」
「そうではないだろう！　これは『アンク・サンブルス』の幻虹、一体なぜこのようなことが起こりうる！？」
「そ、そんなこと私にもわからないよぉ……」
「もちろん答えを聞いているのではない。ラスケイオンの皆は原因究明のためトルテ広場に急行しており、ルーケイオンもまた総出でこれを行った者を探している。ルアン公からは急ぎの報告も求められており、今この街は大きな混乱の中にある！　それなのにお前という奴は！」
「だ、だって、私も今日初めての『お役目』だったから、昨日からずっと緊張してて――」
「言い訳になるか！」
「あう～～、ごめんなさいぃ」

頭を庇うように、小さくなるセスリナ。
もちろんオルドも妹憎しで叱りつけているわけではない。むしろ、責任ある一人前の大人になって欲しいからこその、愛の鞭である。
だが、未曾有の事態が立て続けに発生した今日ばかりは、さすがに感情がささくれ棘の鞭となってしまうのは、許される範囲の装備変更だろう。

「全く、ルアン公にはニアヴ様がお忍びで来られていることの報告も合わせて行わなければならんというのに……待て『世界の秤』た

る濬獣（ルーヴァ）の一人が街を訪れた日に『アーティファクト』が……こんな偶然は、考えられない。まさか、一連の事件は全てつながって――」

思考に埋没するオルド。その隙をついて、セスリナがこそっと逃げ出そうとする。

「わ、私『お役目』の準備があるから、行くね、お兄ちゃん」

「待て」

ブン！

その足元に、長槍が突きつけられる。

「ひゃい！」

「話はまだ終わっていない。……その包みはなんだ？」

「えっ？　これ？　ううん、なんでもないよ？」

妹とは彼女が生まれて以来の長いつき合いである。妹は嘘をつくとき、その視線が斜め上に流れるという癖があることを彼は知っている。その癖を知らなくても、十分に不審な挙動であるが。

とかく嘘の下手な妹なのだ。

「……」

グイ。

「あっ、だめ！」

引っ張られた布が、地に落ち、その姿を見せる。

「こ、これは――！」

赤い杖身の先にこぶし大の宝玉が埋め込まれた杖、それは、

「マーズリー家家宝『スタッフ・オブ・マーズリー』！　こ、こんなものまで持ち出して……」

なわなわと震えるオルド。それほどまでに、ありえないことであった。

『アーティファクト』は、遺跡より発掘されるものばかりではない。古の王国は滅びたが、そこに暮らす全ての生命が滅びたわけではないからだ。

系譜が辿れぬほどの時間の流れがあったとしても、その血は確実に今の時代までつながっている。

そして、血と共に残るものもまたある。

この世界で王族・貴族と呼ばれる階級の家々は、己の血の正当性の証として『アーティファクト』を秘蔵している場合が多い。

更に言えば、発掘された『アーティファクト』は、利用方法・魔法効果もわからぬまま、帝宮の宝物庫に収められることもままあるが、そんな使い方の変わらないアーティファクトに比べ、由緒ある『アーティファクト』であれば、その発動方法、魔法効果の情報も残されているため、ものの価値としては通常のアーティファクトを数倍する場合さえある。

もし、この杖の価値を知るものが、無防備無警戒のこの妹に目をつけてたとしたら――

「えへへ、大丈夫だよ、途中で変な人にぶつかってこの杖を見られたけど、『アーティファクト』だってことは、気付かれなかったか

ら！」

目の前が真っ暗になるオルドであった。

「……もういい。早く持ち場へいけ……」

「いいの、や、いいのですか？」

今からセスリナが向かうのは『朱雀門』の最上階。ある意味で、他のどんな場所よりも安全だからだ。

「階下に部下を控えさせておく。役目が終わったら、必ず、か・な・ら・ずっ！　部下の警護をうけて屋敷に戻るのだ……良いな！」

「う、うん！　わかった！」

本当であれば、今すぐ屋敷に帰したいところだが、『スタッフ・オブ・マーズリー』の持ち出しを許可したのは、マーズリー家当主たる父だろう。

ならばそれは、今日のお役目を万が一にも失敗させたくないと言う親心に相違ない。

親バカの類ではあるが、その気持ちが全く判然らない兄でもなかった。

今日セスリナが任された『お役目』はユーリカ・ソイルに暮らす全ての魔法師にとって、最大の名誉なのだから。

『朱雀門』の二塔にそれぞれ一人づつ、軍女神・熙？（カグナ）碎によりもたらされた火炎によって、街を照らすその大役。

それは、塔自体の反射光も相まって、夜の街に幻想的な炎のイリュージョンを産み出すのである。

それは日が暮れ、道を失った旅人への導きの標として。街を訪れた観光客の楽しみの一つとして。そしてまた、街に暮らすものへ安心を伝える平和の象徴として。

魔法の力を持って街を護る『ラスケイオン』に与えられた重要な、そして名誉ある任務。

それが、ユーリカ・ソイル名物――『天空のかがり火』なのだ。

オルドとしても、今日の妹の晴れ舞台を楽しみにしていたのだ。少なくとも、あの朱雀門での一騒動が、そして続けざまのアンク・サンブルスの一件が起こるまでは。

駆けて行く妹の背を一瞬目で追った後、オルドは彼本来の役目に戻る。

事態を把握するためにはまず――お忍びだと言われたニアヴ様の消息を追わなければなるまいか。

「この街で、一体何を起こっているというのだ……」

◇◇◇

『朱雀門』赤塔、最上階。

「お兄ちゃんも許してくれたし、私も頑張らないと！」

許してくれたというのはいささか己に都合の良い解釈かもしれない。

だが、どちらにしても、彼女には果たすべき役目があるのだ。
赤く染まった空が、徐々に暗色を帯びてくる。
『スタッフ・オブ・マーズリー』。正式な名称は『軍女神の涙杖』。
軍女神・熙(カグナ)?碎の燃える涙を封じ込めた杖だと伝えられる。
隣の塔では、既に先輩魔法師が美しい円形の火炎球を産み出していた。

『あ、ほら！　はじまりました、見てください――』

地上の『ロッシの梢亭』で、シャルが指差したものがこれだった。

セスリナも一つ深呼吸をして、杖を上空に掲げる。

大丈夫、家宝の杖が自分に力を分け与えてくれる。
同じ魔法師である父が、この杖を使ったときは、直径五メートルはある巨大な炎の玉を産み出した。
今でもその場面は、巨大すぎる炎への恐怖と共に覚えている。

杖に向かい、信仰の祈りを捧げる。祈りは熙(カグナ)?碎に届き、故を持ってその力を貸し与える、と伝えられているからだ。

「燃ゆる熙(カグナ)?碎　に希(こうねが)う　我が祈りに応え　その慈しみを炎に変えるべし――」

魔法師として、そしてまた炎に由来する『スタッフ・オブ・マー

ズリー』を世に伝える血筋の末娘として、セスリナの信仰心はそこそこ強い。

そんな彼女の祈り（コマンドワード）に、戦火の女神は最大級の慈しみをもって応えた。

◇◇◇

シャルの指差す方向。そこには『朱雀門』があった。

その頭の先に、おそらく魔法で産み出したのであろう、火の玉が浮かんでいた。

まるで、大きな一本の蝋燭のようにみえる。

「これが、ユーリカ・ソイル名物の『天空のかがり火』ですっ！」

ああ、そう言えば街に入る前に聞いたか。なるほどな。

「魔法を使った灯台のようなものか。きれいなものだな」

「もうすぐもう一つの火も灯ると思います。そしたらもっと――ふぇ！？」

シャルの言葉が中断されたのは、いきなり生じた、巨大な火の玉の眩しさによるものだろう。

塔の上に小さな太陽が生まれていた。

『黒塔』が蝋燭であれば、『赤塔』はジョイスティックだ。

そしてジョイスティックは、かなり離れた場所にいる俺たちに影

を作らせるほどの強烈な火の光を放っていた。

もしあれがこのまま街に落ちてきたら、三桁単位の死傷者が出てもおかしくない、そんな危険を感じる代物だ。

だがまあ、街の名物としてやっているのであれば、管理されているものだろうし、さすがにそんなことはないか。

「確かにこれはすごい迫力だ」

「えっ、はぁ。あの、こんなの私も見たことないような……」

「……はあぁぁ？　あのような大火球、妾でも産み出すことはできんぞ！？　ワーズワード、お主また何かしでかしおったのかや！」

一気に酔いから醒めたニアヴが、まるで見当違いなことを口走る。

「ひどい言いがかりだ。俺はあの見せ物を今初めて知ったのだぞ。なんでもかんでも俺のせいにしてもらっては困る。そういうのは難癖というのだ」

「む、うむむ、確かにそうかや……今のは妾の不明じゃ、すまぬ」

「いいってことだ」

短気な狐も、さすがに自明の理であることについて、素直に謝罪を示すだけの器量はあるようだ。

しかし、魔法のエキスパートであるニアヴを驚かせるほどの炎の魔法とは、この街にもなかなかすごい魔法使いがいるようである。

その内あえる機会もあるだろうか。

皃靆霪熙熙熙熙熙皃熙罕――――――――――――

悲痛な響きを伴った、長く尾を引く叫び声。
遠い風にとけて、そんななにかが、聞こえた気がした。気がしただけなので、もちろん気のせいだろう。
俺たちはその巨大な火の玉に照らされながら、またしばらくの間、とりとめもない会話を続けることとなった。

驚きに満ちた異世界の一日が終わりを告げる。
次なる舞台には一体何が待ちかまえるのか。

そして、ワーズワードの冒険は続く。

Ｗａｎｄｅｒｉｎｇ　Ｗｏｎｄｅｒ　１３（後書き）

日が暮れたので、ここでエピ２終わりっと。

連続ＵＰはとりあえずここまでです。
エピ３は、１２月中には開始予定ってことで。

Wayfarer's Witchcraft－shop 01

ゴゥンゴゥンゴゥン……

今日も朝からいい虹だった。

朝とは言っても、まだ太陽はその顔をやっと覗かせたばかりである。

狐は、今もベットの上で丸まって眠っている。

俺はと言うと先ほどひとっ風呂あびたら、眠気が飛んでしまった。

今後の行動方針について、いくつか決定したのだが、その最優先二事項のうちの一つが、当面の生活費の確保、つまり金策である。

見たところ、この世界の通貨制度はそこそこに成熟している。であれば、金銭を得ることで今後選ぶことの出来る選択肢は増えていくだろう。

そのために、夜中に一人で色々準備したのだ。

さあ、新生『竜と水晶の店』、開店セールの準備を始めよう。

◇◇◇

石造りの商店建屋は、大まかに言って、店舗スペース・居住スペース・地下倉庫の三つの空間に別れている。そして、小さな裏庭までついた理想的な一軒家である。

裏庭は上水道の引き込み口を兼ており、店の裏筋に大通りと平行

するように引かれた石造りの用水路、小水門とも言うべき仕切り板を外すと、個別建家の庭に上水を引き込むことができるようになっている。必要な分を汲み上げたら、また仕切り板を戻す。それにより、上水を水源から離れた家々にも行き渡らせることができるというわけだ。

原始的ではあるが、よく考えられた水道設計である。

まぁ、ウチには必要ないんだが。

居住スペースには独立した三部屋があり、その内一つはＬＤＫ（リビングダイニングキッチン）である。土間とも言う。

地下倉庫は、まあそのままだ。在庫の武器類や、ガラクタで埋められていた。

昨晩のうちに、売り物の剣やらナイフやらを全てぶち込んでおいた。それらをまた出そうと思えば腰が死ぬので、アレクが帰還するその日まで、日の目を見ることはないだろう。

今日からは別のものを売ることになる。なにせ、新生、だからな。

がらんとした店内に、新しい『商品』を並べて行く。

「うにゃぁー……」

そこでニアヴが起きてきたようだ。

「猫のような声を出すな。狐だろう」

「……どちらでもないわ。妾は濬獣（ルーヴァ）じゃぞ」

そういえばいまいち適当な置換（デコード）訳が見つからなかったので発音そのままのルーヴァで聞き流しているが、どういう意味なのだろうか。

寝ているうちに着崩れたのであろう布服がだらり垂れ、胸元を大きく開口させている。

「帯はちゃんと締めなさい」
寝惚け眼をかいぐりかいぐりしている狐の化生の、ほどけた帯を締め直してやる。
「くあぁぁ……人の街で眠ったのも久しぶりじゃ。おはよう、ワーズワード」
「ああ、おはよう」
「で、早速またなにかしておるようじゃが、それはなんじゃ？」
「これか。この店で売ろうと思っている新しい『商品』だな」
「お主、小僧の店を勝手に……まあよいわ。それで、ん……それは、ビン、かや？」

俺が店内に並べているのは、その通り、透明なガラス瓶だった。
おそらくは、薬品を封入する小瓶だったのだろう。空ではあったが、コルク栓つきで２０セットほどあったので、中を洗浄し、布の切れ端を敷けば完成である。

「売れそうなものか、あとでシャルに意見を聞くつもりだったんだが、お前の意見も聞いておくか。需要はあると思うのだがな」
「これに需要がのう。確かに妾では、商品の善し悪しは答えられぬであろうが、見るだけはみせてもらおうかや」

その目はすでに、こんなものが売れるのかという疑念に満ちている。だが、これはまだ外枠だけなので、評価を下すのはもう少し待って頂きたい。

単純に窓がないという理由により、店舗スペースは薄暗い。
だが、それが都合良い場合もある。

「さて、売り物というのはこれだ」
俺はカウンターに置いていた木箱の中から、それを一つ取り出す。
「ガラス玉、かや？」
「これを、この中に入れてだな――」
入れただけでは、何も変わらない。
ポフと軽い音を立てて、敷布の上に、ガラス玉が乗っただけだ。
「でフタを閉める、と」
キラキラキラ……
キュポっと蓋と閉めたことがスイッチとなり、瓶の中のガラス玉から黄金の炎が吹き上げ、まばゆい光を放ち始めた。
薄暗い店内が、一気に色づく。
「……はああ！？？」
ニアヴが目を丸くして、驚きを露わにする。
「昨日実験した【フォックスファイア／狐火】の別バージョンだ。フタの開閉をスイッチにして、魔法効果が発動するように設計した。【狐火】の特性の一つ『対象物以外を燃焼させない』ところに着目し、熱を発せず、その光源効果のみを発生させる照明器具だ。【フォックスライト／狐光灯】の名称で売り出そうと思っている」
夜間照明はそれほど発達していないようなので、手軽に扱える照

明器具は、需要があるのではないだろうか。

「……はあああああ！？？」

「そしてもう一つがこれだ」

とはいえ、それに需要がなくて全く売れないとなると行き詰まってしまうので、初めから二つの商品を準備して、売れた方を量産する方針である。

用意するものは、革製の水筒とガラス玉である。

「昨日『アーティファクト』の中には『酒の溢れる壷』というのがあると言っていただろう？　なので、それを真似て作ってみた。【ウォーターフォウル・ボトル／降鵜水筒】、効果はまぁ、そのままだ」

革袋の口を弛めれば、コポコポと革袋の奥から水が湧き出してくる。口を閉じれば湧出効果も停止する。残った水を排出すれば、ペシャンコの革袋だけになるので、持ち運びにも便利である。

これを作ったがゆえに、ウチに上水は必要なくなったというわけだ。そもそも、上水とはいえ所詮は生水である。日本育ちの俺が、こんな異世界の生水を飲んだりすれば、一発で腹を下すことは想像に難くない。日本人は繊細なのだ。そこで考えついたのが魔法的に生み出された純水の存在である。

【ウォーターフォウル・レイン／降鵜雨】の魔法は【狐火】ほど融通が利かず、この『水筒（革袋）内でゆっくりと微量の水を産み出す』制御には、かなり手こずったのだから、一つぐらいは売れてくれないと、俺の苦労が無駄になってしまう。

「元々は別の理由で作ったものだが、冒険者という職業が存在する

のなら、売り物としての需要もあるのではないかと思ってな」
「はあああああああああああ！？？」
「正式に商品化するなら、ガラス玉が水と一緒に流れ出てこないよう一工夫が必要だろうが、今はまず日銭が欲しい。多少品質の悪さは、値段に反映させれば良いだろう」

以上二点の商品を持って、『竜と水晶の店』は魔法道具店に生まれ変わり、新装開店とする予定だ。

「どうだ、売れると思うか？」
「……あ、あ、あ、」
「ん？」
「阿呆かーーーー！」

なんだ、朝っぱらから失礼な。

◇◇◇

「『アーティファクト』、それも『マジック・アーティファクト』は、そもそも個人所有すら難しい至宝なのじゃ！　それを店先に並べて売れるか、じゃと！？」
「レアリティについては昨日聞いた。だが同時に、そこそこ量産できることも検証できたのだ。そもそもこれらは、お前の言う『アーティファクト』とはまた別物だと考えている。故に『マジックアイテム』だ。値段の問題なのであれば、そこまで高値を付けるつもりはないが」
「ちがうわっ、そんな商売ありえんじゃろうと、言っておるのじゃ！」

「……売れないのか？」
「う、う……」
プルプルと震えながら、キッと顔を上げるニアヴ。
「売れるわ、阿呆ーーー！　なんなら、妾も欲しいくらいじゃあぁぁ！」
なんで、涙目になってるんだこの狐は。
否定なのか肯定なのかもわからない。やはりあとでシャルに聞いてみよう。
「欲しいなら、ほら」
ガラス玉の入った小瓶を、その手に握らせる。
一瞬あっけにとられたニアヴだが、次の瞬間にはパァァァァという効果音つきの喜びを発散させ、その目に星を輝かせる。
「良いのかやっ」
「当たり前だ」
もともと、ニアヴに魔法を見せてもらっていなければ、生まれていない商品である。
ガラス玉のある限り量産できるものなので、一つや二つは安いものだ。
「おおっ……これは面白いのじゃ！」
パカパカとフタを開け閉めして、喜ぶニアヴ。
【狐火】なら自分で出せるだろうに、なにがそんなに面白いのだろ

うか。
まぁ、カラスにも光り物を集める習性があるしな……
アンク・サンブルスの件もそうだが、いわゆる『アーティファクト』、魔法効果の付与されたアイテムというものは、ニアヴの『面白いものが好き』趣向の中でもかなり上位に位置するようだ。

「さて、それでは開店前にまずは食事だな。用意しておくから、お前は先に風呂に入ってこい」
「ん、水浴びができるのかや」
「ああ、俺も入りたかったからな。タルが余っていたので、裏庭の軒下に設置しておいた。下水口の関係で場所は変えられないが、カーテンをつけておいたので、問題ないだろう」
「わかったのじゃ」

テクテクと歩いて行くニアヴを見送り、残りの商品を手早く店内に並べて行く。
準備した【狐光灯】の個数は２０。先ほどニアヴに渡した１個を引いて１９。あとは展示用に２個は非売品とするとして、売れる数は１７か。
【降鵜水筒】は、さらに数は少なく３個だけだ。基本的に、店の在庫品やら、その辺に転がっていたものを再利用しているだけなので、今日ちゃんと数が売れれば、次回は素材調達から始めなくてはいけない。

「なんじゃこれはーーー！！」

とそこで、そろそろ聞き慣れた叫び声がした。
いちいち騒がしいヤツだ。

ダンッと床石を踏み鳴らし、ニアヴが飛び込んでくる。

「ワーズワード！」
「ッ！　……今度はなんだ」
「ゆ、ゆ、」
「ゆ？」
「湯が張ってあるではないかッ！？」
「風呂だからな」
「湯浴みなぞ、人族でも権力あるものしか準備できぬものじゃろうが！」
「とは言ってもな。さっき見せただろ。これを」
「【降鵜水筒】……といったかや」
「タルで同じことをやれば【ウォーターフォウル・バレル／降鵜樽】になる。そして、その中にもう一つのガラス玉を沈める。名前はそうだな……【フォックス・ヒートコア／狐熱核】とでもしておこうか。【狐光灯】が炎の『光源効果』のみの魔法特性を付与したものであるならば、その逆もまた然り。炎の『熱源効果』のみを付与することもできるのは当然だ」
「なん……じゃと……」

またもや絶句するニアヴ。それは未だ魔法付与をありえないものと捉える固定観念が抜けていないからだろう。

「合わせれば、【ホット・ウォーターフォウル・バレル／沸鵜樽】……言いにくいな、つまり風呂の完成だ」

基本的に、火と水というだけでも、いくらでも使い道があるのだ。利用するシーンさえ浮かべば、それに合わせて魔法効果を付与してやるだけである。必要に応じてその発展形を考えるのは当然のことだ。

ちなみに【沸鵜樽】は底に簀の子を敷いたゴエモンバス・スタイ

ルである。適当に作ったので、湯は湧き続け、タルからこぼれ続けている。

「――もうわけがわからぬわ！　お主はどれだけ妾を驚かせれば気が済むのじゃ！」

「そんなつもりはないのだがな……それより」

「なんじゃ！」

「……そろそろ風呂に戻ったらどうだ」

いくら半分獣だと言っても、もう半分は女性の身体特徴を備えているのだ。

すっぽで仁王立ちなどと、異性の前ですることではなかろう。

「……ひゃぅ」

やっと自分の状況に気付いた狐が、バッと壁の裏に身を隠し、顔だけを覗かせる。

「うううぅ、み、見たなぁ」

「見せた、の間違いだろう」

「わ、妾が気付くまで、ずっと、い、いやらしい目で見ておったのであろっ」

なんでちょっと誇らしげなんだ、この狐は。

「そう言われてもな……ああ、思ったより身体つきは人間寄りなんだな。もっと毛だらけなのを想像していたのだが」

「な、なななな！！」

羞恥と怒りが狐の頬を真っ赤に染め上げる。

「絶対に許さぬのじゃあああああ！！！」

絶対宣言を行って、狐が逃げて行く。

まぁ風邪を引くまえに、とっとと風呂に戻るのは正解だ。

通りにでれば、もぎたての果実や鮮魚を売る露店がすでに客を集めている。

欲を言えば塩や醤油が欲しい所だが、食材が新鮮であればそれでよい。

天気は快晴。そうだ、椅子と机を外に出そう。

やはり食事は、明るい場所で取るのがよい。

Wayfarer's Witchcraft_shop 01（後書き）

エピ3開始。
ワーズワードさんの辞書に自重という文字はありません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3817y/

ななしのワーズワード

2011年12月17日23時50分発行